

特25-354



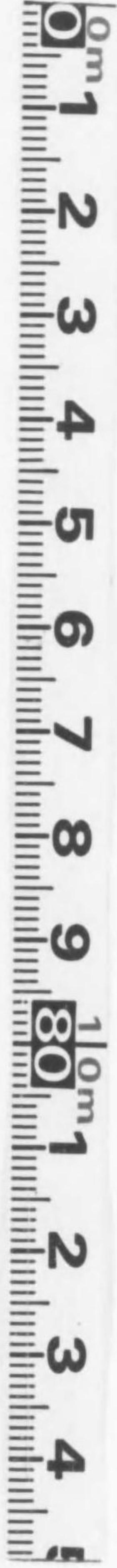
\*1200800155852\*

館書

函 五 世 門 新

架 六 部 一

號 類



始





東京府書館

新門  
三部  
五類  
二二函  
二册  
号

TOKIOFU LIBRARY

特25  
354

英國虞里應氏著  
日本桑田衡平譯

# 病理新說

明治九年八月二  
十四日板權免許

譯者藏版



病理新說緒言

原書ハ英京倫敦ノ醫學博士虞里應氏ノ著作ニシテ彼ノ紀元一千八百七十六年ノ刊行ニ係リ病理學ト病體解剖學トヲ併セ論スル所タリ夫レ病理學ノ明カニシ難キ醫學諸科ノ最ナル者ニシテ歐米諸洲ノ大家國手ト雖モ尙或ハ其蘊奧ヲ悉クシ難キ所アルカ如シ今此一小冊子ハ固ヨリ此科ノ全局ヲ舉クルニ足ラサレヒ其說簡明序次宜キヲ得且諸名家日新ノ論說ヲ臚列シ絶テ近古ノ陋習ヲ踏襲セス其後學ニ功アル淺少ナラス抑今日我醫道大ニ進歩スト雖モ原書業ヲ攻ムル者未ダ甚タ多カラス又遐陬僻壤ノ醫生ノ如キ一ニ譯書ヲ待タサルヲ得ス而シテ病理ノ一科ニ於ケル其書乏シキ尤甚シ予曾テ之ヲ憾ム頃日此書ヲ繕讀シ漸次譯述ノ梓ニ上ス固ヨリ大方ノ觀ニ供スルニ足ラスト雖モ或ハ僻地刀圭ヲ業トスル者ニ小補アラシカ若シ夫ノ文辭ノ脩ラサルト譯語ノ雅ナラサルト

アルハ予カ不文ノ致ス所讀者幸ニ辭ヲ以テ意ヲ害スル勿レ  
明治九年第九月  
譯者述

病理新說目次

總論	自一
至七	
細胞論	自七
至二〇	
補給機歇絶	自二一
至二〇	
壞疽并骨疽	自二一
至三五	
補給機障碍	自三五
至三六	
消耗	自三六
至四九	
骨質消耗症	五〇



二目

肺氣脹 自五五〇  
 至五五〇  
 脂樣變質 自五七  
 至六四  
 脂肪浸潤 自六四  
 至六五  
 筋中脂肪浸潤症 自六六  
 至六九  
 肝臟脂肪浸潤症 自六九  
 至七三  
 脂樣變形 自七三  
 至八〇  
 動脈脂化 自八三  
 至八〇  
 腦髓脂化 自八四  
 至八九  
 筋質脂化 自八九  
 至九〇

三目

心臟脂化 自九三  
 至九三〇  
 心臟褐色消耗症 自九三  
 至九四  
 腎臟脂化 自九四  
 至九五  
 粘液樣變質并膠樣變質 自九五  
 至一〇〇  
 澱粉樣變質 自一一〇  
 至一一一  
 肝臟澱粉樣變質 自一一三  
 至一一一  
 腎臟澱粉樣變質 自一一四  
 至一一一  
 脾臟澱粉樣變質 自一一九  
 至一一一  
 水脈腺澱粉樣變質 自一二二  
 至一二一

四目

第一道澱粉樣變質	自一二二	至一二三
澱粉體	自一二三	至一二六
加兒基樣變質	自一二六	至一三二
動脈加兒基變質	自一三二	至一三四
色素變質	自一三四	至一四三
肺臟色素變質	自一四三	至一四八
熱性病ニ係ル組織失常ヲ論ス	自一四八	至一五三
補給機増盛	一五三	
肥大症	自一五三	至一五五

五目

贅生	自一八五	至一四五
結締織瘤	自一九二	至一九五
紡錘狀細胞瘤	自一九七	至一九九
球圓狀細胞瘤	自一九七	至二〇〇
髓樣結締織瘤	自二〇〇	至二〇一
砂瘤	二〇二	
纖維瘤	自二〇九	至二一〇
粘液瘤	自二一〇	至二一九
脂肪瘤	自二一四	至二一七

六目

軟骨瘤	自二二七	至二二四
剛骨瘤	自二二八	至二二四
淋發瘤	自二二八	至二三四
水ドキン病	自二三三	至二三六
白血病	自二三六	至三七七
乳頭瘤	自二四一	至二四七
腺瘤	自二四一	至二四六
癌腫	自二四七	至二五七
硬結癌	自二五七	至二五九

七目

髓樣癌	自二五九	至二六一
膠樣癌	自二六一	至二六三
上皮癌	自二六三	至二七〇
筋瘤	自二七〇	至二七三
神經瘤	自二七三	至二七五
血管瘤	自二七五	至二七七
囊瘤	自二七七	至二八四
娠術論	自二八四	至三一四
結核論	自三一四	至三二九



八目

薄腦膜結核 自三三二  
至三三二九

水脈腺結核 三三三

粘膜結核 自三三三  
至三三六

肺結核 自三三六  
至三四二

膿血症并敗血症 自三四二  
至三五三

煤毒 自三五三  
至三六〇

肝臟煤毒 自三六一  
至三六〇

無血管組織ノ焮衝論 三六一

其一軟骨炎 自三六一  
至三六四

九目

其二角膜炎 自三六四  
至三六六

普通結締織炎 自三六六  
至三七二

剛骨炎 自三七二  
至三七四

骨膜炎 三七五

チクロシス 自三七六  
至三七七

カリリス 自三七七  
至三七九

モルリチヌオッシューム 自三七九  
至三八〇

ライケフト 佝僂病 自三八〇  
至三八三

血管炎 三八三

動脈炎 自三八三  
 至三八七  
 靜脈炎 自三八七  
 至三八八  
 心臟炎 三八八  
 心內膜炎 自三八八  
 至三九三  
 心實質炎 自三九三  
 至三九七  
 水脈腺炎 自三九七  
 至三九八  
 急性水脈腺炎 自三九八  
 至三九九  
 慢性水脈腺炎 自三九九  
 至四〇一  
 泰喪土性水脈腺炎 自四〇一  
 至四〇六

粘膜炎 自四〇六  
 至四一〇  
 格魯布 自四一一  
 至四一二  
 實布的里亞 自四一二  
 至四一二  
 痢疾 自四一五  
 至四一五  
 物乙膜炎 自四一五  
 至四一九  
 肝臟炎 自四一九  
 至四二〇  
 肝臟硬結 自四二〇  
 至四二四  
 急性變黃消耗症 自四二四  
 至四二五  
 腎臟炎 自四二五  
 至四二六

二一目

化膿性腎炎	自四二六
腎臟細尿管炎	自四三五〇
腎臟實質炎	自四三九五
腦脊髓炎	自四三九
肺炎	自四四五
格魯布性肺炎	自四四五
加答兒性肺炎	自四五六
肺小葉間炎	自四五六
肺勞	自四八二

三一目

充血症	四八二
急性充血	自四八二
形器的充血	自四八六
тромбозис	自四九六
イムボリスム	自五一二
白血病	自五三〇

病理新說目次終

病理新說

英國倫敦醫學博士虞里應氏原撰  
大日本東京從六位桑田衡平譯述

總論

凡ソ身體ノ變化即チ疾病ノ本源、性狀、經過及ヒ原因ヲ論スル者之ヲ病理學パトロジート謂ヒ又疾病ニ由テ既ニ變化セル組織ヲ論スル者之ヲ病體解剖學モルビットアトモミルトア或ハ病體組織學モルビットヒト謂フ故ニ甲ハ生理學ニ對シ乙ハ健康組織ノ組織學ニ對シテ名ケタル者ナリ  
夫レ疾病トハ單ニ身體失常ノ義ニシテ苟モ某ノ組織或ハ某ノ臟器ニ於テ各自固有ノ官能、性狀或ハ其造構ヲ變スル者アレハ已ニ一身ノ政ニ關與シテ定規ノ如ク各其本分ヲ盡スヲ能ハサルニ至ル概子之ヲ身體ノ失常即チ疾病ト謂フ

從來其疾病ヲ二種ニ分チ一チ形器的ノ病トシ一チ官能的ノ病トシ甲  
 ハ造構ノ變ニ係ハル所ノ諸病ヲ謂ヒ乙ハ斯ノ如キ變化ニ係ハラサル  
 者ヲ謂フナリ蓋シ某ノ臟器或ハ某ノ組織ノ官能タル毫モ造構ノ變ニ  
 係ハラスシテ獨リ自ラ變スルコアルヤ否疑ナキヲ得テ想フニ検査ノ  
 方法益々其精ヲ究メ病體組織學ノ益々擴充スルニ隨テ官能的病類ノ減少  
 スルハ必然ナリ假令未タ其組織ノ變ヲ發明スルコト能ハスシテ今尙官  
 能的ノ病ト稱スル所ノ病類太ク多シト雖モ後來愈々發明ヲ極ムルニ及  
 ンテハ終ニ諸病皆多少物質ノ變ニ係ハラサル者ナキニ至ラン  
 又健康トハ唯疾病ノ反對ヲ謂フノミ固ヨリ生活官能現象ノ度ヲ限局  
 シテ一チ健康ト名ケ一チ疾病ト稱スルニ非ス况ヤ其健康ヨリ疾病ニ  
 變遷シ又疾病ヨリ健康ニ復スルモ太ク緩除ニシテ曖昧タル者多キニ  
 於テチヤ豈判然タル境界ヲ以テ之ヲ區別シ得ヘケンヤ

上件論スル所ノ如ク疾病ハ本來唯生活官能ノ失常タルニ過キス故ニ  
 苟モ病理ヲ講究スル者ハ必ス先ツ此生活官能ノ何物タルヲ知ラス  
 ハアル可ラス抑生活ナル者ハ組織ノ發生維持ト各種其官能ノ現象ト  
 ナリ以テ成リ其發生維持ハ即チ補給機ニシテ連綿絶エス新タニ滋養品  
 ナ供給シ血液ヨリ之ヲ分チ採リテ各自組織ノ成分ニ充テ又其組織ノ  
 費耗ニ由テ生スル所ノ老廢物ヲシテ之ヲ體外ニ謝シ去ラシムルコト  
 リ又其官能ハ全ク組織ノ發生維持ト異ナリ各部固有ノ生活現象ニシ  
 テ例之ハ分泌腺ノ細胞ニ在テハ一身ノ政ニ關與シテ各自己ノ本分ヲ  
 達センカ爲ニ某ノ物質ヲ血液ヨリ採リテ之ヲ化成シ又神經系ニ在テ  
 ハ運動及ヒ知覺ヲ傳達スル等ノ如キ是ナリ乃チ此官能ノ現象タル固  
 ヨリ補給機ニ隨テ顯然盛衰ヲ爲ス者ニシテ此兩ツノ者常チ失ハサレ  
 ハ其人健康ヲ保チ常ニ違フコトアレハ則チ病體ト爲ルナリ今其官能及

ヒ補給機ヲ變セシムル所以ノ者ヲ左ニ論載セン

(第一組織)夫レ健康體ノ榮養ハ專ラ組織ノ力ニ依ル者ニシテ常ニ其成分ヲ血液ヨリ採リ之ヲ自己ノ組織ニ化成スルカ如ク疾病ニ於ケルモ亦專ラ其障害ヲ被ムル者ハ此組織ニシテ凡ソ病的作用中組織ノ變ニ關ル者ヲ最モ多シトス

(第二血液)血液ノ循環及ヒ調和ノ摸樣モ亦組織ノ變ニ兼テ其補給機ヲ變スヘキ一大原因トス何トナレハ血液ト凝結組織トハ相互ニ關涉スルヲ親密ナルカ故ニ苟モ血液ノ調和ヲ變スルヲアレハ多少必ス補給機ヲ變セサルヲ得サレハナリ然レ獨リ血液ノ變ヲ以テ病ノ原因ト爲サント欲セハ必ス左ニ之ヲ服膺スヘシ夫レ血液ナル者ハ常ニ弘ク他部トノ關係ヲ保チ其成分ヲ體外ヨリ採リ順次ニ之ヲ化成スル者ナレハ假令稀ニハ獨リ血球固有ノ榮養機ヲ變シ之カ爲ニ血液ノ調和ヲ變

スルヲナキニ非スト雖モ其調和ヲ變スル所以ハ概チ皆食物ノ不頁或ハ不足、水脈系造構ノ病、分泌器或ハ排泄器ノ失常等ノゴトキ血液製造機能ノ變ニ係リ或ハ又體外異物ノ侵入スルニ由ル者トス故ニ血液調和ノ變ハ專ラ諸他組織ノ病因ヲ爲スヲ疑ナシト雖モ概チ皆其變化ニ先テ血液製造ノ機能ヲ變シ或ハ自ラ清潔ナルヲ得ス或ハ外來ノ物質ヲ以テ汚染セラル、者トス又凡ソ異物ノ體內ニ侵入スルヤ血液先ツ之ヲ受容スルニ便ナルカ故ニ其變化ヲ血液ニ始ムルヲ多シ例之ハ微細ナル有機毒ニ起因スル所ノ諸病ニ於テ血液ヲ以テ病的作用ノ所在ト爲スヲ屢之アルカ如シ

其他亦血中ノ白血球自ラ其機能ヲ變シ血管ヲ穿透シテ周圍ノ組織中ニ轉移シ以テ病ノ原因ヲ爲スヲアリ是レ脈衝ニ於テ發見スル所ニシテ養生ノ類ニ於テモ亦斯ノ如キ作用ヲ現ス者往々之アルニ似タリ

(第三神經系凡ソ補給機及ヒ官能ノ變化ニ就テ論スルニハ神經系ノ作用モ亦自ラ關係ナキヲ得ス何トナレハ血液ノ循環及ヒ給與ハ固ヨリ神經系ノ作用ニ依テ主宰セラル、者ナレハ組織ノ變換ニ於ケルモ亦多少必ス其作用ニ屬セサルヲ得サレハナリ曾テ之ヲ獸類ニ試驗シ又之ヲ病床實驗ニ徵スルニ凡ソ神經ハ本來血液循環ヲ主トル所ノ感傳神經纖維ノ外直チニ補給機ヲ主宰スル所ノ神經纖維ヲ含有スル者ノ多キヲ實ニ信スルニ堪ヘタリ今茲ニ有名ナル「リニドウィグ氏及ヒ「ヘーデンヘイン氏ノ經驗說ヲ引テ之ヲ證セン曰鼓膜索神經ノ下顎腺ニ於ケルヤ此神經ヲ刺衝シテ腺ノ分泌ヲ增多スル所以ハ單ニ腺中分泌ヲ司トル所ノ元質按スルニ即チ細胞ヲ云フノ機能増進ニアリテ血管ノ變化ニ係ハラサルヲ明白ナリト又晩近諸家ノ檢査ニ據レハ神經纖維ハ終ニ化シテ概テ諸組織ノ原質ト爲ル者タルニ似タリ加之日常ノ實際ニ於テモ

亦神經中樞ノ損傷及ヒ大ナル神經ノ諸障礙ニ由テ速カニ筋ノ消耗ヲ致ス者アルヲ以テ考レハ補給機ハ多少神經系ノ作用ニ屬スルヲ確信スルニ足ル

此書初頭ニハ專テ補給機ノ變ニ係ハル所ノ病的作用ヲ論シ第二ニハ補給機ノ變ニ血液ノ性状及ヒ循環ノ變ヲ兼テタル病的作用即疾ヲ論シ第三ニハ獨リ血液及ヒ其循環ノ變ニ歸スル所ノ病的作用ヲ論ス但シ諸種ノ病的作用ヲ論スルニハ先ツ各一個ノ病的作用ヲ舉ケテ其病理總論ヲ記載シ而シテ後同一ノ作用ニシテ各個ノ臟器及ヒ組織ニ發見スル者ヲ舉ケテ各別ニ之ヲ記載スヘシ

第一章

細胞論

凡ソ健康ト疾病トニ論ナク身體ノ榮養ハ本來滋養品ノ供給ニアリト

雖モ其補給機ヲ主宰スルハ專ラ組織ノ力ニ依ル者ナリ故ニ今組織中補給機ノ存スル所ヲシテ一層精密ニ之ヲ説明セシメテ要ス

曩ニ「シューエン」氏カ發明ニ依テ動物體ハ細胞ヨリ成立セル者トシ又其細胞ハ動物共ニ同一ノ者タルヲ論定セシヨリ以降生理家益々其細胞論ヲ研究シテ之ヲ確證スル者愈々多ク竟ニ左ノ説ヲ以テ方今ノ生理及ヒ病理論ト爲シ一般之ヲ信用スルニ至レリ曰細胞ハ補給機及ヒ官能ノ本府ナリ又曰細胞ハ每個各獨立ノ有機體ニシテ一般生活體ニ固有セル諸性質ヲ具ヘ以テ自己ノ生活ヲ營爲シ得ヘキ者ナリト蓋シ身體諸部ハ直ニ細胞ヲ以テ成リ或ハ細胞ヨリ化成スルモ悉ク細胞ナラサル者ナク而シテ其細胞ハ先キニ成熟セル細胞ヨリ順次ニ分生スル者ニシテ必ス獨リ新タニ生スヘキ者ニ非サルナリ

夫レ斯ノ如ク細胞ハ諸器ノ原成分ニシテ何レノ生活現象ヲ論セス悉

ク之ヲ發見シ得ヘキ者ナルカ故ニ必ス左ニ之ヲ服膺スヘシ今一ノ造構精密ナル有機體ヲ以テ譬レハ其生活現象ハ即チ無數細胞力ノ維持ニ由テ成ル者ニシテ其細胞ハ每個各獨立ノ勢力ヲ具フト雖モ多少互ニ相親和シテ常ニ協立ノ體裁ヲ保ツカ如ク元ト各其官能ヲ異ニスル所ノ細胞許多相集テ一種ノ新力ヲ生シ以テ全體ノ生活ヲ營爲シ得ル者トス

(細胞造構) 往時曾テ動物共ニ同一ノ細胞ヲ以テ成ルノ説ヲ唱ヘシ際ハ其造構ニ於テモ亦齊シク一ノ衣膜ト核及内液トヲ以テ成ル者トセリ即チ第一蓋シ此説ハ先哲「シューエン」氏及ヒ「レマツ」氏カ首唱セシ所ニシテ爾來ウイリシヨウ氏モ亦之ニ荷擔シテ細胞ノ生活力ト其保存トハ全ク此三成分ニ憑ルト言ヘリ然レ近年ニ至テ其論漸ク一變セリ何トナレハ明カニ其衣膜ヲ識別シ得ヘカラサル者往々之アルヲ以テナリ例



之ハ胚胎ノ細胞、生長迅速ナル腫瘤等ノ細胞、血球、膿球及ヒ粘液球ノ如キハ孰レモ皆判然タル衣膜ヲ現ハスヲナシ是ヲ以テ「レীগグ氏及ヒ「マクス、シヨールツ氏ハ更ニ從來ノ細胞論ヲ一新シテ曰ク細胞ハ元ト全量同一ノ物質ヲ以テ成リ衣膜ナシ唯、其中ニ核ヲ具フルノミト又「マクス、シヨールツ氏ハ嘗ニ其衣膜論ヲ排撃セシノミナラス尙其細胞質ヲ以テ下等動物ノ收縮質ルコイデ、サト同一ノ者ト看做シ齊シク自動力ヲ具フルヲ證明シ之ヲ「プロトプラスム第一成形ト名ケリ又同氏ノ説ニ據レハ假令顯然其衣膜ヲ視ルモ是レ全ク「プロトプラスム外層ノ變性ニ由テ生スル者ニシテ細胞ノ生力ハ必ス「プロトプラスム」ニアリト云フ乃チ此説タル殆ト我英國ドクトル、ビール氏ノ意見ト符合ス爾來「ブルーク氏ストリッケル氏等更ニ此細胞論ヲ改正シ核ヲ以テ細胞造構ノ本分ニアラストセリ乃チ其説タル特ニ隱葉花科ノ植物及ヒ某

ノ下等動物ニ於テ其細胞中核ヲ見サル者アルニ因セリ是ニ依テ考レハ稀ニハ單一ノ「プロトプラスム」ヲ以テ齊シク生活ノ諸現象ヲ發見シ得ヘキ有機體ノ原質即チ細胞ヲ爲スヲアルニ似タリト雖モ一般ノ細胞中ニ就テ論スレハ核ヲ有スル者最モ多キニ居ル故ニ核ヲ以テ細胞造構ノ一成分ト做スモ亦可ナランカ但シ衣膜ハ之ヲ核ニ比スレハ常ニ目撃スルヲ鮮ナク且「プロトプラスム」外層ノ變性ヨリ生スル者トナス時ハ生活力ノ所在ニ拘テモ亦必ス細胞自餘ノ成分ニ亞ク者トス抑「プロトプラスム」ナル者ハ太ク變更シ易キ蛋白質ノ複體ニシテ水ニハ溶解シ難ク死後凝固シ常ニ視ル所ノ摸樣ニ於テハ全量同一ノ物質ニシテ毫モ組織ノ痕跡ナク且柔軟ニシテ粘稠ナリ然レ其硬軟ニ於テハ常ニ一定セス或ハ全ク流動液質ト爲リ或ハ多少凝固シテ膠ノ如キ形狀ヲ爲スヲアリ又老成ノ細胞ニ於テハ其水分ヲ失ヒ變性シテ殊ニ

硬固ノ蛋白質ト爲ルコアリ之ヲ「ケラチン」角質ト名ク即チ上皮及ヒ爪  
 ニ於テ見ル所ノ如シ加之亦此プロトプラスム「ハ漸ク變シテ李魯帝屬  
 ノ一異種即チ「ミユシン」粘液グロブリン血球ヘモグロビン色素血球  
 等ト爲ルコアリ又其細胞ニ衣膜ヲ存スルヤ之ヲ「プロトプラスム」ニ比  
 スレハ其質太ク硬固ナリ但シ所在ニ隨テハ細胞中純粹ノ「プロトプラ  
 スム」ヲ含蓄スルコ僅少ニシテ其變形物或ハ外來ノ異物ヲ夾雜スルコ  
 アリ例之ハ脂肪織及ヒ肝臟ノ細胞中ニ脂肪ヲ充實スルカ如シ其他亦  
 細胞中ニ色素加兒基分子、ペアシン胃液等ヲ藏スル者ナ見ルコアリ  
 核ハ之ヲ全細胞ニ比スレハ其大小及ヒ形狀ヲ變スルコ少ナク其形ハ  
 通例球圓或ハ卵圓ニシテ每核各一個或ハ數個ノ圓形或ハ方形ノ小體ヲ  
 含蓄ス之ヲ「ヌクレオリ」小核ト名ク乃チ此核ハ之ヲ細胞ノ造構ニ於ケ  
 ル他ノ成分ニ比スレハ殊ニ能ク化學的ノ作用ニ堪ユルカ故ニ疾病ニ

於テ細胞ノ本體ハ已ニ消滅スルモ依然トシテ尙核ヲ存スルコ往々之  
 アリ又「カラミン」藍眼石ヲ以テ着色スレハ其色殊ニ濃厚ナルヲ見ル又其  
 核ハ元ト水泡狀ノ者ニシテ猶胎兒ノ組織ニ於ケルカ如ク其新細胞中  
 ノ核ハ各薄キ衣膜ヲ被ムリ且小核及ヒ内液ヲ具ヘテ其造構宛モ細胞  
 ニ似タリ然レ後漸ク水泡狀ヲ失テ尋常皆全量同一質或ハ微顆粒狀ノ  
 物質ニ變シ尙其中ニ小核ヲ見ルヘシ但シ其核ハ細胞中ノ脂肪、色素或  
 ハ他ノ物質ヲ以テ隱匿セラル、コアルカ故ニ時トシテ鑑別シ難キコ  
 アリ第二十五圖ノ如シ又某ノ細胞ニ於テハ漸々自ラ消滅セラル、コアリ例之  
 ハ紅血球及ヒ上皮表層ノ細胞ノ如キハ已ニ其本來ノ核ヲ失ヘル者ナ  
 リ又一ノ細胞中能ク數核ヲ藏スル者アルコ知ルヘシ  
 (細胞生理)抑細胞ハ他ノ物質ヲ吸收シ且之ヲ化成シ又分泌及ヒ發育ノ  
 機能ヲ具フルカ故ニ隨テ亦自ラ其形ヲ換エ或ハ他ノ細胞ト互ニ附着

シ或ハ多少劇シキ運動ヲ起シ又能ク繁殖シ得ル者ナレハ則チ其細胞  
 チ構成セル物質ハ相互ニ何等ノ作用ヲ爲スヤ又衣膜、プロトプラスム  
 及ヒ核ノ三成分各、其用ヲ異ニスルヤ疑ナキヲ得ス依テ左ニ之ヲ論辨  
 セン

細胞ノ衣膜ハ元ト「プロトプラスム」ノ變性ニ由テ生スル者ナレハ細胞  
 ノ生活ニ於テ敢テ之ヲ翼賛スヘキ者ニ非ストス何トナレハ偶、此衣膜  
 チ存スルキハ自ラ分裂シテ新細胞ヲ生スルノ勢ヲ減スルカ如ク却テ  
 細胞ノ活潑ヲ失フニ至リ尙且此衣膜ハ老成ノ細胞ニ於テ殊ニ多ク新  
 細胞ニ於テハ常ニ絶エテ之ヲ視ルコトナキヲ以テナリ

從來核ヲ以テ細胞固有ノ官能ノ外別ニ榮養ヲ主トル所ノ本府トシ細  
 胞ノ繁殖ハ專ラ核ノ作用ニ由ル者ト思ヘリ是レ他ナシ細胞ノ分裂ス  
 ルヤ每常核ヨリ始マリテ後全細胞ニ及フ者ニシテ又細胞ノ官能ハ各

異ナルモ核ノ大小形狀ニ於テハ概チ一致スルヲ以テナリ然レ常ニ必  
 シモ其核ナキ者モ分裂繁殖シ又有核細胞ノ分裂スルニ當テ其核ハ依  
 然トシテ變セザル者アルコトヲ忘ル可カラス

蓋シ核ノ細胞ニ於ケル假令何等ノ官能ヲ有スルモ全細胞ヲ主宰スル  
 ハ特リ「プロトプラスム」ノ能力ニアリテ最要無二ノ成分タルヲ疑ナシ  
 而シテ新細胞ノ固有性ナル自動、變形及ヒ轉移ノ三力ハ獨リ此「プロト  
 プラスム」ニ具ハル者ニシテ即チ此ノ如キ運動ハ胚胎ノ細胞、水脈腺及  
 ヒ上皮ノ幼細胞、結締織中ノ或ル細胞、白血球及ヒ膿球等ニ於テ經驗ス  
 ル所ナリ

以上論載セシ所ノ如ク細胞ノ榮養及ヒ成形力ヲ以テ「プロトプラスム」  
 ノ力ニ歸スルト雖モ此「プロトプラスム」ハ特ニ諸官能ヲ營爲スルヲ以  
 テ任トス是レ其細胞ニ各異固有ノ官能ヲ賦與スル所以ナリ又「プロト

「プロトプラスム」ノ容積及ヒ硬軟ハ管ニ細胞ニ隨テ各異ナルノミナラス同一ノ細胞ト雖モ亦時ト摸樣トニ隨テ自ラ差異アリ且此物能ク液質ヲ吸收シ又之ヲ他ニ分配シ隨テ縮張スルノ性ヲ有スルカ故ニ細胞ノ選抽力ヲ撰ミ取ルカヲ云フ及ヒ細胞特異ノ官能ヲ營爲シ得ル所ノ諸性質ハ愈々此「プロトプラスム」ニ具ハルニ似タリ

〔細胞繁殖〕夫レ細胞ハ先キニ成熟セル細胞ヨリ直ニ分生スル者タルヲ曾テ「ウイルシヨウ」氏カ論定セシ所ニシテ當今以テ病理學ノ基本トス然レ諸組織皆細胞ヲ以テ成ルヲ發明セシハ其功「レマック」氏ニ歸セサルヲ得ス

凡ソ細胞ノ繁殖スルヤ單純分裂、發芽、内生ノ三法ヲ以テシ其分裂、發芽ノ二法ハ細胞ノ區々ニ分裂スルヲ謂ヒ又内生法ハ母胞内新細胞ヲ生

スル者ヲ謂フ孰レモ皆其繁殖スルニ隨テ胞内「プロトプラスム」ヲ増生スル者タルヲ明ラカナリ

〔其一單純分裂法〕凡ソ細胞ノ繁殖スルヤ此法ニ由ル者最モ多キニ居ル即チ一ノ細胞分裂シテ二個ノ細胞ヲ作り此二個各分裂シテ更ニ二個ヲ作り斯ノ如ク順次ニ繁殖スル者はナリ但シ有核細胞ニ於テハ其核先ツ分裂シテ後細胞ノ分裂スルヲ常トスト雖モ亦胞内ニ於テ其核獨リ分裂繁殖シ細胞ハ依然トシテ毫モ分裂ノ徵ヲ顯ハサ、ル者アリ夫レ斯ノ如ク細胞ハ分裂セサルモ細胞内ニ核ヲ繁殖シ且陸續トシテ「プロトプラスム」ヲ增多スルハ許多ノ核ヲ含蓄セル「プロトプラスム」ノ大凝塊ヲ生ス是レ所謂髓樣細胞ニシテ幼骨ノ髓管及ヒ或ル贅生ニ於テ目撃スル所ノ者ナリ髓樣瘤ノ條第三十圖ヲ參考スヘシ蓋シ此單純分裂法ノ細胞繁殖ヲ妨グル所以ハ其細胞ニ強厚緻密ナル衣膜ヲ具フルニ依ルナリ

〔其二内生法〕内生繁殖法トハ先キニ成熟セル細胞内ニ新細胞ヲ生スルヲ謂ヒ從來曾テ骨ノ發育及ヒ嫩衝ノ病的作用ニ於テ軟骨細胞ノ繁殖スルヲ以テ之ニ充テリ然レ今茲ニ内生繁殖法ト稱スル所ノ者ハ唯衣膜内ニ於テ軟骨細胞ノ分裂スル者第七十一圖ニ限リ其繁殖ノ模様ニ於テハ單純分裂法ヲ以テ繁殖スル者ト殆ト同一ナリト雖モ眞ノ内生法ト做スヘキ者ハ所謂ゾアキユチレーション按スルニ氣泡ノ義ニシテ即チ細胞内空隙ヲ生スルヲ云フ是ナリ即チ此ゾアキユチレーションナル名ハ近來ウイルショウ氏カ首唱セシ所ニシテ細胞病理學セルリユラル、パトロシールト題セル書中ニ見エタリ爾後更ニ「ケレイン氏等ノ検査ニ由テ益之ヲ精究シ方今細胞發育法ヲ論スル者ハ皆專ラ之ヲ陳說スルニ至レリ即チ其法タル先ツ細胞體ノ内部ニ空隙ヲ生シ其空隙ハ漸々増大シテ終ニ細胞内殆ト空虚トナリ周圍ハ唯薄キ一層ノ「プロトプラスム」ヲ以テ圍擁セラレ又核ノ轉移シテ周壁中

ニ寓スルヲ見ルヲ屢之アリ第二圖(ロ)乃チ其空隙内ニ新細胞ヲ生スルヤ一個或ハ數個ニシテ核ヨリ分生シ或ハ周壁ノ「プロトプラスム」ヨリ生ス「ドクトル、ケレイン氏ノ說ニ據レハ其プロトプラスム」ヨリ生ス者ハ周壁ノ内面ヨリ空隙内ニ突出シ自ラ分離シテ新細胞ヲ形成スト云フ夫レ斯ノ如ク空隙ヲ生シテ種子ヲ胎スルノ形ハ第二圖ヲ見テ知ル可シ然レ大ナル細胞内ニ小ナル細胞ヲ生スル所以ノ理ヲ究ムルニ當テハ其小細胞ハ或ハ外トヨリ入ルヲナキニ非サレハ輕卒ニ判決ス可カラス蓋シ此内生繁殖法ニ由テ細胞ヲ生スルヤ以テ組織ヲ改新スルカ爲ニ非ストス按スルニ嫩衝ノ病的作用ニ出ツル者ナランカ何トナレハ其組織ヲ改新スルハ通例單純分裂法ノ爲ス所タルヲ以テナリ又此内生法ニ由テ生スル所ノ原質ハ其稟性全ク母胞ト異ナリトス

〔本註〕著者曰以下細胞ト記スル所ノ者ハ總テ組織ノ本成分ニシテ衣

膜或ハ核ノ有無ニ拘ラス獨立ノ有機體タル固有ノ現象ヲ發見シ得可キ者タルヲ讀者必ス亮知アラントナ請フ

(其三發育法)此法ニ由テ細胞ノ繁殖スルヤ先ツ「プロトプラスム」ノ一部分細胞ヨリ突起シ其根底漸ク縮小シ終ニ分離シテ一ノ新細胞ヲ作ルニ至ル但シ之ヲ單純分裂法ニ由テ繁殖スル者ニ比スレハ太ク鮮少ナリトス

第二章

補給機歇絶

凡ソ身體ノ補給機斷然歇絶シテ久シク復故セサルヲアレハ必ス局處或ハ全身ノ死壞ヲ致ス者ニシテ之ニ三種ノ別アリ

(其一全身ノ死)是レ全身ノ補給機悉ク歇絶スルニ由ル者ナリ

(其二壞疽并骨疽)是レ唯一一部ノ補給機歇絶シテ其部已ニ死壞セルモ多

少其外貌ト解剖的造構トヲ存スル者ヲ謂フナリ

(其三子シロピオシス)分子的敗滅是レ亦一部補給機ノ歇絶スルニ由ルト雖モ此症ハ通例前以テ漸々其部ノ補給機ヲ妨害シ終ニ組織原成分中ノ一二全ク其補給機ヲ失フニ至ル者ニシテ其已ニ死壞スルヤ悉ク元來ノ造構ヲ失テ僅カニ顆粒狀ノ廢壞物ヲ留ムルノミ消耗及ビ變質ノ條下ニ於テ尙之ヲ詳論スヘシ

壞疽并骨疽

壞疽或ハ骨疽ハ一部分ノ補給機斷然歇絶スルニ由リ卒然之ヲ發スルヲ多ク而シテ已ニ其部ノ死壞ヲ致スモ多少元來ノ外貌及ヒ解剖的造構ヲ存スル者ナリ今其病的作用ノ順序ニ隨テ之ヲ分テハ其漸ク死壞セル者ヲ「モルチファイケーション」ト名ケ已ニ全ク死壞シテ生肉ト分界セル者ヲ「スファセリユス」或ハ「スロウ」腐肉ト名ク又其骨質ヲ侵ス者ニ於テ

ハ甲チ「チクロシス乙チ「セケストリウム」ト名ク  
 夫レ補給機ノ歇絶スルヲアレハ其部ノ官能ハ勿論器質ニ於ケル生活  
 諸現象モ亦隨テ全ク亡フルニ至ル而シテ已ニ生活力ノ作用ヲ離ル、  
 其ハ動物外有機體物ヲ云フ 普通ノ化學的及ヒ形器的ノ作用ニ屬ス  
 例之ハ手足ニ於テ其一肢生活ヲ失ヘハ運動知覺ノ痿痺ハ勿論其肌膚  
 寒冷ニシテ枯燥シ平常固有ノ硬性及ヒ彈力ヲ失テ柔軟泥ノ如ク又血  
 液ノ色素ハ血球ヨリ逃レテ血清即チ物乙中ニ溶解シ組織ニ滲透シテ  
 以テ斑痕ヲ呈ハスニ至ル加之上皮ヲ以テ大ニ皮膚ノ蒸發氣ヲ妨クル  
 カ故ニ其部ニ多量ノ血液ヲ貯フルキハ是ヨリ物乙液ヲ滲出シ且組織  
 中ノ水分滯溜シテ皮膚ニ大ナル水泡ヲ發シ而シテ後漸ク分離ニ傾ク  
 其ハ其部ニ硫化水素、諸母尼亞、窒素及ヒ炭酸瓦斯等ヲ生ス是レ即チ壞  
 疽ヲ接シテ往々乾爆鳴ヲ發スルヲアル所以ナリ此時ニ當テ其組織ノ

將ニ溶崩セントスルヤ甚シキ惡臭ヲ放チ且其滲出セル色素ノ變化ニ  
 由テ從前赤色ナル者已ニ茶褐色或ハ青色ニ變ス但シ患肢ニ多量ノ血  
 液ヲ含蓄セス亦其上皮ノ造構損壞シ或ハ已ニ水泡ヲ生スルモ終ニ破  
 潰シテ皮膚ノ蒸發機ヲ妨ケサルキハ更ニ乾涸シテ分離機漸ク止ミ以  
 テ黒痂ヲ生スルニ至ル者アリ之ヲ乾壞疽ト名ク然ル又其壞疽靜脈壅  
 塞ヲ兼テ血液ノ歸流及ヒ液質ノ吸收ヲ妨ケ假令皮膚ヨリ之ヲ蒸發シ  
 得ルモ患肢ヲシテ全ク乾涸セシムルニ足ラサル者常ニ最モ多シ即チ  
 然ルキハ其分離機愈増進シテ終ニ全ク溶崩スルニ至ル所謂濕壞疽ナ  
 ル者是ナリ  
 蓋シ其死壞セル部分ノ狀態タルヤ患部脈管ノ多少、造構ノ摸樣、壞疽ノ  
 原因、病性ノ緩急、空氣ノ竄透等ニ隨テ各同シカラズ例之ハ其組織脈管  
 ニ富ミ造構柔軟ニシテ空氣ニ抵觸スルヲ殊ニ多キ者ハ其分離敗壞ス

ルヲ愈速カニシテ全ク溶崩スルニ至リ之ニ反シテ硬骨、軟骨、髓ノ如キ  
 堅硬組織ノ脈管ニ乏シキ者ハ其造構及ヒ形狀ヲ變スルヲ少ナキカ如  
 シ  
 又分離機ハ其部ノ血液ヨリ始マル者ニシテ就中其最モ早ク且最モ速  
 カナル者ハ此血液ナリトス乃チ其分離スルヤ血球破潰シ或ハ滲出機  
 ナ起シテ紅血球ヨリ其色素ヲ游離シ血清中ニ溶解シテ終ニ周圍ノ組  
 織ニ浸潤シ其血球ハ全ク撲滅セラレテ只僅カニ微細ノ顆粒ヲ殘スニ  
 至ル

夫レ斯ノ如ク色素ノ組織ニ浸潤スルヤ所謂死後斑ヲ爲ス者ニシテ諸  
 組織皆多少此浸潤ニ罹ラサル者ナシト雖モ心臟及ヒ大脈管ノ裏膜ハ  
 常ニ血液ニ直接スルヲ以テ此斑痕ヲ呈ハスヲ殊ニ多シ即チ此斑痕ハ  
 孰モ皆淡紅色ノ者ニシテ充血症ノ赤斑ト自ラ異ナリ又其多少ハ分離

機ノ遲速ト其將ニ死壞セントスルノ際其部ニ血液ヲ貯フルノ多少ト  
 ニ準スル者ナリ

(死後強直)又筋ニ在テハ補給機ノ缺絶ニ由テ強直ヲ致ス之ヲ「リエル、モ  
 ルチス」死後ノト名ク是レ即チ死後必見ノ状態ニシテ筋質堅硬トナリ  
 且少シク短縮スルヲ猶慢性攣縮症ニ於ケルカ如シ而シテ此強直ハ筋  
 ノ刺衝機即チ試ニ之ヲ刺戟スレハ忽チ感  
 者トス但シ之ヲ發スルノ遲速ハ從前筋ノ榮養如何ニ拘ハリテ各同シ  
 カラス其筋殊ニ健強ナレハ補給機ノ歇絶スルヲ遲ク隨テ亦其強直ヲ  
 致スニ多クノ時間ヲ費ス者ニシテ又此遲速ニ準シテ強直ノ劇易ト久  
 暫トチ異ニス例之ハ十全健康ナル人ノ卒死セシ者ニ於テハ死後十時  
 乃至二十四時ヲ經テ始メテ強直ヲ發シ且甚ク剛強ニシテ二三日間持  
 續スルヲ屢之アリ又大ニ筋ノ榮養ヲ妨クル所ノ虛性病熱ノ類ヲ云フ



チ以テ死スル者ニ於テハ死後筋ノ強直ヲ致ス。最モ速カニシテ十分時以内ニアリ且其勢輕易ニシテ一時間以内ニ再ヒ弛解スル者アルカ如シ但シ炭酸及ヒ硫化水素ノ中毒、電撃、劇甚ノ虛性熱等ニ由テ死スル者ニ於テハ此強直ヲ致ス。ナシト云フ然レモ其發スルヤ急ニシテ亦速カニ消除シ竟ニ傍人ノ注意ヲ遺ル、者モ亦往々之アルニ似タリ總テ其強直已ニ弛解スレハ忽チ筋組織ノ分離ヲ起ス者ト知ルヘシ却說斯ノ如キ強直ハ膏ニ全身及ヒ局處ノ死亡ヨリ生スルノミナラス健體ニ於テモ亦試ニ一時筋ノ榮養ヲ絶ツキハ之ヲ繼發スル者ニシテ例之ハ猶動脈ヲ結紮シテ某ノ筋ノ血液給與ヲ絶ツキハ忽チ強直トナリテ殆ト死後ノ強直ニ於ケルカ如キ状態ヲ呈ハシ早ク其結紮ヲ解クキハ其筋ノ生力更ニ復故スルカ如シ

蓋シ其強直ヲ致ス所以ノ理ヲ推究スルニ從來之ヲ以テ筋ノ將ニ生活

チ失ハントスルニ當テ自ラ收縮スルニ由ル者トセリ然レ近來コロン氏等之ヲ説明シテ曰ク筋中常ニ凝固性蛋白質即チ「マイチシン」ナル者アリ其筋ノ榮養已ニ歇絶スルキハ筋液ヨリ分離シテ其實質中ニ凝固シ竟ニ堅硬不透明ノ物質ニ變シ以テ其筋ヲシテ一旦強直ナラシムレモ其已ニ凝固セル蛋白質ハ筋ノ將ニ溶崩セントスルニ當テ忽チ消滅スルカ故ニ其筋再ヒ弛解スト即チ此時ニ當テハ筋纖維ノ横紋分明トラスシテ顆粒及ヒ脂肪分子ヲ遍布シ筋質柔軟トナリ筋衣消滅シテ終ニ只一ノ組織ナキ柔軟ナル物體ヲ殘スノミ但シ扁平ナル不隨意筋ニ於テモ亦死後強直ヲ現ハス。アリアリ又何レノ組織ヲ論セス補給機ノ歇絶スルニ當テハ細胞ノ「プロトプラスム」凝固シテ其細胞ハ曇暗顆粒狀トナリ終ニ破潰シテ大小不齊ノ細分子ヲ爲スニ至ル者ナリ

其他諸組織ノ敗壞スルヤ脂肪織ニ於テハ細胞中藏スル所ノ流動性脂

肪先ツ其細胞ヲ脱出シテ周圍ノ造構中ニ散亂シ其細胞ヲシテ速カニ縮小セシム又結締織ノ纖維ハ初メ膨脹シテ曇暗トナリ終ニ全ク溶解スルニ至リ又神經纖維ニ於テハ所謂シーヴン氏白質接スルニ即チ管圓筒質ヲ云フナル者先ツ凝固シ神經鞘内ニ集合シテ微細ノ點滴狀ヲ爲スニ至リ又軟骨及ヒ硬骨ハ之ヲ他ノ組織ニ比スレハ其死壞セラル、ト殊ニ遅クシテ能ク久シキニ堪へ而シテ已ニ死壞ニ陥ルモ其形ヲ變スルコト最モ少ナシ

(轉歸凡ソ壞疽ノ轉歸ニ二様アリ一ハ多少周圍ノ組織ヲ荒蕪スルノ後其病的作用自ラ止ンテ其死壞セル部分ト生活部トノ間ニ分界ヲ生ス之ヲ圓界壞疽ト謂フ又一ハ毫モ恢復ノ徵ナク漸々増進ス之ヲ蔓延性壞疽ト謂フ蓋シ一部分ノ組織半ハ死壞シ或ハ全ク腐痂スルキハ宛モ體外ノ異物ノ如ク以テ近傍ノ造構ニ焮衝ヲ起シ終ニ其腐痂ヲシテ脱

離セシメ或ハ新組織ヲ生シテ以テ之ヲ圍擁スルニ至ル乃チ其死壞セル部分ノ周圍ニ焮衝ヲ起スヤ猶尋常外部ノ焮衝ニ於ケルカ如ク其組織ニ赤色腫起熱度ノ増進ヲ呈ハシ而シテ後本病自ラ止ムキハ其焮衝部ニ一線ヲ圍畫シテ以テ其死壞セル部分ト活肉トノ間ニ判然タル分界ヲ生ス之ヲ分界線ト名ク即チ然ルキハ此分界線ニ沿テ膿膿潰爛シ其死壞セル部分ヲシテ漸々周圍ノ組織ヨリ分離セシムルニ至ル者ナリ但シ其轉歸ノ模様ハ特ニ患部ノ位置ニ隨テ各一樣ナラス例之ハ其位置淺クシテ外部腸食喉等ニ於ケルカ如ク腐痂ヲ排除シ得ルキハ唯表面ニ糜爛ヲ殘スノミ然レ深部ノ死壞ニ於テハ漸ク外方ニ侵蝕シテ表面ニ達スルニ非スソハ之ヲ排除シ難シ喩ヘハ軟部ニ癭瘡或ハ潰瘍ヲ生シ之ヲ通シテ骨片ノ脱出スルコトアルカ如シ或ハ又周圍ノ焮衝輕微ニシテ其膿ヲ生スルコト多カラス速カニ結締織ヲ生シテ其死壞セル

部分ヲ圍擁スルヲアリ是レ殊ニ内部ニ於テ然リトス例之ハ外來ノ異物、一團ノ結核、組織内ノ滲血、堆積セル上皮ノ片屑、腐骨ノ骨片、腹腔内ノ胚胎等ノ如キ皆必ス一層ノ新生結締織ヲ以テ被包セラル、者ナリ而シテ其已ニ被包スルヤ其物體ヲシテ竟ニ無害ノ真物ヲラシメ之ヲ包藏スル所ノ組織ニ於テモ亦之カ爲ニ更ニ焮衝ヲ起スヲナク漸ク時日ヲ經ルニ隨ヒ徐々ニ吸収セラレテ乾涸シ且ツ屢加兒基樣變質ヲ致スヲアリ

(原因)凡ソ壞疽ノ原因ニ二般アリ一ハ滋養品ノ給與ヲ妨クル者一ハ直ニ組織ノ原成分ヲ撲滅シテ已ニ其官能ヲ營爲シ難キニ至ラシムル者是ナリ今其甲因ニ屬スル者ヲ左ニ論載スヘシ

(第一動脈壅塞)是レ壞疽ノ普通原因ニシテ其壅塞ヲ致ス所以ハ脈管ノ結紮、壓迫、斷絶、血栓トロムボスムムポリスムム或ハ「エ」或ハ動脈管實質ノ病等ニアリテ

乃チ其動脈全ク壅塞シテ通セス且之ト副行スル所ノ脈管ニ由テ血液循環ヲ營ムヲ能ハサルキハ速カニ其部ノ死壞ヲ致ス者ナリ但シ獨リ動脈ノミ壅塞シ靜脈中血液ノ歸流ニ於テ妨ケナキキハ乾壞疽ヲ生スルヲ常トス

(第二毛細管壅塞)此壅塞ハ通例脈管ノ壓迫及ヒ緊張ヨリ生スル者ニシテ例之ハ焮衝性滲出物ノ蓄積、出血或ハ養生等ノ壓迫ニ由テ毛細管ノ血行ヲ阻塞シ之カ爲ニ近傍組織ニ壞疽ヲ生スルヲアルカ如シ又骨膜炎ニ於テ往々其骨面ニ腐骨ヲ生スルヤ滲出物ヲ以テ骨ト骨膜トノ間ノ毛細管ヲ壓迫スルニ由ルナリ其他「フセリア」ニ於テ咽喉ノ粘膜ニ腐茄ヲ生スルモ亦同一ノ理ナリ

(第三靜脈壅塞)夫レ靜脈管壅塞スレハ血液ノ歸流ヲ妨グルト雖モ獨リ自ラ壞疽ヲ生スルノ度ニ至ル者ハ太々罕ナリ故ニ之ヲ生スルヤ必ス

唯、動脈ノ壅塞ヲ合併スル者ニ於テノミ然リトス乃チ斯ノ如キ動靜二脈ノ壅塞症ハ箱摺脱腸腸管ノ一部發積ヲ爲シテ宛モ英腔ノ如ク相重ナル者、綳帶ヲ以テ一部ヲ緊縛スル者、挫傷或ハ裂傷ノ爲ニ動靜二脈ヲ損傷シ或ハ之カ爲ニ組織ノ緊張ヲ起シ此二脈ヲシテ狹窄ナラシムルカ如キ諸症ニ於テ之ヲ見ルコトアリ但シ何レノ原因ヲ論セス靜脈ノ壅塞ヲ兼テタル壞疽ハ概テ皆濕壞疽ニ屬スル者ナリ

(第四心臟機能減衰)是レ亦靜脈壅塞ニ於ケルカ如ク獨リ之ヲ以テ壞疽ノ原因ヲ爲スコト罕ナリト雖モ全身甚シク衰弱セル者或ハ心臟實質ノ病ニ於テハ心ノ収縮力減衰シテ危險ノ血液凝滯ヲ起シ以テ上件諸原因ト共ニ壞疽ノ原因ヲ贊成スルコトアリ其他老人ノ壞疽、虛性熱及ヒ慢性虛衰病等ニ於ケル背部ノ壞疽按スルニ即チ痔瘡ノ如キモ亦專ラ此心臟機能減衰ニ由ル者ナリ

(第五焮衝)總テ焮衝ノ病的作用ハ患部ノ活機ヲ障害スル者ニシテ其甚シキニ及ヒテハ全ク其活機ヲ撲滅シテ壞疽ヲ生スルニ至ルコトアリ乃チ焮衝ノ爲ニ壞疽ヲ生スルヤ必ス組織ノ緊張ト血液ノ滯溜トニ由テ催進セラル、者ニシテ從來之ヲ焮衝性壞疽、急性壞疽或ハ熱壞疽ト名ケリ此症ハ每常必ス濕壞疽ニシテ其始メ先ツ患部ニ灼熱、腫起、緊張、赤色ヲ現ハシ而シテ後俄ニ陷沒シテ柔軟寒冷トナリ其色青黒ニ變シテ惡臭ヲ放ツニ至ル蓋シ某ノ焮衝ニ於テ殊ニ壞疽ニ陷リ易キ所以ハ各焮衝ニ固有性アルニ依ル例之ハ「シ」セリア、羅斯癰、病院壞疽等ノ如キ皆是ナリ又何レノ症ニ拘ラヌ焮衝部ノ死壞ヲ致シ易キ所以ハ其部營養障礙ノ度ニ準スル者ナリ

又直チニ組織原成分ヲ撲滅シテ壞疽ノ原因ヲ爲ス者アリ即チ左ノ如シ

(第一器械的作用)器械的作用トハ外傷、寒熱、腐蝕物等ノ作用ヲ總稱ス是レ皆全ク局部ノ活機ヲ撲滅シテ直ニ壞疽ヲ生スルニ足ルト雖モ概テ之ヲ生スルノ前、先ツ其部ニ多少ノ瘀衝ヲ發スル者ナリ

(第二血中毒物侵入)燐及ヒ麥奴ヲ最モ著シトス乃チ燐ノ爲ニ下顎ノ骨疽ヲ生スルヤ直チニ其部ヲ侵スニ由ルナリ按スルニ硫柿子ヲ製スル者ニ於テ下顎ノ骨膜炎ヲ發シ又麥奴ヲ永ク持重シ用キテ偶四肢ノ壞疽ヲ生スル者アル所以ハ蓋シ麥奴ノ特效ニ因テ細動脈ヲ收縮セシムルニ由ル者ナランカ

(老人壞疽)此症ハ殊ニ老人ノ下肢ニ發スル一種ノ壞疽ニシテ上件ニ記載セル數原因ノ作用ヲ以テ成リ通例其初メ患足ノ動脈ニ變化ヲ生シテ動脈脂化或ハ加兒基樣變質ヲ致シ以テ血行ヲ阻塞シ且其部ノ活機ヲ滅殺ス故ニ其將ニ壞疽ヲ發セントスルヤ少日ノ間患者自ラ下肢ノ寒

冷、痙攣、其他非常ノ感覺ヲ認ムル者常ニ多シ又此症ニ於テハ斯ノ如キ動脈ノ變ニ兼テ同時ニ心臟筋質ノ消耗症或ハ其變質症ヲ起シ以テ其病勢チシテ一層増進セシムルニ至ル乃チ此心臟射出力ノ減衰ト動脈變質トヲ以テ血行ヲ阻塞シ且下肢ノ脈管中ニ血栓ヲ生シテ終ニ壞疽ヲ致スニ足ル者アリト雖モ通常足部ニ表皮ノ剝脫或ハ肉刺ヲ生シ或ハ過度ノ寒熱ニ抵觸スル等如キ些少ノ誘因アリテ發スル者最モ多シ乃チ斯ノ如キ誘因ニ遭フトハ其已ニ虛衰セル部分ニ瘀衝ヲ發シ尙且其部ノ活機ヲ損害シ血行愈々阻塞セラレテ速カニ壞疽ニ陷ル者ナリ但シ老人壞疽ハ概テ皆乾壞疽ニ屬ス

第三章

補給機障礙

抑、補給機全ク歇絶シテ活機及ヒ官能ノ諸現象悉ク止ミ以テ局處或ハ

全身ノ死壞ヲ致ス所以ノ者ハ前章已ニ之ヲ論載セリ今茲ニ論スル所  
ノ補給機障礙ハ頗ル甚シキニ至ルモ未タ以テ其補給機ヲ歇絶セシム  
ルニ足ラス且之ニ由テ活機モ亦大ニ衰フト雖モ尋常未タ以テ其部ノ  
死壞ヲ致スニ足ラサル者ヲ謂フ即チ消耗變質ノ兩症ヲ爲ス者はナリ

消耗症 アトロフィー

消耗トハ組織ヲ造營セル原質按スルニ即チ細胞及ノ萎小シ或ハ其數  
ヒ筋纖維等ヲ云フ減少シテ組織ノ容積ヲ減スル者ヲ謂フ乃チ此消耗症ハ秤量ノ減少ト  
官能ノ障礙トヲ兼ヌル者ナリ今之ヲ區別スレハ啻ニ其細胞ノ萎小ス  
ル者之ヲ單純消耗症ト名ケ又其數ヲ減スル者之ヲ減數消耗症ト名ケ  
但シ同一ノ病的作用ニシテ各時期ヲ異ニシ兩症相併行スルヲ屢之ア  
リ而シテ其單純消耗症ハ減數消耗症ナク之ヲ生スト雖モ減數消耗症  
ニシテ單純消耗症ナク直ニ之ヲ發スル者ハ未タ曾テ之アルヲナシ

衡按スルニ本文ノ意ニ從ヘハ單純消耗症ハ消耗ノ初期ニシテ減數  
消耗症ハ其末期タルニ似タリ

(其一單純消耗症)此症ハ普通ノ消耗症ニシテ日常最モ多ク目撃スル所  
ナリ例之ハ平常ノ羸瘦ニ於テ皮下脂肪織中ノ脂肪漸ク消滅スルカ如  
キ是ナリ乃チ此脂肪織ハ本來結締織ニシテ其細胞中殊ニ多ク脂肪ヲ  
充盈スル者ヲ謂フ故ニ人若シ羸瘦スルキハ其細胞中ノ脂肪漸ク消除  
シテ細胞縮小シ從前充盈セル脂肪ハ已ニ減少シテ數個ノ細球ヲ爲ス  
ニ至リ此時ニ當テハ細胞ノ衣膜及ヒ核モ亦明カニ之ヲ識別シ得ルヲ  
屢之アリ第三圖然ルニ其細胞ハ決シテ毀損セス亦其數減セス唯細胞  
内物質ノ一部減少スルノミ但シ其細胞中脂肪ヲ失フヤ之ニ代フルニ  
少許ノ物乙液ヲ以テス  
夫レ斯ノ如ク細胞ノ縮小スルヤ何レノ組織ヲ論セスト雖モ殊ニ腺質

諸臟器ノ消耗スル所以ハ皆此法ニ由テ本體ノ萎小ヲ致ス者ナリ例之  
ハ肝、脾、腎、乳線、睪丸、水脈腺等ニ於テ常ニ見ル所ノ如シ又筋組織ノ消耗  
スル所以ハ元纖維ノ削小スルニ由ル者ニシテ例之ハ心臟及ヒ隨意的  
諸筋ニ於テ見ル所ノ如シ  
以上此單純消耗症ニ於テハ熟レモ皆依然トシテ細胞ヲ存スルガ故ニ  
其組織ヲ復故スルニハ補給機ヲ増盛シ且多ク滋養品ヲ資給スルヲ以  
テ旨トス

(其二減數消耗症)此消耗症ハ即チ單純消耗症ノ末期ニシテ管ニ細胞ノ  
縮小セルノミナラス多少撲滅セラレテ已ニ其活機ヲ失フニ至ル者ヲ  
謂フナリ蓋シ消耗症及ヒ某ノ變質症ニ於テ細胞ノ撲滅セラル、ヤ即  
チ「ウイリシヨウ氏カ曾テ」チクロビチシス」ト名ケシ所ノ一症ニシテ壞疽  
骨疽ノ如ク組織ノ一部ヲ限局シテ死壞ヲ致ス者ト全ク異ナリ故ニ須

ク之ヲ區別セズンバアル可カラス但シ此「チクロビチシス」モ亦其活機  
ヲ失フトニ於テハ殆ト壞疽ニ似タリト雖モ甲症ハ元ト分子ノ變ニ係  
ル者ニシテ生活官能漸ク衰へ細胞ノ分子ハ自ラ分離シテ其細胞撲滅  
セラレ終ニハ全ク唯顆粒狀ノ廢壞物ニ變シ其部從前ノ造構ハ全ク消  
滅シテ毫モ痕跡ヲ見サルニ至ル者ヲ謂フ今茲ニ分子ノ變ニ係ル者ノ  
一例ヲ舉ルハ即チ上皮ノ表層次第ニ活機ヲ失テ自ラ剝離スルカ如キ  
者是ナリ又壞疽ハ一局部ヲ限リテ其組織ヲ侵ス所ノ病ニシテ補給機  
ノ卒然歇絶スルニ由ル者ナリ是ヲ以テ前症ノ如ク活機ノ漸ク減衰ス  
ル者ト自ラ異ナリ加之此壞疽ニ於テハ組織ノ死壞ヲ致ス「殊ニ速カ  
ニシテ終ニ全ク腐滅ト爲ルモ依然トシテ尙其部ノ造構ヲ存スル者ナ  
リ

上件論スル所ノ如ク減數消耗症ハ之ヲ單純消耗症ニ比スレハ特ニ重

大ノ者ニシテ喻ヘハ猶乙症ニ於テハ新生ヲ要セスシテ復故シ得ヘシト雖モ甲症ニ於テハ更ニ新細胞ヲ生スルニ非スノハ復故シ得ヘカラサルカ如シ

又消耗症ニ汎發症即チ多少一齊ニ全身ノ諸器諸組織ヲ侵ス者ト局發症即チ各部ヲ限局スル者トノ二種アリ其汎發症ニハ單純消耗症多クシテ減數消耗症ハ罕ナリ而シテ其初メ先ツ皮下ノ脂肪織即チ結チ侵シ次ニ内臟ノ周圍及ヒ網膜中ニ於ケルカ如キ他部ノ脂肪織次ニ筋及ヒ腺質諸器肝脾腎器丸水脈腺等ヲ云フチ侵シ最後ニ神經及ヒ骨質ニ連累スル者ナリ

抑、消耗症ナル者ハ其名義ニ於テハ管ニ細胞ノ縮小或ハ減數タルニ過キスト雖モ斯ノ如ク病性單純ナル者ハ太々罕ニシテ概チ多少ノ脂化チ兼ヌル者ナリ何トナレハ一部ノ補給機ヲ妨害シテ已ニ其部ノ消耗

チ致スニ足ルノ度ニ至ルキハ甚タ脂化シ易キチ以テナリ故ニ脂化モ亦消耗ト同一ノ原因ニ歸スルヲ知ルヘシ

(原因)凡ソ消耗症ノ原因ヲ論スルニハ須ク先ツ一般ノ組織ヲ侵ス所ノ原因ト管ニ一局處ヲ侵ス所ノ原因トチ區別セノヲ要ス

汎發消耗症原因

(第一)滋養缺乏總テ滋養ニ乏シキキハ組織ヲノ消耗セシム例之ハ飲食不足ナル者、食喉或ハ胃ノ賁門即チ狹窄シテ食物ヲ胃腸ニ輸ルヲ能ハサル者、飲食消化ヲ妨ケ胃弱ヲ生スヘキ諸件、胸管壅塞シ或ハ腸隔腺ノ疾患即チ腸隔勞ニ由テ乳糜液ノ吸收ヲ妨クル者等ノ如キ皆汎發消耗症ノ原因ナリ

(第二)費耗多量ノ養液ヲ費耗スル所ノ狀態例之ハ經久出血、骨疽及ヒ胸膿症ニ於ケルカ如ク連綿多量ノ膿液ヲ排泄スル者、下利、ブリフト病或



ハ蜜尿病ニ於テ夥シク蛋白質或ハ糖分ヲ分泌スル者等ノ如キ皆汎發  
消耗症ノ原因ナリ其他急性熱ニ於テ組織ノ新陳代謝機増盛シテ疲勞  
ヲ致ス者モ亦之ニ屬ス

(第三補給機障礙)老人ノ消耗症ハ殊ニ此原因ニ由テ生スル者ニシテ凡  
ソ人高齢ニ至レハ細胞ノ活機漸ク衰へ保續ノ爲ニ滋養ヲ血液ヨリ採  
テ之ヲ自己ノ物質ニ同化スルノ力ニ乏シキカ故ニ其細胞漸ク削小シ  
テ終ニ全ク活機ヲ失フニ至ル者ナリ

右ニ論スル所ニ於テハ消耗症ヲ以テ上件原因ノ一ニ歸スルニ似タリ  
ト雖モ單一ノ原因ニ止マル者ハ果シテ少ナク通例二三ノ原因ヲ併有  
スル者多シ例之ハ肺勞ニ併發セル消耗症ニ於ケルカ如シ即チ其消耗  
接スルニ即チ致ス所以ハ一ニハ略痰及ヒ下利ノ夥多ナルカ爲ニ養  
液ヲ費耗シ因第二一ニハ胃腸ノ造構變化シテ飲食消化ヲ妨ケ之カ爲ニ

滋養ニ乏シク因第一又一ニハ新陳代謝機増進シテ組織ヲ費耗スルニ由  
ル者トス加之老人ノ消耗症ニ於ルモ亦啻ニ補給機ノ減衰セルノミ  
ラス消化器ノ状態宜シカラスシテ飲食消化ヲ妨ケ之カ爲ニ其消耗ヲ  
催進スルヲ往々之アリ又急性熱ニ併發スル所ノ消耗症ハ決シテ單一ノ  
原因ニ歸スル者ニ非ス必ス組織ノ新陳代謝機ノ増進スルト食欲ナク  
且消化機其宜キヲ失フトニ因ル者ナリ

局發消耗症原因

(第一血液不給)凡ソ身體ノ一部分血液ノ給與ヲ缺クキハ其障礙ノ度ニ  
隨テ多少必ス變化ヲ生ス故ニ若シ全ク一部ノ血行ヲ絶ツキハ其部ノ  
死壞ヲ致シ又著シク其量ヲ減スト雖モ未タ全ク血行ヲ絶ツニ至ラサ  
ルキハ其部ヲシテ消耗セシム殊ニ動脈血給與ノ減少スルハ消耗症ノ  
通因ニシテ其模様一ナラス或ハ其分布スル所ノ臟器ノ内外ニ脈管ヲ

壓迫スル者アリテ榮養動脈ヲ阻塞スルニ因ル者アリ例之ハ肝臟硬結  
 腫ニ於テ細胞間ノ組織非常增生シ以テ毛細管ヲ壓迫シ胆汁ヲ分泌ス  
 ル所ノ造構ヲミテ之カ爲ニ消耗セシムルカ如シ或ハ遠隔部ニ血行ヲ  
 妨クル處アリテ血液ノ給與ヲ減スルコトアリ例之ハ一部ニ腫瘍アリ以  
 テ他部ニ達スル所ノ動脈ヲ壓止スルカ如シ其他長骨ニ於テ其榮養動  
 脈孔ノ上部ニ骨傷ヲ被ムリ後其上端ノ消耗スルモ亦同一ノ理ナリ又  
 物アリ直ニ其部ヲ壓迫シテ消耗ヲ致スヤ一ニハ血液ノ給與ヲ妨ク  
 ルニ由ル者トス例之ハ動脈瘤ノ壓迫ニ由テ胸骨ノ消耗ヲ致シ攝護腺  
 ノ肥大症ニ於ケルカ如ク尿閉ノ壓迫ニ由テ腎ノ消耗ヲ致シ又慢性腦  
 水腫ニ於テ腦蓋骨ノ消耗ヲ致ス等ノ如キ普ク知ル所ナリ  
 其他器械的血壓按スルニ一部ヲ緊縛スル等ニ於ケルモ亦齊シク局處ノ消耗ヲ致  
 スコト往々之アリ即チ之ニ由テ血行ヲ妨クルモ其部ノ靜脈ヲ壓止ス

ルカ故ニ血液常ノ如ク歸流スルヲ得スレテ一處ニ逼迫シ動脈血ノ給  
 與ヲ減少ノ竟ニ消耗症ヲ繼發スルニ至ル者ナリ  
 (第二官能減衰)是レ亦消耗症普通ノ原因ニシテ生理上及ヒ病理上變化  
 ニ於テ常ニ之ヲ見ルコト多シ例之ハ胎兒ノ始メテ産出スルヤ已ニ其用  
 チ畢ハル所ノ部分即チ「チヌク」チヌス、アルテリチシス、臍ノ動靜二脈、ウツル  
 ヒアニ一氏體又終リニ胸腺等漸ク消耗スルニ至リ又分娩後ノ子宮卷  
 縮、老人ニ於ケル脾臟及ヒ水脈腺ノ廢滅及ヒ齒ヲ失フテ下顎ノ瘦削セ  
 ルカ如キ皆官能減衰ニ由テ生スル所ノ消耗症ニシテ生理上ノ變化ニ  
 歸スル者ナリ又何レノ原因ヲ論セス某ノ筋ニ於テ久シク運動ヲ欠ク  
 コトアレハ其筋必ス消耗ス例之ハ諸種ノ麻痺病其他關節強直或ハ諸骨  
 諸關節ノ慢性病ノ爲ニ使用ヲ廢シタル手足ニ於ケルカ如シ又人工肛  
 門ヲ作ルノ後大腸ノ下部消耗シテ一條ノ纖維樣結締織ニ變シ又骨ニ

於テハ一肢ヲ截斷スルノ後其截端消耗シ眼球ヲ抽出シテ其眼窩ノ消  
 耗スルカ如キハ皆其用ヲ廢スルニ由ルナリ加之神經ニ於テモ亦官能  
 ノ減衰ニ由テ消耗スルヲアリ例之ハ某ノ盲者ニ於テ視神經消耗シ又  
 久シク運用ヲ缺ク所ノ四肢ニ於テ患肢ノ神經消耗スル者アルカ如シ  
 (第三官能増盛凡ソ官能ノ増進スルヤ通常肥大症ノ原因ニシテ消耗症  
 ノ原因ヲ爲スヲ太ク稀ナリ例之ハ某ノ腺殊ニ睾丸ノ使用過度ニ過房  
 等ヲヨリ消耗ヲ致スヲアルカ如シ)

(第四藥物作用藥物モ亦之ヲ内服スレハ身體ヲ消耗スヘキ性質ヲ具フ  
 ル者アリ沃陳、貌魯珉、水銀、鉛、亞兒加里等其最モ著シキ者ニシテ就中沃  
 陳ト水銀トハ水脈系ニ專ニシテ貌魯珉ハ生殖器ニ專ラナリトス  
 (第五神經作用凡ソ神經系ノ作用ハ直チニ消耗症ノ原由ヲ爲スヤ否未  
 タ審カナラス假令ヒ神經幹及ヒ其中樞按スルニ即チ腦脊ノ變ニ由テ  
 髓神經節等ヲ云フ)

屢、消耗症ヲ生スル者アルヲ疑ナシト雖モ是レ又恐クハ介達ノ作用ニ  
 歸スル者多キニ居ル例之ハ腦脊髓ノ損傷ニ由テ麻痺ヲ起シ後其筋ノ  
 消耗ヲ致ス者ノ如キ其消耗スル所以ハ補給機上ニ拘テ神經ノ作用ヲ  
 缺クカ爲ニ非ス麻痺シテ其筋ヲ使用スルヲ能ハサルニ由ル者トス然  
 レ神經中樞ノ變化ト大ナル神經ノ損傷トニ由テ筋ノ消耗ヲ致スヲ太  
 タ速カナル者アルヲ以テ考レハ某ノ神經中直チニ補給機ヲ主宰スル  
 所ノ神經纖維ヲ含蓄シ神經作用モ亦直チニ消耗症ノ原因ヲ爲スヲア  
 ル所以ヲ了解スルニ足ル總論ヲ參  
 考スヘシ其他亦神經系ノ變ニ由テ血管縮小  
 シ且血液ノ給與ヲ減少シテ以テ消耗症ノ原因ヲ爲スヲアリ  
 (第六脈衝) 在々脈衝ヲ以テ之ヲ消耗症ノ普通原因中ニ算入スル者アリ  
 ト雖モ其脈衝ニ於テ屢、消耗症ヲ繼發スル所以ハ慢性脈衝ニ於テ新タ  
 ニ纖維樣組織ヲ増息シ以テ臟器固有ノ造構ヲ壓迫スルニ由ル者多キ

ニ居ル例之ハ肝臟硬結腫ニ於ケルカ如シ其他亦新生纖維織ノ有無ニ拘ラス焮衝ノ爲ニ患部ノ活機ヲ妨害シテ組織元成分ノ消耗ヲ致スヲアルニ似タリ

(性狀)消耗症ハ甚ク鑒定シ難キ者多シ何トナレハ秤量ノ減少スルヲ以テ鑒別ノ大法トスト雖モ臟器ノ秤量ハ健康ニ於テ人各差異アルヲ啻ニ全身ノ秤量ニ隨テ異ナルノミナラス元來ノ發育充分ナラスシテ非常ニ輕キ者アルヲ以テナリ是レ猶諸筋諸骨ニ於ケルモ亦然リトス又某ノ臟器中血液及ヒ物乙液蓄積シテ更ニ其秤量ヲ増シ之カ爲ニ疑惑ヲ生スルヲアリ乃チ斯ノ如キハ器械的ノ壓迫ニ因テ一部ニ血液輻迫セシ者ニ於テ往々目撃スル所ニシテ假令ヒ其大小及ヒ秤量ニ於テハ著シク増加スルモ其組織ハ反テ減少ス然レトモ通例其消耗スル所ノ臟器ハ啻ニ其秤量ヲ減スルノミナラス其容積ニ於テモ亦著シク縮小

シ之ヲ健康體ニ比スレハ概テ皆血液ニ乏シク且枯燥シテ漸ク官能ヲ廢スルニ至ル者ナリ

蓋シ一臟器ノ遺構悉ク侵サル、ヲアリト雖モ其遺構中殊ニ消耗シ易キ者ト否ラサル者トノ別アリ纖維分ノ如キハ消耗セラレ、ヲ最モ遲シ是レ常ニ患部ノ堅韌ニシテ彈力ナキ所以ナリ又腺質ノ臟器ニ於テハ初メ先ツ其分泌ヲ主トル所ノ細胞ヲ侵シテ其細胞縮小シ且其内ニ脂肪分子ヲ含蓄スルカ故ニ終ニ顆粒狀ヲ呈ハスニ至ルヲ多シ乃チ此時ニ當テハ血管及ヒ神經モ亦共ニ連累セラレ、者ナリ又皮下ノ結締織ニ於テハ漸々脂肪ヲ失テ細胞縮小シ又筋ニ於テハ先ツ元纖維削小シテ其橫紋漸ク消滅シ終ニハ筋衣内殆ト空虚トナリテ僅ニ結締織ヲ殘スニ至ル但シ通常此變化即チ消耗ニ兼テ多少筋纖維ノ脂化ヲ致シ或ハ又元纖維間ニ脂肪ヲ發生スル者アリ

骨質消耗症

骨質ノ消耗症ニ於テハ必ス其秤量ヲ減スト雖モ其大小ニ至テハ敢テ變セサル者アリ但シ其緻密織及ヒ海綿織ハ漸々吸收セラレ且髓管狹窄シテ全骨細小トナル者アリ之ヲ中心消耗症ト名ク乃チ此症ハ經久ノ關節強直、脱臼或ハ麻痺ノ患者ニ於テ見ル所ノ者ニシテ長骨ヲ侵ス一殊ニ多シ又全骨ノ大小ニ於テハ毫モ減スルコトナク其緻密織ノ漸々海綿狀ニ變シテ全骨太ク輕鬆トナリ且脆弱ニシテ太ク折傷シ易キニ至ル者アリ是レ全ク前症ノ反對ニシテ所謂外圍消耗症是レナリ即チ此症ハ老人ニ於テ常ニ目撃スル所ニシテ概チ皆多少ノ脂化ヲ兼スル者ナリ

肺氣脹

抑、肺氣脹ニ於ケル肺臟ノ變化ハ專ラ氣胞周壁ノ消耗ニ係ルヲ以テ今

茲ニ之ヲ論載スルヲ適當トス乃チ本病ハ多少肺中ノ「インフロンヂブ」  
 按スルニ氣管枝末梢ノ擴張部ニシテ其形及ヒ氣胞ノ荏苒膨大セル  
 漏斗ノ如ク以テ氣胞ニ通スル者ヲ云フ  
 者ニシテ其膨大スルヤ通例先ツ「インフロンヂブ」ヨリ始マリ次テ氣  
 胞ニ及ヒ終ニ合シテ一大空洞ヲ生シ而シテ后病ノ増進スルニ隨ヒ之  
 ト隣接セル一群ノ氣胞ト互ニ交通シ其空洞ヲシテ愈々大ナラシムルニ  
 至ル者ナリ今之ヲ區別シテ二種トス

(其一消耗性肺氣脹)夫レ斯ノ如ク氣胞ノ膨大スルヤ隨テ其組織ニ微密  
 ノ變化ヲ生スル者ニシテ是亦本病ノ種類ニ隨テ稍々差異アリ例之ハ老  
 人ノ肺氣脹即チ專ラ高齡自然ノ變化ニ由ル者ニ於テハ單ニ其氣胞ヲ  
 構成セル諸成分ノ消耗スルカ爲ニ氣胞ノ周壁ヲシテ此變ヲ生セシム  
 ル者ニシテ「シエンチル」氏ノ所謂萎小性肺氣脹ナル者是ナリ即チ此症ニ  
 於テハ氣胞ハ増大スルコトナキモ其數個相合シテ一トナリ周壁殊ニ非

薄ニシテ結締織、彈力織及ヒ血管等悉ク此消耗性變化ニ連累セラレ肺  
 中ノ色素モ亦非常ニ增多シ按スルニ肺質暗黒又之ヲ平常ノ者ニ比ス  
 レハ全肺ノ容積ヲ減シ死後若シ胸殼ヲ截開スレハ忽チ萎縮スル者ナ  
 リ  
 (其二肥大性肺氣脹)又肺氣脹ノ一種全肺ノ肥大ヲ致シ胸殼ヲ截開スレ  
 ハ圓然凸起スル者アリ此症ハ即チ前症ノ反對ニシテ肺臟組織ノ成分  
 中一二增多シ以テ肺ノ發爆性按スルニ之ヲ摩シテピチ々チ減シ又之  
 ニ觸ルレハ稍堅實ナルヲ覺ユル者ニシテ「シエンチル氏」ノ所謂肥大性肺  
 氣脹ナル者はナリ又顯微鏡ヲ以テ其肺ヲ檢査スレハ消耗性肺氣脹ノ  
 如ク其膨脹セル氣胞ヲ以テ肺中一般ニ分布セサルモ氣胞ノ膨脹スル  
 一殊ニ著シク亦其消耗ヲ致スヤ氣胞ノ周壁ヲ構成セル諸組織ヲシテ  
 一齊ニ之ヲ侵ス者ニ非ス例之ハ彈力纖維ノ如キハ其消耗セラレ、

殊ニ甚シク又或ル人ノ經驗ニ於テハ結締織ヲ增多スト云フ但シ其結  
 締織ノ增多スルヤ小葉間ノ細脈管ト氣管枝トノ周圍ニ於テハ屢之ヲ  
 視ルヲアリト雖モ氣胞ノ周壁ニ於テハ予未タ曾テ其增多セシ者ヲ視  
 シ「ナシ」又氣胞ノ周圍ニ分布スル所ノ毛細管ハ其膨脹セル氣胞ノ爲  
 ニ緊張シ且壓迫セラレテ消耗シ且愈微細チ極メ又小葉間ノ稍大ナル  
 血管ハ屢増大シテ血液其内ニ充漲スル者アリ或ハ又多少上皮ノ脂化  
 スル者アリ加之肺中色素ノ非常ニ增多スル者モ亦往々之アリ  
 (原因)凡ソ肺氣脹ノ原因タル從來諸家ノ講究スル所ニシテ今其衆說ヲ  
 舉テ一々之ヲ論辨スルニ違アラスト雖モ氣胞ノ内面ヲ壓迫シ或ハ氣  
 胞周壁ノ抵抗力ヲ損害スル所ノ諸件ハ皆氣胞ヲシテ荏苒擴張セシメ  
 以テ此肺氣脹症ヲ生スルヲ自ラ亮然タリ故ニ先ツ其氣胞ノ内面ヲ壓  
 迫スル所ノ諸件ヲ掲クルヲ左ノ如シ

第一ニハ咳嗽或ハ風器ヲ吹キ或ハ力作スル等ノ間ニ於ケルカ如ク聲門ヲ鎖シテ劇シク呼氣ヲ努張スル者是ナリ乃チ然ルキハ肺中最モ抗抵力ニ乏シキ部分ニ於テ非常ノ擴張ヲ致ス者ニシテ「シエン」氏ガ會テ肺氣脹ノ原因トシテ首唱セシ所ノ説ナリ

第二ニハ肺中ノ一部分萎縮シ或ハ硬結シ或ハ喘息様痙攣ヲ起シテ膨脹スルヲ能ハサル者是ナリ乃チ然ルキハ他ノ空氣ヲ通シ得ル所ノ部分之ニ代テ非常ノ膨脹ヲ致ス者ナリ

又氣胞ノ抗抵力ヲ損害スル所ノ諸件ハ左ノ如シ

第一ニハ高齢ニ至テ肺臟組織ノ彈力ヲ失ヒ且消耗スル者是ナリ即チ之ヲ以テ消耗性肺氣脹ノ最大原因トス

第二ニハ氣胞内過劇ノ壓迫ニ由テ甚シク膨脹シ之カ爲ニ周壁緊張シテ氣胞ノ消耗ヲ致シ且之ニ分布セル血管モ亦隨テ消耗セラル、者是ナリ

第三ニハ氣胞ノ周壁ヲ損害スル者是ナリ蓋シ其損害セラル、ヤ從前ノ燃衝ニ由ル者アリ或ハ平常蘇生ヲ誤マリ或ハ他ノ原因アリテ氣胞ノ補給機ヲ妨クルニ由ル者アルニ似タリ

變質症 デセチローシオン

變質症ハ組織ノ性狀ヲ變スル者ニシテ猶消耗症ニ於ケルカ如ク補給機ノ障碍ニ併發シ而シテ屢々其細胞ヲ撲滅スルニ至ル者ヲ總稱ス乃チ其組織ノ性狀ヲ變スルヤ直ニ其形ヲ變シテ他物ニ化スルアリ或ハ某ノ物質ヲ外カヨリ運輸シテ其中ニ浸潤スルアリ蓋シ消耗症ト變質症トハ補給機ノ障碍及ヒ官能ノ減衰ニ於テハ互ニ相似タリト雖モ「ウィル」シヨウ氏ガ會テ説明セシ所ノ如ク其消耗症ニ於ケル補給機ノ變化ハ單ニ分量ノ多少ニ係ハル者ニシテ滋養品ノ給與ヲ以テ組織ノ費耗ヲ償

フニ足ラス組織ノ全量自ラ減少シテ其部ノ官能減衰スルコアリ又變質症ニ於ケル補給機ノ變化ハ專ラ性狀ニ係ハル者ニシテ其組織中更ニ物質ヲ化成シ或ハ外ヨリ來テ其中ニ浸潤スルコアリ而シテ其細胞ノ官能ヲ妨クル所以ハ新生物質ノ存在ニ依リ或ハ將ニ之ヲ生セントスルカ如キ状態ニ關係スル者トス是ヲ以テ兩症自ラ其變化ヲ異ニスル所以ヲ了解スルニ足ルヘシ

(原因)今此變質症ヲ以テ一種ノ者ト看做シ一概ニ其原因ヲ論シ難シ何トナレハ各種自ラ其原因ヲ異ニスルヲ以テナリ故ニ次條各別ニ之ヲ論載スヘシ今此變質症ヲ大別シテ變形、浸潤ノ二種トス

(其一變形症)變形症トハ組織ノ蛋白分ヲ變シテ更ニ一種ノ物質ヲ化成スル者ヲ謂フ乃チ其變化ニ隨テ細胞消滅シ細胞間ノ物質モ亦軟化シ終ニハ全ク組織ノ本態ヲ失テ其官能ヲ廢絶スルニ至ル者ナリ更ニ此

變形症ヲ分テ脂樣變質、粘液樣變質及ヒ膠樣變質ノ三種トス

(其二浸潤症)浸潤症トハ組織中新ニ物質ヲ生スルモ元ト組織固有ノ蛋白分ヨリ化生スル者ニ非スシテ血液ヨリ其中ニ沈澱スル者ヲ謂フ即チ是ヲ以テ自ラ變形症ト異ナリトス加之此浸潤症ニ於テハ細胞ノ消滅及ヒ細胞間物質ノ軟化ヲ致スヲ殊ニ罕ナリ故ニ組織ノ造構ヲ變スルヲ少ナク其官能障礙モ亦變形症ニ於ケルカ如ク甚シキニ至ラサル者ナリ更ニ此浸潤症ヲ分テ脂肪浸潤、澱粉浸潤、加兒基浸潤及ヒ色素浸潤ノ四種トス

第四章

脂樣變質

フエツテ、デゼチレ、シヨ

夫レ脂樣變質トハ大率組織ノ本成分ニ代リテ脂肪分子ヲ充ツル者ヲ謂フナリ然レ其組織中ニ脂肪ヲ蓄積スルヤ千狀萬態ニシテ且概シテ



脂様變質ト名クルモ亦其中ニ諸種ノ病的作用ヲ含有ス故ニ此等ノ病的作用及ヒ之ニ由テ生スル所ノ組織ノ變化ヲ論載スル前先ッ脂肪ノ本源ヨリ其脂肪ヲ蓄積シテ已ニ病的作用ヲ起スニ至ルマデノ状態ヲ説明セントス

(普通病理)凡ソ體中ノ脂肪ハ其本源ヲ食物ノ油質分ニ資リ或ル組織ノ細胞中常ニ其一部分ヲ貯蓄シ以テ體力及ヒ體温發生ノ需要ニ備フ脂肪織ノ細胞及ヒ肝臟細胞ナル者即チ是ナリ

其他食物ノ糖分或ハ蛋白分モ亦脂肪ノ源ヲ爲ス者ニシテ其蛋白分ハ補給機ノ爲ニ分拆セラレテ若干ノ脂肪ヲ生シ健體ニ在テハ酸化ノ勢熾ニシテ悉ク消盡スト雖モ症ニ隨テハ酸化ノ力足ラスシテ組織ノ細胞中ニ蓄積スルヲアリ乃チ其組織中脂肪ヲ蓄積シテ病的作用ヲ起スニ至ルノ状態ヲ考究スルニ方テハ殊ニ平常脂肪ヲ含蓄スル所ノ組織

中其過剩セル者ニ於ケルカ如ク健康ト疾病トヲ判決スルヲ太ク困難ナルヲ多シ唯非常ノ地位ニ蓄積セシ時明カニ其病狀タルヲ認知シ得ヘキノミ今其状態ヲ分テ四トス

第一ニハ直チニ多量ノ脂肪ヲ含ミ或ハ之ニ化スヘキ物質ニ富ム所ノ食物ヲ貪ル者はナリ即チ然ルキハ體中得ル所ノ酸素ヲ以テ其過剩ヲ酸化スルニ足ラス自ラ細胞中脂肪ヲ蓄積スルニ至ル是レ猶脂肪織ノ増息ニ於ケルカ如ク生理上自然ノ作用ニ出ツル者ナリ抑脂肪織ナル者ハ即チ一種ノ結締織ニシテ常ニ脂肪ヲ充盈セル無數ノ細胞ヲ含蓄ス故ニ其増息スルヤ只細胞中脂肪ヲ浸潤スル者ノ愈多キヲ加フルニ外ナラス第四圖而シテ既ニ其過多ナルニ至テハ即チ身體ノ肥滿ヲ爲ス者はナリ其他脂肪ニ富メル食物ヲ消化スルノ際肝臟中一時脂肪ヲ蓄積スルモ亦齊シク生理上自然ノ作用ニ歸スル者ナリ尙後篇脂肪ノ

條ニ於テ之ヲ論載スヘシ乃チ若シ其脂肪極メテ多量ニ至ルキハ當ニ尋常ノ所在ニ於ケルノミナラス常ニ脂肪ヲ見サル所ノ組織中ニ蓄積シ兩ナカラ以テ病的作用ヲ起スニ足ル者ナリ

第二ニハ食物ニ於テハ敢テ脂肪ニ過キサルモ局處或ハ全身ノ酸化機能減衰シテ尋常食物中ノ脂肪タリトモ悉ク之ヲ酸化セシムルヲ能ハサル者是ナリ

第三ニハ補給機ノ際食物ノ含窒素質ヨリ分離スル所ノ脂肪ヲシテ充分ニ酸化セシムルヲ能ハス隨テ細胞中ニ遺殘スル者是ナリ

第四ニハ補給機ノ際細胞ノ「プロトプラスム」ヨリ分離スル所ノ脂肪ヲシテ悉ク酸化セシムルヲ能ハス自ラ「プロトプラスム」中ニ蓄積シ之ニ代テ其部ヲ充ツル者是ナリ即チ然ルキハ「プロトプラスム」ノ漸ク脂化スルニ隨ヒ終ニ其細胞ヲ撲滅スルニ至ル者ナリ

凡ソ脂様變質症ニシテ組織ノ元質ヲ撲滅スル者ハ即チ普通脂様變質症ノ一ニシテ第五章脂肪變形ノ條ニ於テ之ヲ詳論スヘシ蓋シ其性狀如何ハ「ドクトル、クヱイン」氏カ有名ナル心臟脂化ノ検査ニ於テ明亮ナリ即チ其說ニ曰日本病ノ筋纖維中ニ見ル所ノ脂肪ハ纖維ノ直チニ變形セル者ニシテ決シテ外トヨリ來ルニ非スト爾來ドクトル、ブライト氏及ヒ「ドクトル、パウエル」氏モ亦之ヲ實驗シテ愈々其說ノ眞正ナルヲチ保證セリ又同氏ハ燐ノ中毒ニ由テ生シタル急性脂様變質ニ於テ其脂肪ノ本源ヲ究メント欲シ精細之ヲ検査シテ其變質ヲ致セシ所以ハ燐毒ヲ以テ赤血球ヲ撲滅シ隨テ血液ノ酸化力ヲ減衰セシムルニアルヲチ豫定セリ其法先ツ犬ヲシテ死後之ヲ解剖スルニ當テ其脂肪ハ食物ヨリ生セス亦自身ノ脂肪織ヨリ生セサルヲチ證センカ爲ニ少日ノ間食物ヲ斷チ而シテ後之ニ燐ヲ與ヘシニ渾身遍ク脂様變質ヲ起セリ是ニ依テ其

脂肪ハ必ス細胞ノ「プロトプラスム」ヨリ生シタル「亮然タリトス」ブナイ  
ト氏ハ此検査ヲ以テ左ニ確定スルヲ得タリト云フ  
一ニ曰細胞中蛋白質ノ脂肪ニ化スルヤ固ヨリ酸素ノ給與ニ拘ラスト  
雖モ若シ酸素ニ乏シキハ其蛋白質ヨリ化生スル所ノ脂肪及ヒ他ノ  
物質ヲシテ充分ニ酸化セシムルヲ能ハサルカ故ニ自ラ細胞中ニ蓄積  
スト二ニ曰細胞中脂肪ヲ存スル所以ハ蛋白質ノ變形スルヲ過多ナル  
ニ由リ或ハ其分離シテ生シタル物質ノ酸化スルヲ少ナキニ由ルト三  
ニ曰燐ノ中毒ニ於ケル脂様變質ハ細胞内蛋白質ノ變形スルヲ多キト  
其變形シテ生シタル脂肪及ヒ他ノ物質ノ酸化スルヲ少ナキトニ歸ス  
ル者ナリト  
又上件脂様變質ノ原因トシテ已ニ記載シタル四ツノ状態中第一條ヲ  
除クノ外皆其脂肪ヲ蓄積スル所以ハ特ニ酸素ニ乏シク酸化ノ力足ラ

サルニ由リ又第一條ノ状態ニ於テハ酸素ハ缺乏セサルモ其酸化セラ  
ルヘキ物質ノ過剰スルニ由ル者タルヲ知ルヘシ  
夫レ酸素ニ乏シク酸化ノ勢充分ナラスシテ脂肪ヲ發生セシムルヤ種  
々ノ状態ニ由ル抑、酸素ヲ運輸スル者ハ紅血球ナルカ故ニ血液ノ循環  
ヲ妨ケ紅血球ノ數ヲ減シ或ハ其性質ヲ變スル者或ハ血液ヲシテ充分  
ニ酸化セシムルヲ能ハサル等ノ諸件ハ皆脂様變質ヲ誘發シ得ル者ト  
ス例之ハ「トロムボシス」或ハ「イムボリズム」ニ由テ腦ノ血行ヲ阻塞ス  
ルキハ腦髓組織ノ脂様變質腦軟化ノ條ヲ起シ又燐其他ノ中毒ニ由  
テ紅血球ヲ撲滅スル者、偶々幼稚ノ者ニ於テ見ル所ノ貧血症及ヒ急慢諸  
病ノ爲メニ貧血ト爲ル者或ハ老人ニ於ケル血液循環機能ノ減衰等ニ  
由テ脂様變質ヲ繼發スルカ如シ其他亦某ノ臟器或ハ組織ニ於テ久シ  
ク運用ヲ缺クキハ其部ニ循環セル血液自ラ減少シテ脂様變質ヲ致ス

「ア」筋質脂肪浸潤症ノ加之慢性肺患ノ爲ニ其血液ヲシテ充分ニ酸化セシムルヲ能ハサルヤ亦以テ脂様變質ノ一原因トス是レ肺病ニ於テ常ニ之ヲ視ルヲ多キ所以ナリ

又組織中脂肪ヲ蓄積シテ之カ爲ニ組織ノ元質ヲ變スルヤ原因ニ隨テ頗ル其變化ニ差異アリ例之ハ組織中ノ含窒素物ヨリ脂肪ヲ化生スル者ニ於テハ其變質機ニ由テ組織ヲ撲滅スレモ他ノ症ニ於テハ通例組織ヲ撲滅スルニ至ラサルカ如シ但シ稀ニハ兩症併發スルヲアリト雖モ其變化ニ於テ互ニ其趣ヲ異ニス故ニ宜シク各別ニ之ヲ論載スヘシ今之ヲ分テ二トス即チ其一ハ直チニ組織ノ變形シテ脂肪ヲ生スル者ニシテ之ヲ脂肪變形症ト名ケ又一ハ食物ノ油質糖質或ハ含窒素質ヨリ之ヲ化生スル者ニシテ之ヲ脂肪浸潤症ト名ク

脂肪浸潤

フエツテ、インフィルトレーション

凡ソ脂肪浸潤症ニ於テハ細胞中ニ脂肪ヲ沈澱シテ點滴狀ヲ爲シ初期ニ於テハ極メテ微細ナリト雖モ漸ク沈澱スルニ隨テ漸ク蓄積シ且其數箇相絡合スルニ至テハ細胞中ノ核及ヒ「プロトプラスム」ノ位置ヲ轉シ且之ヲ掩匿シ終ニ其細胞内ニ油質ヲ充滿シテ膨脹セシムルニ至ル第五圖然モ亦脂肪ノ蓄積スルヲ夥多ナルキハ之ガ爲メニ掩匿セラレ、モ敢テ其性ヲ變スルヲナシ又其細胞内ニ脂肪ヲ蓄積スレモ其實質ヲ損スルヲナキカ故ニ唯其脂肪ヲ除去スルヲ以テ本體ニ復スルヲ得ヘシ但シ上件已ニ説明セシ所ノ如ク脂肪織ノ増息及ビ脂質ニ富メル食物ヲ消化スル際肝中一時脂肪ヲ浸潤スル者ハ生理上自然ノ作用ニ出ツル者ナリ

筋中脂肪浸潤

凡ッ筋中脂肪ヲ以テ浸潤セル者ハ屢目撃スル所ノ病的作用ニシテ即チ筋ノ元纖維ヲ圍繞セル結締織ノ細胞中ニ脂肪ヲ充盈スル者はナリ曾テ斯ノ如ク筋ノ元纖維間ニ脂肪ヲ發生スル者ヲ以テ往々之ヲ直チニ筋纖維ノ變質セル者ト混同セシマアリ然レ此變質症ハ近來之ヲ脂肪變形症ト名ケテ即チ筋纖維ノ直チニ脂肪ニ化スル者ヲ謂ヒ又茲ニ論スル所ノ脂肪浸潤症ハ元纖維間ニ脂肪ヲ沈澱シ初期ニ在テハ決シテ其元纖維ヲ侵スコトナキ者ヲ謂フ是ヲ以テ兩症自ラ異ナルコト知ルヘシ蓋シ其纖維間ニ脂肪ヲ生スルヤ症ニ隨テ各多少ノ差アリ例之ハ其脂肪ヲ含ム所ノ細胞ヲ以テ元纖維ト交番ニ各一列ヲ爲ス者アリ或ハ其蓄積スルコト齊整ナラスシテ甲ノ纖維間ニ多ク乙ノ纖維間ニ少ナキ者アリ孰レモ皆其纖維ハ脂肪中ニ横ハリテ其脂肪頗ル多量ナル者ハ筋質悉ク脂化セル者ノ如シト雖モ之ヲ顯微鏡ニ照セハ其脂肪中必

ス其組織ヲ現出シ得ヘシ第九圖  
如ク

夫レ斯ノ如キ脂肪浸潤ノ状態ハ肥滿セル獸類ニ於テ屢之ヲ經驗スルコトアリ乃チ其獸タル畜ニ尋常ノ脂肪織中ニ脂肪ヲ增多スルノミナラス筋ノ元纖維間ニモ亦之ヲ蓄積セリ又人身ニ在テハ某ノ原因アリテ久シク運動ヲ廢シ隨テ酸化ノ機能極メテ減衰セシ所ノ筋ニ於テ其纖維間ニ脂肪ヲ增多スル者ヲ見ルコト常ニ多シ例之ハ鉛毒症ニ於ケル腕關節ノ伸筋腦脊髓ノ損傷ニ因セル經久ノ麻痺及ヒ關節ノ強直ニ由テ其用ヲ廢シタル筋等ニ於ケルカ如シ其他又曾テ「ウィルショウ氏」カ説明セシ所ノ如ク筋質消耗症ノ末期ニ於テ此浸潤症ト眞ノ脂樣變質症トヲ併發スル者アリ

(心臟脂肪浸潤)凡ッ脂肪浸潤ノ症タル心臟ニ於テモ亦之ヲ見ルコト往々之アリ故ニ之ヲ殊ニ險篤ナル變質症即チ心臟脂化ト區別スルコト特ニ緊要ナ

リ抑心ハ健康體ニ於テ常ニ多少ノ脂肪ヲ以テ其表面ヲ被覆シ心胞ノ  
 内層下殊ニ心耳ト心室トノ間ノ溝ニ多クシテ以テ脈管ヲ圍擁ス然ル  
 ニ其脂肪非常ニ增多シテ心ノ全面ヲ覆フニ至ルハ漸々筋纖維間ニ  
 竝入シ肉眼ヲ以テ視レハ全ク筋組織ノ状態ヲ失テ其心圍ハ宛モ脂肪  
 ノ一團塊タルカ如シ但シ輕症ニ於テハ筋中脂肪ヲ分布シテ紋理ヲ爲  
 シ第六圖其脂肪ハ筋ノ表面ニ近ク位スルヲ常トス故ニ其筋組織ハ心  
 内膜ニ近キ處ニ於テ最モ著明ナリ

夫レ斯ノ如ク纖維間ニ脂肪ヲ生スルハ筋纖維ノ位置ヲ變シ且之カ  
 爲ニ壓迫セラレテ筋ノ收縮力ヲ減スルコト心臓ニ於テ殊ニ著シトス而  
 シテ管ニ其筋纖維ヲ壓迫スルノミナラス之ト配偶スル所ノ脈管ヲ壓  
 迫シテ終ニ消耗及ヒ變質ヲ致ス者ナリ故ニ其元纖維ハ漸ク削瘦シテ  
 横紋分明ナラス之ニ代フルニ脂肪分子ヲ以テシ終ニ其筋ヲシテ全ク

變質セシムルニ至ル乃チ是ニ依テ考レハ浸潤變質ノ兩作用ハ往々相  
 互ニ變遷シ纖維間ノ浸潤症ヨリシテ纖維内ノ變質症ヲ生スルコトアル  
 ニ似タリ

#### 肝臟脂肪浸潤

凡ソ脂肪浸潤症中肝臟ニ於ケルカ如ク較著ナル者ナク且之ヲ侵スコ  
 極メテ多ク所謂脂肪肝ナル者はナリ蓋シ肝ノ細胞ハ常ニ少量ノ脂肪ヲ  
 含蓄シテ脂質ノ食物ヲ消化スルノ後一時增多スル者ナレハ病的作用  
 ヲ論スルノ前豫メ此生理上自然ノ脂肪浸潤ヲ記載シテ考照ニ備ヘン  
 トス

常ニ脂肪ニ富メル食物ヲ消化スレハ必ス一時門脈ノ血中ニ脂肪ヲ増  
 多シテ其一部分ヲ肝ノ細胞中ニ沈澱ス即然ルハ其初メ先ツ門脈ノ  
 毛細管ト相接スル所ノ細胞中ニ脂肪ヲ沈澱スルカ故ニ肝ノ小葉周圍

ノ細胞中ニ脂肪ヲ增多シ而シテ後漸ク内部ノ細胞ニ及ホシ更ニ動脈血ニ入テ共ニ循環セラレ悉ク其過剰セル脂肪ヲ排除スルニ至レハ肝ノ細胞ハ再ヒ本性ニ復スルヲ得ヘシ故ニ肝ノ細胞中一時脂肪ヲ蓄積スレヒ漸々排除セラレテ敢テ之カ爲ニ細胞ノ活機ヲ妨クルヲナキ者ナリ

病的作用ニ於テモ亦前文ノ生理上自然ノ作用ニ齊シク肝中過多ノ脂肪ヲ含蓄スルヲアリ所謂脂肪肝ナル者はナリ蓋シ其脂肪過多ヲ致スヤ門脈ノ毛細管ノ血液ヨリ沈澱スルカ故ニ肝臟小葉ノ外縁ニ始マリ第七圖ノ微細ノ脂肪球ヲ以テ細胞中ニ蓄積シ漸ク增多スルキハ互ニ鑄合シテ點滴狀ノ大ナル脂肪球ヲ爲シ以テ細胞中ニ充滿スルニ至リ其細胞モ亦隨テ膨脹シ大ニシテ且愈々球圓ト爲ル者ナリ第五圖而シテ後其病愈増進スルキハ小葉ノ周圍ヨリ中心ニ達シ終ニ全葉悉ク侵サレ其

細胞ハ皆一樣ニ脂肪ヲ含テ膨脹スルニ至ル但シ細胞ノ官能ハ依然トシテ尙持續スルヲ大便中及ヒ膽囊中ニ膽液ヲ現ハスヲ以テ徴トス又往々特ニ肝靜脈ノ周圍ニ脂肪ヲ蓄積スル者アルヤ「ウィルショウ」氏ノ説ニ據テ其脂肪ハ絶エテ排泄セラレテ肝ノ細胞中ニハ只僅カニ遺留スル者ト做スキハ之ヲ了解シ得ヘシ

總テ此脂肪浸潤ニ罹ル所ノ肝臟ハ漸々増大スル者ニシテ其末期ニ至テハ頗ル大ヲ爲スヲアリ又其外面ハ滑澤ニシテ邊緣ハ厚圓トナリ其全量ハ増加スルモ異重ハ反テ減少ス但シ輕症ニシテ管ニ小葉ノ外縁ノミヲ侵ス者ニ於テハ之ヲ截斷スルニ其截面斑點狀ヲ現ハシ外縁ノ脂肪部ハ暗黃白色ニシテ中心部ハ平常ニ異ナラス或ハ少シク充血ノ徴ヲ呈ハスノミ然レ其浸潤スルヲ稍深部ニ達スルニ隨テ外縁ノ淡白部愈々厚大トナリ終ニ全葉悉ク侵サル、キハ中心肝靜脈ノ起始ニ當タ

ル所ニ於テ唯、一點ノ赤褐色ヲ遺スノミ況ヤ往々此赤點ヲ失フニ至ル者アルヲヤ即チ然ルキハ肝ノ全體殆ト一面ニ暗黃白色ト爲リ全ク小葉間ノ分界ヲ失フニ至ル但シ稀ニハ肝中脂肪ヲ蓄積スル一部分ニ隨テ多少ノ差アリ故ニ之ヲ半斷スレバ滿面黃色ノ斑點及ヒ紋理ヲ呈ハス者アリ之ニ觸ル、ニ柔軟ニシテ宛モ巴布ノ如ク指頭ヲ以テ僅カニ之ヲ壓スルモ忽チ陷沒シ又刀ヲ以テ之ヲ截ツルハ其刀面ニ油ヲ塗附ス又其浸潤セル脂肪ノ爲ニ壓迫セラレテ肝中甚ク血液ニ乏シト雖モ其血液循環ヲ妨クルヤ之カ爲ニ腹水、出血其他門脈充血ノ徵ヲ現ハスノ度ニ至ルコトナシ

又特ニ肝中脂肪ヲ蓄積シ易キ所以ハ先代ドクトル、ペーノスジョンズ氏ノ說ノ如ク第一ニハ肝中常ニ多量ノ酸化セラルベキ無窒素物ヲ存スルニ由リ第二ニハ門脈血ノ酸素ニ乏シキ状態ニ由リ第三ニハ門脈中

血壓弱ク且血行怠慢ニシテ容易ニ酸化シ難キニ由ル者トス抑肝ノ脂肪浸潤症ニニアリーハ他部ト共ニ肝中脂肪ヲ增多シテ全身ノ肥滿ヲ致シ一ハ皮下ノ結締織其他尋常脂肪ヲ有スル所ノ部分ヨリ其脂肪ヲ奪テ獨リ肝ノ細胞中ニ之ヲ蓄積シ以テ全身ノ羸瘦ヲ致ス者是ナリ又肺ノ慢性病ニオイテ常ニ肝ノ脂肪浸潤ヲ併發スル者ノ多キ所以ハ恐ラクハ肺組織ノ荒蕪ニ由テ血中ニ酸素ヲ採取スルコトノ充分ナラサルニ由ル者ナラシカ但シ燐毒其他ノ中毒症ニ於テ肝臟ニ脂肪ヲ蓄積スル者ハ前條已ニ之ヲ説明セリ其他ノ脂肪變質症ハ之ヲ脂肪變形症トシテ次章ニ論載スヘシ

第五章 脂樣變質之續

脂樣變形症 フェツター、メタモルホーシス

夫レ脂樣變形症ノ脂肪ハ脂質、糖質或ハ含窒素質ノ食物ヨリ生セスシ



テ直チニ其部ノ組織中ニ含有セル蛋白質ヨリ化生ス是ヲ以テ脂肪浸潤症ト異ナリトス乃チ其病的作用ハ前章已ニ論載セシ所ノ如ク組織中ノ蛋白質ヲシテ之ヲ脂肪ニ變セシムルニアリ是レ特ニ細胞ヲ侵ス者ニシテ其生スル所ノ脂肪ハ微細ノ顆粒及ヒ分子ト爲テ細胞中ニ發見シ其「プロトプラスム」ヨリ始テ核中ニ及ホシ其形顆粒狀暗黒色ニシテ周邊尖起シ且光輝アリ能ク亞的兒ニ溶解ス而シテ其數ノ漸ク增多スルヤ細胞ノ「プロトプラスム」ヲシテ悉ク脂化セシムルニ至リ二三ノ顆粒相合シテ各數個ノ點滴狀脂肪ヲ成シ其細胞ハ變質機ノ増進スルニ隨テ増大シ且益々球圓トナリ終ニ胞内ノ核モ亦共ニ脂化シ加之若シ其細胞ニ衣膜ヲ具フルキハ自ラ消滅セラレテ全細胞只一塊ノ顆粒狀脂肪ニ變スルヲ見ル第八圖夫レ斯ノ如ク細胞ノ衣膜及ヒ核ハ已ニ消滅スルモ顆粒狀脂肪ハ獨リ暫時ノ間尙集合ヲ保テ得ル者ニシテ即チ

慢性腦軟化及ヒ他ノ脂樣變質症ノ所謂痲衝球或ハ滲出球或ハ「グリュール」氏球ナル者はナリ第八圖イ然レ終ニハ其脂肪球自ラ破潰シテ顆粒間ノ蛋白分モ亦溶流シ其脂肪分子ヲシテ組織中ニ分散セシムルニ至ル者ナリ第八圖ロ蓋シ尋常生理上ノ作用ニ於テモ亦同上ノ如キ病理上變化ニ似タル者アリ例之ハ乳汁分泌ノ如キ其最モ較著ナル者ナリ抑乳腺ナル者ハ無數ノ小葉ヲ以テ集成セル葡萄狀ノ一大腺ニシテ其小葉ノ内面ニハ各上皮ノ細胞ヲ遍布シ而シテ其乳汁ヲ分泌スル所以ハ小葉内ノ細胞自ラ分裂シテ夥シク新細胞ヲ繁殖シ其新細胞ハ生スルニ隨テ順次ニ脂肪ヲ化成シ且自ラ破潰シテ脂肪ヲ生スルニ依ル乳球ハ即チ其多少凝集セシ者ナリ但シ乳汁分泌ノ初期ニ於テハ脂肪ノ顆粒凝聚シテ所謂コロストリウム球按スルニ「コロストリウム」ハ産後ヲ成シ其形殆ト慢性腦直接ニ分泌セル乳汁ヲ云フ

軟化ノ大ナル顆粒球第八圖(ロ)ニ似タリ然ニ其分泌スルコト愈盛ナルニ  
 隨ヒ細胞ノ繁殖シ且脂化シテ破潰スルコトモ亦愈速カニシテ其脂肪分  
 子ハ遍ク乳汁中ニ混淆シテ以テ固有ノ白色ヲ呈ハスニ至ル又其乳球  
 ハ陸續トシテ新細胞ヲ生スルニ隨ヒ下ヨリ押壓セラレテ乳腺ノ分泌  
 管中ニ前スニ其新細胞モ亦順次ニ脂化シ斯ノ如クノ以テ乳汁ノ分泌ヲ  
 保續スル者ナリ其他皮脂、耳聾、卵巢ノ黃體等ニ於ケルモ亦同一ノ作用  
 ニシテ即チ新細胞ノ順次ニ脂化シ且其破裂スルニ由テ生スル者ナリ  
 夫レ脂様變質ノ作用タル直チニ患部ヲシテ多少軟化セシムル者ニシ  
 テ組織ノ細胞質ハ之カ爲ニ悉ク撲滅セラレ細胞間ノ物質モ亦自ラ脂  
 化シ終ニ全ク本來ノ造構ヲ失ヒ絶テ其形跡ヲ見サルニ至ル就中細胞  
 ノ撲滅セラレ、ハ脂様變質ノ本態ニシテ宜ク是ヲ以テ脂肪浸潤症ニ  
 於ケルカ如ク細胞中脂肪ヲ蓄積スルモ通例依然トシテ其細胞ヲ保存

スル者ト自ラ異ナルヲ知ルヘシ又其組織ヲ侵スコト廣大ナル者ハ患部  
 稍柔軟ニシテ彈力ヲ減シ其色澤モ亦多クハ暗黃色ナルヲ以テ容易ニ  
 識別シ得ヘシト雖モ其部狹少ニシテ彼此ニ散在シ顯微鏡ヲ用フルニ  
 非スノハ鑒別シ難キ者アリ  
 又已ニ細胞ヨリ化生シタル脂肪分子ハ幸ニシテ容易ニ吸收セラレ、  
 コアリ例之ハ格魯布性肺炎ニ於テ其滲出物ノ脂化シテ終ニ吸收シ去  
 ルカ如シ是レ必ス其組織中血管ニ富ムニ非サレハ能ハサルナリ然レ  
 若シ吸收セサルハ更ニ化シテ巴布様ノ物質ニ變シ其形宛モ乾酪ノ  
 如シ是ヲ以テ古來乾酪様變性ノ名アリ  
 (乾酪様變性)乾酪様變性トハ變質機ノ一轉シテ脂肪漸ク乾涸シ柔軟ニ  
 シテ破潰シ易キ乾酪様黃色ノ物質ニ變スルヲ謂フナリ蓋シ斯ノ如キ  
 變化ハ血管ニ乏シクシテ其變質セル組織ノ自然乾涸スルニ由ル者ナ

ラソカ故ニ本來血管ニ乏シキ部分或ハ贅生ノ爲ニ其部ノ脈管ヲ消耗セシ者ニ於テ之ヲ視ルコト常ニ最モ多シ例之ハ肺ノ氣胞中内皮ノ蓄積シテ生スル者ノ如ク緻密ニ聚合セル細胞ヲ以テ成ル所ノ贅生水脈腺腦及ヒ骨組織中ノ贅生ニ於ケルカ如キ者はナリ乃チ此乾酪様變性ヲ致ス所以ハ已ニ變質セル細胞ノ乾涸スルニアリテ詳カニ之ヲ言ヘハ其液質ハ悉ク吸收セラレ又細胞ノ過半已ニ變質セシ者更ニ縮小シ其脂肪ハ漸ク石鹼ニ化シ且「コレステアリン」胆硬ヲ結成シ以テ其組織ヲシテ柔軟黃白色乾酪様ノ物質ニ變セシメ顯微鏡ヲ以テ之ヲ檢査スレハ縮小セル細胞及ヒ脂肪ノ廢壞物ト「コレステアリン」トヲ以テ成リ此物漸ク乾涸シテ愈々硬固トナルニ至レハ終ニ一層ノ纖維織ヲ以テ被包セラル

抑此乾酪質ハ殊ニ肺臟ニ於テ毎々目撃スル所ノ者ニシテ從來其性狀

及ヒ肺臟中ニ之ヲ生スル所以ノ理ニ就テ大ニ誤解セシ所アリ是レ他ナシ古來ノ慣習ニシテ乾酪質ヲ以テ悉皆之ヲ眞ノ結核ト看做セハナリ假令眞ノ結核モ亦往々多少脂化セラレテ猶諸他造構ノ脂化ニ於ケルカ如ク黃色乾酪様ノ物質ニ變スルコトアリト雖モ其形狀ヲ視テ一概ニ之ヲ結核ト認ムルハ不可ナリ故ニ其乾酪質ハ病理上ニ於テ先人ノ豫定スルカ如キ重大ナル者ニ非ス畢竟只「脂様變質」ノ一症タルノミ何トナレハ孰レノ部分ニ於テ之ヲ見ルモ啻ニ以テ細胞ノ脂化タルコトヲ徵スルニ過キス且孰レノ症ニ於テモ亦決シテ一種特異ノ發生物タルヲ證スヘキ者ナキヲ以テナリ但シ此乾酪質ハ更ニ加兒基質ニ變化シ或ハ又軟化シテ溶流スルニ至ルコトアリ

(加兒基様變性)加兒基様變性ハ即チ乾酪様變性ノ末期ニ生スル所ニシテ水脈腺骨或ハ肺中ニ於ケルカ如ク其乾酪質ノ全ク被覆セラレテ外

氣ニ抵觸セサル者ニ於テ之ヲ見ルハ最モ多シ蓋シ其變性スル所以ハ  
 乾酪質中ニ加兒基分子ヲ浸潤シテ終ニ一塊ノ加兒基ニ變スル者トス  
 加兒基様變質ノ  
 條ヲ參考スヘシ  
 (軟化)軟化モ亦乾酪質ノ變性ニシテ即チ化學的ノ作用ニ由テ其溶解ス  
 ル者ヲ謂フ是レ殊ニ腸内氣管枝ノ粘膜及ヒ肺中ニ於ケルカ如ク其乾  
 酪質ノ外氣ニ抵觸スル者ニ於テ常ニ多シトス蓋シ其乾酪質ハ全ク溶  
 解シテ稀薄膿狀ノ液ニ變シ其内ニ凝乳ノ如キ乾酪分ヲ交エ肉眼ヲ以  
 テ之ヲ視レハ宛モ膿液ニ似タリト雖モ顯微鏡ヲ以テ之ヲ檢査スレハ  
 顆粒狀廢壞物、脂肪及ヒ結晶胆硬脂ヲ以テ成ル者ナリ但シ斯ノ如ク一  
 旦軟化スト雖モ排泄セスシテ久シキヲ經ルキハ終ニ再ヒ乾涸シテ加  
 兒基質ニ變セラレ  
 一アリ

動脈脂化

凡ソ動脈脂化ニ本發症ト續發症トノ別アリ其續發症ハ「アセロマ」  
 ノ一種本條ニ於テ見ル所ニシテ即チ上皮下結締織ノ細胞中ニ焮衝性  
 脂肪浸潤ヲ生シ以テ此脂化ヲ致ス者是ナリ又本發症ハ患部補給機ノ  
 増進スルヲナク直チニ此脂化ヲ致シ病性殊ニ緩慢ナル者ニシテ動脈  
 ノ内膜中膜外膜ヲ論セス侵サル、トアリト雖モ就中其内膜ヲ侵ス  
 殊ニ多ク其脂化ハ上皮及ヒ内膜ノ表面ニ位セル結締織ノ細胞ヨリ始  
 マリ脈管ノ諸處ニ於テ一群ノ細胞ヲ侵シ漸々内ヨリ外ニ進ンテ細胞  
 間ノ物質ヲ軟化シ稀コハ亦其内膜ヲシテ悉ク消滅セシムルニ至ル  
 アリ  
 蓋シ脂化ノ初期ニ於テハ暗黃白色ノ斑點ヲ呈ハシ其形不整ニシテ微  
 シク内面ニ突起スルヲ以テ之ヲ識別シ得ヘシ但シ大動脈ノ内膜ニ於  
 テ常ニ見ル所ノ斑點ハ初メ輒モスレハ誤認シテ「アセロマ」ト爲ス  
 ア

リト雖モ此動脈脂化ハ殊ニ表面ニ位シテ剝離シ易ク之ヲ剝離スレハ下層ハ本然ノ景況ヲ保ツ者ニシテ又アセロマ<sup>レ</sup>ハ之ニ反シテ組織ヲ侵ス<sup>レ</sup>殊ニ深ク若シ其表面ヲ排除シ得ルキハ其下部不透明ニシテ變厚スルヲ以テ鑿別スルヲ得ヘシ又其脂化ハ全ク脈管裏面ノ上皮ニ限ル者多シト雖モ若シ下層ノ結締織ニ連累スル<sup>レ</sup>甚シキキハ斑點ノ形狀モ亦隨テ愈々不整トナリ鑷子ヲ以テ容易ニ剝離ス可カラサルニ至リ而シテ後其斑點ハ終ニ破潰シテ細胞消滅シ細胞間ノ物質モ亦軟化シ且顆粒狀ノ廢壞物ト爲テ血液ト共ニ悉ク流失シ唯<sup>レ</sup>脈管ノ内面ニ小ナル數個ノ糜爛ヲ遺ス<sup>レ</sup>即チ此糜爛ハ尋常ノ潰瘍ト異ナリ其狀宛モ胃ノ粘膜ニ生スル糜爛ニ似タリ

單純性ノ脂化ハ何レノ動脈ニ拘ラス之ヲ發スル<sup>レ</sup>アリト雖モ其障  
 碍ヲ致ス<sup>レ</sup>ノ最モ甚シキハ小動脈ニアリトス即チ然ルキハ特ニ其外膜

ヲ侵シテ必ス脈管ノ彈力及ヒ收縮力ヲ減スルカ故ニ其動脈ノ分布スル所ノ部分ニ變質ヲ起シテ屢々破裂セシムルニ至ル<sup>レ</sup>アリ例之ハ慢性腦軟化及ヒ腦ノ出血症ニ於ケルカ如シ又アオルタ<sup>レ</sup>ノ如キ大動脈ノ脂化ハ常ニ甚ク多シト雖モ其害タル敢テ酷クシキ者ニ非ス到底之カ爲ニ脈管ノ瘀衝及ヒ「アセロマ」ヲ生スルニ過キサルナリ其他毛細管モ亦脂化ニ罹ル<sup>レ</sup>アリ即チ然ルキハ上皮ノ細胞ヲ撲滅シテ脈管ノ實質ヲ損害スル<sup>レ</sup>殊ニ甚シク終ニ破裂スルニ至ル<sup>レ</sup>屢々之アリ是レ殊ニ腦ノ細脈管ヲ侵シテ腦内出血ヲ起ス<sup>レ</sup>多キ所以ナリ但シ慢性動脈脂化ノ症タル本來高齡ノ致ス所ニシテ即チ全身ノ活機自然ニ減衰セルノ徵ナリ且此症ニ於テハ獨リ動脈ノミナラス他部ニモ亦同一ノ變化ヲ現ハス者多シ又唯<sup>レ</sup>大ナル脈管ノミ脂化セル者ハ幼稚及ヒ健全ナル人ニ於テ屢々目撃スル所ナリ

腦髓脂化

抑、腦髓脂化ノ症タル古來腦軟化ト稱スル所ノ諸症皆是ナリ乃チ腦中血液ノ給與ヲ妨クル所ノ諸病ハ總テ此脂化ヲ生シ以テ軟化ヲ致ス者トス又其軟化セル部分ハ之ヲ周圍ノ健康組織ニ比スレハ殊ニ柔軟ニシテ試ニ一條ノ水勢ヲ注下スルモ容易ニ破潰シ或ハ全ク流散セラレハニ至ル者アリ但シ其患部ハ判然タル分界ヲ現ハスヲナク其漸ク近傍組織ニ蔓延スルモ太々著シカラサル者ナリ

又顯微鏡ヲ以テ之ヲ檢査スレハ神經纖維ノ損壞セルヲ見ルヘシ乃チ其初メ先ツ神經纖維ノ白髓凝固シ而後自ラ破潰シテ粗大ノ片塊ヲ爲シ隨テ亦脂化シ腦髓結締織ノ細胞、細脈管及ヒ灰白髓ヲ侵ス者ニ於テハ其大ナル神經細胞モ亦共ニ連累セラレ斯ノ如ク其組織ハ已ニ滅却セラレテ纖維ノ片屑ト多量ノ脂肪分子及ヒ粗大ノ顆粒球即チ所謂滲

出球第十圖如シトニ變スルニ至ル但此顆粒球ハ古來脈衝ニ由テ生スル者トシ之ヲ脈衝球ト名ケリ然レ是レ全ク細胞ノ變質ニ由テ生シタル顆粒狀脂肪ノ聚合セル者第八圖ニシテ「ウイルシヨウ氏及ヒ「ロービン氏ノ説ニ據レハ之ヲ生スル所ノ細胞ハ「チウログリア即チ腦髓ノ細胞ナリトス蓋シ此細胞モ亦脂樣變質ヲ致シテ其將ニ破潰セントスルヤ一旦頗ル膨脹シ而シテ後終ニ破潰シテ脂肪ヲ滲漏スル者タルニ似タリ又其大サ直徑五百分應ノ一ヨリ二千分應ノ一ニ至ルト雖モ之ヲ中算スレハ每個千分應ノ一トス

又灰白髓ノ脂化ニ於テハ神經ノ細肪中ニ脂胞分子ヲ含ミ其軟化セル部分ノ動脈及ヒ毛細管モ亦多クハ顆粒狀脂肪ト顆粒狀細胞トヲ充ツ蓋シ其顆粒狀細胞ハ患部ニ堆積セル白血球ノ脂化セル者ナラシカ加之脂肪分子及ヒ粗大ノ顆粒球按スルニ前ニ云フモ亦脈管ノ外面ニ附

着スルヲ見ル故ニ往々腦髓軟化ヲ生スル所ノ脈管固有ノ脂化ト之ヲ區別セシカ爲ニ精細ノ注意ヲ要スルコトアリ夫レ斯ノ如ク益々脂化スルキハ腦質全ク損壞シテ終ニ悉ク神經ノ造構ヲ失フニ至ル者ナリ又其軟化セル部分ハ各々大ニ其色ヲ異ニス例之ハ殆ト近傍ノ健康組織ニ同シキ者アリ或ハ黃色或ハ深紅色ニ變スル者アルカ如シ故ニ今其色ノ各々異ナルニ隨ヒ腦ノ軟化症ヲ分テ白色軟化、黃色軟化、赤色軟化ノ三種トス蓋シ各々其色ヲ異ニスル所以ハ概テ其部ニ含蓄セル血液ノ多少ニ拘ハル者ニシテ即チ是ヲ以テ元ト其軟化ヲ生セシ所ノ摸樣ヲ徴知シ得ヘシ

(其一白色軟化)此軟化症ハ概テ皆慢性ノ者ニシテ殊ニ老人ニ多ク是レ則チ高齢普通ノ變化ニシテ腦内細脈管ニ疾患アリ以テ血行ヲ妨ケ又一ニハ心臟收縮力ノ減衰シテ遍シ血液ヲ給與スルコト能ハサルニ由ル

者トス蓋シ此症ニ於テハ腦内血液ノ減乏スルコト太ク緩徐ニシテ毫モ充血或ハ出血ヲ起スコトナシ是レ其軟化セル部分ヲシテ宛モ健全ナル腦髓組織ノ如ク或ハ曇白ナラシムル所以ナリ然レ又偶々其白色軟化ニ急性ノ者アリ斯ノ如キハ通例イムボリズム」ヲ以テ腦内一ノ稍大ナル脈管ヲ阻塞シ以テ卒然血行ヲ遮絶スルニ由ル者ナリ」腦内イムボリズム」ノ條下ヲ參考スヘシ

(其二黃色軟化)此症ハ白色軟化ノ一種ニシテ其色殊ニ黃白ナル所以ハ脂肪分子ノ緻密ニ聚合スルニ由リ又一ニハ從前些少ノ滲血アリテ其變性セル色素ノ現存スルニ由ル者トス又其色素ハ時トシテ黑色微細ノ顆粒ト爲テ腦髓結締織ノ細胞及ヒ灰白髓ノ神經細胞中ニ散布シ卒爾ニ之ヲ窺フキハ宛モ脂肪分子ニ似タリト雖モ更ニ熟視スレハ其色暗黒ナルヲ以テ之ヲ鑒別シ得ヘシ但シ「イムボリズム」或ハ「トロムボシ

ス」ニ起因セル者ノ如ク速カニ發生シタル腦軟化モ亦稀ニハ黄色ナル者アリ然レ是レ唯、時日ヲ經テ其滲血ノ過半吸收セシ者ニ於テノミ見ル所ノ者ナリ又曾テ「ロキスタンスカイ氏カ記載セシ所ノ説ニ據レハ往々腦髓腫ノ近傍ニ發見セル膠様黄色ノ浮腫ヲ以テ之ヲ黄色軟化ノ一種類トセリ

(其三赤色軟化)此軟化ハ概テ急性ノ軟化症ニシテ「イムポリズム」或ハ「トロムボシス」ノ爲ニ尿管ヲ阻塞セラル、ニ由ル者多シ故ニ其阻塞セル部分ヨリ上ニ本幹ヨリ分枝セシ所ノ細尿管ニ於テ頗ル充血ヲ呈ハシ毛細管破綻シ且血液滲漏シ以テ其軟化セル組織ヲシテ深紅色ナラシムルニ至ル 尙イムポリズム」ノ條下ニ詳カナリ 蓋シ此赤色軟化ハ時トシテ慢性ノ白色軟化ト合併スルヲアリ即チ其然ル所以ハ元ト白色軟化ニシテ尿管ノ一二破綻シ其已ニ軟化セル組織中ニ血液ヲ滲漏スルニ由ル者トス其

他又此赤色軟化ニ焮衝性ノ者アリ宜シク腦炎ノ條下ニ就テ質スヘシ

筋質脂化

筋ハ其横紋筋ト無紋筋トニ論ナク兩ナカテ脂化ニ罹ルヲアリ而シテ其無紋筋ニ於テハ特ニ筋纖維ノ細胞ヲ侵シテ其内ニ顆粒狀ノ脂肪ヲ充テ後終ニ撲滅セラル、ニ至ル者ニシテ此症ハ動脈脂化ノ症ニ於テ其中膜ニ之ヲ見ルヲ屢之アリ

又横紋筋即チ隨意的諸筋ト心臟ノ不隨意筋トニ於テハ特ニ筋纖維ノ蛋白質ヲシテ脂肪ニ變セシム故ニ其横紋分明ナラスシテ微細ノ脂肪分子ヲ附載シノ如シ 第十一圖 而シテ後其脂肪分子ハ漸ク增多シ且愈大ニシテ筋衣内遍ク散布スルニ至ル但シ部分ニ隨テハ纖維ノ縦線ニ沿テ縱ニ其分子ヲ連續スル者アリ或ハ核ノ周圍ニ集合シ或ハ横紋ノ所在ニ沿テ横ニ並列スル者アリ又其筋纖維ハ甚々脆クシテ輒モスレハ片々



折斷シ易シ加之其病勢愈増進スルニ至テハ其横紋全ク消失シテ筋衣内管ニ脂肪分子ト油球トヲ遺殘シ其筋衣モ亦終ニ撲滅セラレテ悉ク本來ノ纖維織ヲ失ヒ唯固有ノ蛋白質ヨリ變性シタル脂肪樣廢壞物ヲ留ムルノミ

以上説ク所ノ變化ハ即チ眞ノ脂化ニシテ直チニ筋ノ原質ヲ撲滅スル者ナリ是ヲ以テ脂肪浸潤症ノ如ク元纖維ノ間ニ脂肪ヲ發生シ依然トシテ其元纖維ヲ保存スル者ト全ク異ナリトス 脂肪浸潤ノ條

心臟脂化

蓋シ此筋質脂化ノ症タル心臟ニ於テ之ヲ見ルコト最モ多ク且此症ハ心ノ縮張機ヲ損害スルカ故ニ最モ危險ニ屬ス但シ心筋悉ク一齊ニ侵サル、者アリト雖モ唯其一部分ヲ限リテ變質スル者殊ニ多シ又其部分ニ隨テ殊ニ侵サレ易キ者アリ今ドクトル、クエイン氏ノ説ニ據テ之ヲ次

第スレハ左ノ如シ即チ第一チ左室第二チ右室第三チ右耳第四チ左耳トス又其脂化スル者ヲ見ルニ組織ヲ侵スコト廣大ナルトハ通例其度輕ク偶々其高度ニ達スル者アレハ必ス其部分狹小ナリ加之患部ノ廣狹ニ隨テ各硬軟及ヒ色澤ヲ異ニス例之ハ脂化ノ度平等ニ輕クシテ患部ノ廣大ナル者ハ其筋平常ヨリモ少シク柔軟ニシテ破潰シ易ク又屢自ラ破裂シテ顆粒狀ノ片屑ヲ爲スコトアリ而シテ之ヲ心ノ健康組織ニ比スレハ其色一般稍淡薄ニシテ曇暗ナリ又之ヲ顯微鏡ニ照セハ已ニ其横紋ヲ失テ微細ノ顆粒狀脂肪ヲ含蓄セルヲ見ルヘシ蓋シ斯ノ如キ廣部ノ脂化ハ體中酸化ノ機能極メテ減衰セル諸病ノ經過中即チ俄カニ貧血トナル者或ハ漸々貧血ト爲ル者ニ論ナク總テ著シキ貧血症ヲ兼ヌル所ノ諸病ニ於テ發見スル者ニシテ就中亡血ヲ兼ヌル者ニ於テハ其脂化殊ニ急劇ナリトス 第十二圖 今茲ニ予カ經驗セシ所ノ一症ヲ舉ケ

テ之ヲ證セシ一少女常ニ虛弱ニシテ輕キ心ノ瓣膜病ヲ患ヒシカ一回  
 月經時ニ際シテ夥シク亡血シ且飲食胃ニ堪エ難クシテ忽チ心臟及ヒ  
 諸筋ノ急性脂化ヲ起シテ甚タ衰弱セシヲアリ其他心臟脂化ノ輕症タ  
 ル急性熱ノ經過中之ヲ發スルヲアリ斯ノ如キハ熱病ニ於ケル組織元  
 質ノ變化ヲ論スル條下ニ就テ之ヲ詳悉スヘシ又假令ヒ患部ハ廣大ナ  
 ルモ脂化ノ度平等ナラス諸處ニ其一部分ヲ限リテ頗ル甚タシキニ至  
 ル者アリ之ヲ前症ニ比スレハ殊ニ多シトス乃チ此症ニ於テハ心臟ノ  
 外面ニ斑點狀ヲ現ハシ其實質中ニハ無數ノ暗淺黃色或ハ茶褐色ノ斑  
 痕ヲ散布シ其大小及ヒ形狀ニ於テハ各々大ニ異ナリト雖モ心ノ乳頭狀  
 筋、肉柱及ヒ心内膜直下ノ纖維層ニ於テ之ヲ見ルヲ殊ニ多シ加之亦心  
 胞下及ヒ深ク心ノ實質中ニ位セル者アリ此斑痕ハ即チ組織中ノ最モ  
 甚シク脂化セル部分ニシテ其柔軟ナルヲ宛モ腐敗セル者ノ如ク僅カ

ニ指頭ヲ以テ壓スルモ忽チ破潰シ又顯微鏡ヲ以テ之ヲ檢査スレハ纖  
 維ノ脂化已ニ極度ニ達シテ其筋衣ニ粗大ノ脂肪分子ト油球トヲ充テ  
 又此脂肪分子及ヒ油球ノ諸處ニ筋衣ヲ脫出シテ周圍ノ脂化未タ甚シ  
 カラサル組織中ニ散在スル者ヲ見ルヘシ第十一圖(ロ)蓋シ斯ノ如キ一  
 局處ノ脂化ハ老人ニ於テ最モ多ク即チ其脂化ヲ致スヤ元ト冠狀動脈  
 ニ疾患アリ以テ血液ノ給與ヲ妨クルニ由ル者ニシテ全身ノ貧血質ニ  
 基ク者ニ非ストス其他心臟筋組織ノ表層モ亦心胞炎ノ爲ニ廣ク脂化  
 セラル、「アチウリズム」之アリ又總テ心ノ局處脂化ニ於テハ往々心臟破裂及ヒ  
「アチウリズム」擴張スルモノヲ云フチ生スル者アルヲ普ク知ル所ナ

心臟褐色消耗症

夫レ消耗症ノ一種心臟脂化ニ似テ屢之ニ併發シ筋纖維ノ漸ク消耗ス

ルニ隨テ帶黃褐色或ハ暗黑色ノ顆粒狀色素ヲ生スル者アリ所謂褐色  
消耗症ナル者はナリ乃チ其顆粒狀色素ハ許多群集シテ筋纖維ノ核チ  
圍擁スル者アリト雖モ其筋纖維中遍ク散布スル者殊ニ多シ又其筋纖  
維ハ同時ニ多少脂化セラル、ト往々之アリ第十三圖  
抑此心臟褐色消耗ノ症タル高齡自然ノ變化ニ歸スル者アリ或ハ他ノ  
原因ニ基ク所ノ全身消耗ノ一部ト爲テ現ハル、者アリ或ハ又時トシ  
テ心臟滋養過度ノ症ニ於テ之ヲ併發セシ者ヲ見ルコトアリ又之ヲ單純  
消耗症ニ比スレハ其經過殊ニ緩慢ニシテ概テ皆顯微鏡ヲ用フルニ非  
スレハ識別シ難シ

腎臟脂化

凡ソ腎臟脂化ハ癩衝ノ繼發症タル者多ク斯ノ如キハ腎炎ノ條下ニ於  
テ之ヲ論說スヘシ今茲ニ論スル所ノ本發症ハ常ニ太々稀ナリ蓋シ腎

ノ内皮ニ按スルニ分泌管ノ裏面ハ通例多少ノ脂肪ヲ含蓄スル者ナレハ  
只其非常ニ增多セシ者ノミ以テ疾病ト傲スヘシ想フニ腎臟中過多ノ  
脂肪ヲ生スルヤ世人ノ臆算スルカ如ク常ニ多キ者ニ非ス唯偶々慢性病  
殊ニ肺勞ニ於テ之ヲ發見シ或ハ又燐ノ中毒症ニ於テ之ヲ繼發スルコ  
アルノミ乃チ單純ノ脂化ハ唯皮樣部ノ内皮ニ限り其皮樣部ヲ橫斷ス  
レハ截面少シク黃白色ニシテ屢斑點狀ヲ呈ハシ其斑點ハ三稜體ノ基  
礎部ニ近キ處ニ於テ最モ明白ナリ其他腎衣ノ癒着スル者ナク亦腎ノ  
表面ニ顆粒狀ヲ呈ハスコトナキヲ以テ敢テ腎ノ官能ヲ妨ケサルコト猶肝  
臟脂化ニ於ケルカ如シ又此症ニ於テハ未ダ曾テ蛋白尿ヲ發見セシ者  
ナシ

第六章

粘液樣變質并膠樣變質

ミユコイド、エソド、コルロ  
イド、デゼチレノシヨソ

茲ニ論スル所ノ病的作用ハ一種特別ノ軟化ヲ致ス所ノ變質症ニシテ  
 即チ膠樣變質及ヒ粘液樣變質ナル者是ナリ古來此二症ヲ總稱シテ單  
 ニ膠樣軟化ト名スル者往々之アリ又假令ヒ兩ナカラ大ニ相似テ屢合  
 併スルヲアリト雖モ膠樣變質症ハ特ニ細胞體ヲ侵シ粘液樣變質症ハ  
 特ニ細胞間ノ物質ヲ侵スヲ以テ兩症自ラ異ナリトス  
 (粘液樣變質)此變質症ハ組織中ノ蛋白分ヲ「粘液素」ニ變シ其組織ヲ  
 シテ柔軟粘滑ゼルリ一様ノ物質ト爲ス者ヲ謂フナリ即チ其狀態タル  
 猶胎兒ノ組織ニ於ケルカ如シ抑胎兒ニ在テハ諸組織皆粘液質ヲ以テ  
 成リ産出ノ後尙依然トシテ本性ヲ保ツ者アリ例之ハ臍帶及ヒ眼ノ硝  
 子液ノ如キ是ナリ然ルニ發育充分ナル結締織ニ於ケル細胞間ノ物質  
 ハ膠質ト軟骨素トヲ以テ成ル者ナレハ此粘液樣變質症ハ特ニ其細胞  
 間ノ物質ヲ侵シテ再ヒ胎兒ノ狀態ニ復セシムル者タルニ似タリ又直

チニ細胞ヲ侵スルハ其プロトプラスム「ミウシ」ニ變シ漸々其細胞ヲ  
 撲滅スル者ニシテ是レ猶平常粘膜ノ上皮ニ於テ現ハル、カ如シ又所  
 謂「ミウシ」ナル者ハ膠質及ヒ軟骨質ヨリモ殊ニ能ク蛋白質ニ似テ獨リ  
 硫黃ヲ含蓄セサルヲ以テ異ナリトス又假令ヒ蛋白質ノ如ク唯、亞兒加  
 里性ノ液質中ニノミ其遊離セル亞兒加里ノ爲ニ溶解ヲ保ツ者ニシテ  
 之ニ稀醋酸ヲ注ケハ齊シク沈澱スト雖モ此「ミウシ」ハ醋酸ノ過剰ニ由  
 テ溶解セス亦其溶液ヲ煮沸シ或ハ之ニ單寧若クハ昇汞ヲ加フルモ沈  
 澱セサルヲ以テ之ヲ蛋白質ト區別シ即チ其單寧及ヒ昇汞ヲ加ヘテ沈  
 澱セサルハ又以テ膠質及ヒ軟骨質ト異ナルノ徴トス何トナレハ此膠  
 質及ヒ軟骨質ハ之ニ由テ沈澱シ得ル者ナレハナリ  
 夫レ粘液樣變質タル決シテ尋常一般ニ見ル所ノ者ニ非スト雖モ軟骨  
 殊ニ老人ノ椎間軟骨助軟骨ニ於テ最モ多ク其他又沕乙膜、硬骨及ヒ贅

生ノ類殊ニ結締織ニ屬スル所ノ贅生ニ於テ之ヲ見ルコトアリ但シ何レノ部ニ之ヲ發スルモ必ス其部ノ組織ヲシテ軟化セシメ終ニ全ク組織ノ形跡ヲ失テ無色セルリト様ノ物質ニ變セシムルニ至ル者ニシテ若シ一局處ヲ限リテ變質セシキハ囊腫ノ如ク周圍ノ健康組織ヲ以テ圍擁セラル、コトアリ殊ニ肋軟骨及ヒ贅生ノ類ヲ云フ等ニ於テ斯ノ如キ囊腫ノ粘液ヲ含蓄セル者ヲ見ルコト屢之アリ然レ此粘液様變質ノ原因ニ至テハ未ダ曾テ發明セシ者ナシ

(膠様變質)此變質症ハ特ニ細胞ヲ侵スヲ以テ粘液様變質ト自ラ異ナリ即チ細胞ノ蛋白質ヲシテ所謂膠質ニ化成セシムル者是ナリ蓋シ其膠質ハ殆ト「ミウシン」ニ似タリト雖モ化學的ニ之ヲ論スレハ硫酸ヲ含蓄シ亦之ニ醋酸ヲ加フルモ沈澱セサルヲ以テ之ヲ區別シ得ヘシ又此物無色透明ニシテ光輝アリ其稠セルリ」ノ如ク或ハ澱粉ノ半ハ沈澱セル

者ノ如クニシテ其細胞内ニ在ルヤ粒々小凝塊ヲ爲シ漸ク増大スルニ至テハ胞内ニ充滿シテ核ヲ偏側ニ壓ス第十四圖而シテ後其細胞ハ愈撲滅セラレテ悉ク膠質ニ化シ其小塊更ニ膨脹シ且相合シテ一大塊ヲ爲シ其質透明ニシテ「ゼルリー」ノ如ク肉眼ヲ以テ容易ニ之ヲ鑒別シ得ヘシ

夫レ斯ノ如ク膠質漸ク增多シテ細胞ノ撲滅セララル、ニ至ルヤ細胞間ノ物質モ亦隨テ軟化シ或ハ消耗シテ自ラ囊狀ノ空隙ヲ生シ而シテ后其内ニ含蓄スル所ノ膠質ハ更ニ變シテ流動體ト爲ル者ナリ第四十九圖乃チ此膠様變質症ハ甲腺腺ノ腫大セル者、水脈腺殊ニ贅生ノ類ノ條ヲ參考スニ於テ最モ多ク其原因及ヒ病性ハ霜粘液様變質ニ於ケルカ如ク太ク曖昧ニ屬スル者ナリ

以上論載セシ所ノ變質症ハ兩ナカラ贅生ノ類ニ於テ發見スルヲ最モ

著シトス乃チ其發生タル初メヨリ粘液瘤或ハ膠様瘤ト爲テ生スル者アリ或ハ轉シテ之ニ化スル者アリ又本來ノ粘液瘤ニシテ其實宛モ臍帶ノ如ク悉ク膠様粘液素ヲ以テ成ル者ハ勿論纖維瘤、脂瘤、軟骨瘤等モ亦此變質性軟化ノ所在トナルヲアリ

但シ斯ノ如キ腫瘤ヲ斥シテ從來之ニ膠様癌ノ名ヲ命スル者往々之アリト雖モ其造構或ハ本性ニ就テ名ケタルニ非ス又異ノ癌腫ニシテ膠様變質ヲ致スヲアリト雖モ膠様柔軟ナル腫瘤ヲ以テ一概ニ癌腫ト看做ス可カラス膠様癌ノ條ニ參考スヘシ到底腫瘤ノ名ニ冒スル所ノ粘液様或ハ膠様ナル名義ハ啻ニ形器的ノ性状及ヒ化學的ノ性質ヲ示スニ過キス決シテ腫瘤ノ本性ヲ示ス者ニ非サルヲ知ルヘシ膠様癌ノ條ニ參考スヘシ按スルニ此一段ハ變質症ト眞ノ癌腫トヲ混同スヘカラサルヲ論述スル者ナリ

第七章 補給機障礙之續

澱粉様變質 アミロイド、デゼチレーシヨン

澱粉様變質症ハ諸種ノ變質症中最モ著シキ一症ニシテ即チ一種透明ノ物質ヲ以テ組織中ニ浸潤シ之カ爲ニ組織ノ活機ヲ減衰セシメ且其官能ヲ障害スル者ヲ謂フナリ蓋シ此症ニ罹ル所ノ臟器ハ稍脂肪或ハ蠟ノ如キ景況ヲ現ハスヲ以テ古來之ニ脂様變質或ハ蠟様變質ノ名ヲ命セリ又澱粉様變質ナル名ハ曾テ「ウイルシヨウ」氏カ首唱セシ所ニシテ其物質ノ「セルリユロース」植物ノ成分或ハ尋常ノ澱粉ニ似タルヲ以テ最モ通曉シ易キカ故ニ今此名ヲ襲用ス

夫レ澱粉様變質症タル初メヨリ卒然之ヲ發スルヲ寡ナシ大抵皆他病ノ經過中殊ニ諸般ノ虛衰病ニ由テ全身惡液質ヲ呈スル者ニ併發スルヲ常トス故ニ骨質ノ慢性病、胸膿病及ヒ總テ肺質ヲ荒蕪スル所ノ慢性

肺患、腸ノ慢性潰爛、腎盂炎等ノ如ク連綿トシテ多量ノ膿液ヲ排泄スル所ノ諸病ニ於テ之ヲ見ルコト最モ多シ其他全身煤毒ノ末期ニ於テモ亦屢之ヲ發スルコトアリト雖モ通例唯慢性ノ骨患或ハ經久ノ潰瘍ヲ生スル者ニ於テノミ然リトス又部分ニ就テ論スレハ諸器諸組織皆之ニ罹ラサル者ナシト雖モ就中最モ多キハ肝、脾、腎、水脈線、及ヒ腸ナリトス之ニ反シテ胃、副腎、咽頭、胃管、膀胱、攝護腺、生殖器、物乙膜、腦脊髓膜及ヒ筋ニ於テハ之ヲ見ルコト少ナシ但シ此變質症ハ概テ同時ニ數器ヲ侵スコト多ク只其一器ニ止マル者ハ太ク罕ナリ

又其組織中ニ浸潤セル物質ノ性狀ニ就テ論スレハ曾テ「ケキユレ」及ヒ「スミット」兩氏之ヲ分拆シテ殆ト蛋白質ノ如キ一種ノ含窒素物タルコトヲ發明セリ然レ當時未タ其組織ヨリ單ニ之ヲ採收スルコトヲ得スシテ遂ニ其検査ヲ全フスルコト能ハサリシト云フ爾後コーン氏ハ純粹ノ物質ヲ

採收センカ爲ニ其臟器ニ人工消化法ヲ行ヒシニ此澱粉質ハ獨リ「ペブシン」按スルニ即ノ消化力ヲ以テ溶解セサルカ故ニ之ヲ含蓄セル組織ヨリ採收シ得タリ乃チ同氏ノ分拆セシ所ニ於テモ亦曾テ「ケキユレ」及ヒ「スミット」ノ兩氏カ分拆セシ所ノ者ト大ニ一致セリ又ドクトル、ギツキンソフ氏ハ之ヲ以テ亞兒加里鹽ヲ脱シタル纖維素ナリトシ又ドクトル、マルセツト氏ノ検査ニ於テハ此澱粉質ヲ浸潤セル臟器ノ中ニハ剝篤斯及ヒ磷酸ニ乏シク曹達及ヒ格魯林ニ富メリト云フ到底此澱粉質ニ於ケル眞ノ抱合ハ未タ之ヲ確定スルヲ得スト雖モ諸家ノ分拆セシ所ノ說ヲ參考スレハ纖維素ノ變形物タルニ似タリ

蓋シ此澱粉質タル特異ノ徵候ハ沃陳又ハ沃陳ト硫酸トヲ加ヘテ現ハル、所ノ反應ニアリ例令ハ沃度剝答叟母ヲ加ヘテ沃陳ヲ水ニ溶シ之ヲ其變質セル臟器ニ點スレハ患部ニ深赤褐色ヲ呈ハシ其色持久セス

漸々消失シテ再ヒ本色ニ復スルニ至ル又先ツ沃陳水ヲ點シ而シテ後徐々ニ硫酸ヲ注加スレハ深藍色或ハ堇花色ヲ呈ハスカ如シ然レ其硫酸ヲ加ヘテ斯ノ如キ反應ヲ見ント欲セハ須ク精細注意センコトヲ要ス殊ニ左ノ法ノ如キハ曾テ「ウイリシヨウ博士」カ稱用セシ所ニシテ先ツ稀薄ノ沃陳水ヲ點シ自ラ組織中ニ浸入スルヲ待テ其餘利ヲ傾ケ去リ而シテ後徐々ニ濃硫酸ヲ滴加スレハ即時或ハ少時ヲ經ルノ後藍色或ハ堇花色ヲ呈ハスニ至ルト云フ但シ我英國病理學家ノ試驗ニ於テハ其藍色或ハ堇花色ヲ呈ハシ得ルコト稀ナリ又假令偶々成功スルコトアルモ其色全カラス且ウイリシヨウ氏カ記載セシ所ノ如キ藍色ニ似スシテ却テ黒色ニ近シ然レ幸ニ唯沃陳ノミヲ以テ澱粉質タル所以ノ特徴ヲ呈ハスニ足ル故ニ更ニ硫酸ヲ加フルノ勞ヲ要セサルニ似タリ又變質ノ極度ニ達スル者ハ其臟器ノ截面ニ沃陳水ヲ注ケハ容易ニ帶赤褐色ヲ呈ハス

ト雖モ輕症ニ於テハ「ハレンタン氏」刀ヲ以テ薄片トナシ先ツ水ヲ以テ其血液ヲ洗除シ而シテ後沃陳水ヲ點スルニ非スハ其色著シカラサル者ナリ  
上件ノ反應ヲ以テ之ヲ比較スレハ或ル有機物ニ髣髴タル所アリ即チ「セルリコロス」ナル者ハ植物細胞ノ外膜ヲ構成スル者ニシテ沃陳ト硫酸トヲ以テ之ヲ試ムレハ藍色ヲ呈ハスコト猶此澱粉質ニ於ケルカ如シ然レ單ニ沃陳ヲ用キルキハ其色ヲ呈ハスコトナシ又コレステアリン胆液素ハ硫酸ニ由テ帶赤褐色ヲ呈ハスト雖モ沃陳ノ爲ニ變色セラルコトナシ又尋常ノ澱粉ハ沃陳ヲ以テ之ヲ試ムルニ硫酸ヲ加ヘスシテ藍色ヲ呈ハシ得ヘシ是皆本病ノ澱粉質ト大同小異アル所以ナリ  
蓋シ此澱粉質ハ初メ先ツ小動脈及ヒ毛細管中ニ現ハレ次テ周圍ノ組織中ニ蔓延スル者ニシテ其小動脈ヲ侵スヤ初メ澱粉質ヲ以テ内膜ノ



細胞及ヒ筋膜ノ細胞中ニ浸潤シ而シテ后已ニ其脈管中悉ク浸潤スル  
 キハ周圍ノ組織ニ連累シテ其細胞及ヒ細胞間質ヲ侵シ斯ノ如ク漸々  
 蔓延シテ終ニ全臟器中悉ク澱粉質ヲ充盈スルニ至ル者ナリ  
 又澱粉質ヲ浸潤シテ其組織ヲ變スルヤ性狀特リ自ラ他ニ異ナル者ア  
 リ乃チ其細胞ニハ澱粉質ヲ充盈シテ漸ク膨大シ且平常ノ凸凹形ヲ失  
 テ愈球圓トナリ又其内ニ藏スル所ノ核ハ自ラ消失シテ全細胞只同一  
 ノ物質ニ變シ透明ニシテ一種固有ノ光輝ヲ生ス第十五圖加之其細胞  
 相互ニ密接スル者ハ數個鎔合シテ分界ヲ失フニ至ル第十五圖但シ  
 細胞間質モ亦同一ノ景況ヲ得ル者ナリ又小動脈ノ周壁即チハ早ク已  
 ニ變化シテ頗ル肥厚シ筋膜ノ細胞膨脹シテ終ニ相附着シ以テ脈管ノ  
 口徑ヲ減シ隨テ亦血液ノ流通ヲ妨クルニイタル第十七圖但シ其變化  
 ノ極度ニ至テハ全臟器ノ形狀モ亦自ラ特異ノ景況ヲ呈ハシ肉眼ヲ以

テ容易ニ鑒別シ得ヘシ即チ然ルキハ其形頗ル大ニシテ全量及ヒ異重  
 ヲ増加シ表面滑澤ニシテ其外衣緊張シ之ニ觸ルレハ堅硬ニシテ稍彈  
 カアリ又之ヲ半斷スレハ其截面透明ニシテ光輝アリ且少シク蠟或ハ  
 膠ニ似タリ又其部ノ血管ハ已ニ狭小トナリ且贅物ノ爲ニ壓迫セラレ  
 テ血液ヲ含蓄スルコト少ナシ是レ每常其色淡薄ナル所以ナリ蓋シ斯ノ  
 如キ變化ハ普ク一臟器中ニ及フ者アリ或ハ其一部ニ限ル者アリ例之  
 ハ脾臟ニ於テハ「マルビギー」氏體ニ限リ肝臟ニ於テハ肝動脈近傍ノ細  
 胞ニ限ルカ如シ  
 以上記載セシ所ノ性狀ヲ以テ概テ此澱粉樣變質症タルコトヲ徵知シ得  
 ヘシト雖モ每常必ス其截面ニ沃陳水ヲ點シテ尙之ヲ確證セシコトヲ要  
 ス况ヤ輕症ニシテ其性狀判然タラサル者ニ於テチヤ須ラク此試驗ニ  
 依テ以テ澱粉質ノ有無ヲ證明セズンハアルヘカラス其法直チニ沃陳

水ヲ注クキハ反應ヲ呈ハサバ、ルヲ多キカ故ニ宜ク先ツ「ハレンヂン」氏  
 刀ヲ以テ薄片ト爲シ水ヲ以テ其血液ヲ洗除シ而シテ后沃陳水ヲ點ス  
 ヘシ加之初期ニ於テハ顯微鏡檢査ヲ要スル者モ亦尠シトセス  
 又此澱粉樣變質ノ病的作用ハ之ニ罹ル所ノ臟器ノ榮養及ヒ官能ヲ妨  
 ケ或ハ之ヲシテ悉ク廢絶セシムルニアリトス乃チ其然ル所以ノ原因  
 ニ二般アリ一ニハ血液循環ヲ阻塞シ又一ニハ贅物ヲ以テ直チニ臟器  
 ノ「パイレノシマ」ヲ壓迫スル者是ナリ蓋シ此原因タル脈管ノ口徑ヲ減  
 シ且其浸潤セル物質ヲ以テ一般ノ組織ヲ壓迫シテ以テ動脈血ノ給與  
 ヲ減スルカ故ニ諸部ニ於テ消耗性變化ヲ繼發シ其細胞ヲシテ自ラ消  
 滅セシメ且脂樣變質ヲ致スヲアリ是レ即チ澱粉樣變質ニ於テ屢、脂樣  
 變質ヲ兼ヌル者アル所以ナリ加之其細胞中澱粉質ヲ浸潤スルヲ愈、多  
 ク隨テ其活機ヲ妨クルヲ甚シキキハ終ニ細胞ノ官能ヲシテ全ク廢絶

セシムルニ至ルモノナリ  
 但シ此澱粉樣變質症ハ大率先ツ全身ニ重大ノ病症アリテ後之ヲ繼發  
 スル者ニシテ假令之カ爲ニ死期ヲ促カシ或ハ危險ニ陥ラシムルヲア  
 ルモ單ニ此變質症ヲ以テ死ヲ致ス者ハ果シテ罕ナリ  
 上件既ニ澱粉質ノ性狀及ヒ臟器ノ組織中ニ浸潤スル摸樣ヲ記載セリ  
 故ニ今將ニ澱粉質ノ本源ニ論及セントス抑、本病ハ一種ノ浸潤症ニシ  
 テ血液ヨリ諸般ノ組織及ヒ臟器中ニ其贅物ヲ沈降スルニ由ル者タル  
 一殆ト疑ナシト雖モ血中常ニ沃陳ノ反應ニ於テ此澱粉質ニ髣髴タル  
 蛋白分ヲ存スルヤ否未タ曾テ之ヲ證明セシ者ナシ假令變質ノ極度ニ  
 於ケルモ亦然リ是ヲ以テ考レハ此病ヲ以テ單純ノ浸潤症ト做ス可カ  
 ラサルニ似タリ又假リニ此澱粉質ヲ以テ悉ク血液ヨリ來ル者トナス  
 モ其組織中ニ浸潤スルニ至ルマテ多少必ス化學的ノ變化ナキヲ得サ

ルノ理ナリ

茲ニ又ドクトル、ギッキンソン氏ノ説ニ據レハ此澱粉質ヲ以テ亞兒加里  
 ナ脱シタル纖維素ナリトシ乃チ其沈降スル所以ハ纖維素中常ニ含ム  
 所ノ亞兒加里ヲ失フニアリテ通例之カ前驅タル慢性膿潰ヲ以テ其膿  
 中多量ノ剝答叟母及ヒ曾實謨鹽ヲ排除スルニ由ル者ナリト云フ故ニ  
 同氏ハ之ヲ「デビュレチーブ、インフィルトレーション」按スルニ血液ヲ清淨ニ  
 センカ爲メノ良能ニ出  
 ツル所ノ浸潤ト名ケリ蓋シ其説ノ當否如何ハ姑ク措テ論セサルモ本  
 症ノ義ナリ  
 病ノ原因ハ元ト血液ノ不調ニアリテ即チ血液ヨリ來ル所ノ或ハ蛋白質  
 ナシテ組織中ニ凝滯固結セシムル者タルヲ殆ト疑ナキニ似タリ何ト  
 ナレハ一臟器中數般ノ組織ヲ侵スヤ每常必ス小血管ヨリ始マリテ周  
 圍ノ組織ニ連累シ又同時ニ數臟器ヲ侵スキハ其性狀ニ於テ大率一致  
 シ且日常ノ實際ニ於テモ亦皆慢性ノ膿潰症ニ繼發スルヲ以テナリ是

ヲ以テ其原因ハ血液調和ノ變ニアルトヲ證スルニ足ルヘシ

肝臟澱粉樣變質

夫レ肝ノ性タル最モ此澱粉樣變質ニ罹リ易キ者ニシテ假令ヒ其變化  
 ハ肝ノ細胞ニ於テ殊ニ著シト雖モ猶他部ノ變質症ニ於ケルカ如ク大  
 抵皆小ナル榮養動脈即チ肝動脈ノ細枝別ヨリ始マリ漸ク浸潤シテ之  
 ト相接近セル細胞ニ及ヒ終ニ悉ク全臟器中ニ連累スルニ至ル但シ初  
 期ニ於テハ其肝ヲ檢査センカ爲メニ之ヲ薄片トナシ其血ヲ洗除シテ  
 之ニ沃陳水ヲ點スルモ唯小葉中ノ一部分即チ其外部ト中心部トノ間  
 ニノミ固有ノ反應ヲ呈ハス者ナリ是レ即チ肝動脈ノ分布スル部分ニ  
 シテ初メ先ツ此脈管ト共ニ近傍ノ細胞ヲ侵スニ由テ然リトス第十六  
 圖ノコ  
 ト又漸ク増進スルキハ終ニ全小葉ヲ侵スニ至ルヲアリ蓋シ肝臟細胞  
 ノ變化ハ最モ著シキ者ニシテ其細胞頗ル膨大シ且周邊平等ナラスシテ

内核已ニ視ル可カラサルニ至リ數個相鎔合シテ不整ノ片塊ヲ爲ス者ナリ第十五圖

凡ソ此澱粉様變質症ハ初期ニ於テ獨リ其部位ヲ異ニス何トナレハ脂肪浸潤症ニ於テハ初メ小葉ノ外表即チ門脈ノ分布セル部分ニ當テ脂肪ヲ蓄積シノ如シ又肝ノ充血症ニ由テ細胞中色素ヲ沈澱スル者ハ特ニ中心部肝靜脈ノ周圍ニ始マルヲ以テナリ肝臟肉豆蔻様變質故ニ毎小葉ニ於テ之ヲ三線ニ分テハ外縁ヲ脂様變質ノ部位トシ中心ヲ色素變質ノ部位トシ其中間ヲ澱粉様變質ノ部位トス乃チ外縁ハ曇白中間部ハ透明中心部ハ暗黒ナルヲ以テ直チニ鑒別シ得ヘキ者屢之アリ然レ此澱粉様變質ノ極度ニ於テハ小葉ノ外縁及ヒ中心部モ亦兩ナカテ之ニ連累セラレテ其截面殆ト皆一樣同質ノ者ノ如ク見ユルヲアリ又外貌ヲ望ムニ此澱粉様變質症ニ於テハ肝臟著シク膨大シ其甚シキ

ハ殆ト全腹ヲ充ツルニ至ル者アリ但シ其膨大スルヤ滿面一齊ニ膨脹スルカ故ニ敢テ原形ヲ變セスト雖モ其全量及ヒ異重ヲ増加シ邊縁圓クシテ外面滑澤トナリ且其外膜緊張シ又之ニ觸ルレハ堅硬ニシテ彈力アリ之ヲ半斷スレハ其截面乾燥シテ血液ニ乏シク透明滑澤ニシテ宛モ蠟ノ如ク其色淡薄ニシテ帶赤灰白色トナリ或ハ暗黃色ナル者アリ加之變質ノ極度ニ至テハ已ニ全ク組織ノ痕跡ヲ失テ全量同一質ノ物トナリ小葉間ノ分界モ亦悉ク消滅スル者アリ或ハ又其小葉ハ判然呈ハス者アリ斯ノ如キハ即チ脂様變質ト澱粉様變質トヲ合併スル者ニシテ常ニ太ク多シトス但シ澱粉質ノ浸潤症ハ敢テ門脈ノ血行ヲ阻塞セサルカ故ニ腹水ヲ起スニ至ラズト雖モ肝臟細胞ノ活機ヲ妨ケ以テ肝ノ機能按スルニ即チ胆汁分泌機ヲ云フヲ減衰セシムルニ足ル者ナリ

## 腎臟澱粉樣變質

腎モ亦甚ク此澱粉樣變質症ニ罹リ易キ者ニシテ特ニ侵サレ易キハ其細尿管ナリトス乃チ之ニ本發症ト腎臟炎ノ繼發症トノ二種アリ其本發症ハ即チ「ブリフト病」中ノ一種最ナル者ナリ

蓋シ此變質機ハ腎ノ「マルビギー」氏體ヲ構成スル所ノ脈絡叢ヨリ始マリ血管ノ周壁即チ脈管ノ實質ヲ云フ中ニ澱粉質ヲ浸潤スルカ故ニ其脈絡叢ヲシテ増大セシムルニ至リ而シテ后マルビギー氏體ノ小ナル入脈ニ連累シ加之終ニハ又出脈及ヒ髓樣部ヲ穿透スル所ノ直細動脈ヲ侵スニ至ル即チ其脈管ノ變化ハ甚ク著シキ者ニシテ例之ハ其周壁頗ル變厚シテ以テ口徑ヲ減シ其最モ小ナル者ハ之ニ注入法ヲ行フモ通スルヲ能ハサルニ至ルカ如シ但シ其周壁ヲシテ變厚セシムル所以ハ專ラ脈管筋膜ノ變ニ關カル者ニシテ殊ニ環狀筋纖維ノ細胞頗ル膨大シテ多少

球圓トナリ亦已ニ其分界ヲ失フ者多ク又筋膜ノ縱纖維ト内膜トハ宛モ光輝アル一層ノ膜ノ如ク其質皆一樣ニシテ更ニ組織ノ形跡ヲ見サル者屢之アリ第十七圖夫レ斯ノ如ク已ニ其脈管中悉ク澱粉質ヲ浸潤スルキハ未タ三稜體ノ脈管ヲ侵サ、ル前先ツ皮樣部細尿管ノ間ニ位セル組織中ニ澱粉質ヲ浸潤シテ以テ細尿管ヲ圍擁ス症ニ隨テハ亦直チニ細尿管内ニ滲出スル者アルニ似タリ何トナレハ沃陳水ヲ以テ其内ニ含蓄セル「カスト」ヲ試ムルニ偶ニ深藍色ヲ呈ハス「アレン」ハナリ然レ是レ只稀有ノ一症タルノミ但シ變質ノ初期ニ於テ他ノ變質症ヲ兼チサルキハ細尿管及ヒ其裏面ノ上皮ニ於テ毫モ變化ヲ呈ハサ、ルヲ常トス而シテ其細尿管中蒼白色透明ノ「カスト」ヲ含蓄スル者多ク尿中ニモ亦之ヲ視ルヘシ又偶ニ發見スル所ノ反應ヲ以テ論スレハ脈管及ヒ細尿管ノ間ノ組織中ニ滲透スル所ノ物質ニ似タリト雖モ此「カスト」ハ蓋

シ尋常ノ滲出物ナラシカ又變質機ノ末期ニ至テ其澱粉質ヲ浸潤スル  
 一愈多キハ細尿管ヲ壓迫シテ諸處ニ壅塞ヲ起シ其壓力平等ナラサ  
 ルキハ一部分擴張シテ小ナル囊狀ヲ爲ス一アリ又其裏面ノ上皮ハ初  
 メハ常ニ異ナラスト雖モ自己ノ榮養ヲ妨ケラレテ終ニ消耗シ且漸ク  
 脂樣變質ヲ致ス者ナリ但シ症ニ隨テハ猶加答兒ノ作用ニ於ケルカ如  
 ク細尿管中上皮ヲ增生シテ以テ之ヲ填塞スル一アリ其他亦細尿管ノ  
 間ニ結締織ヲ增生スル者ヲ見ル一往々之アリ

蓋シ腎ノ澱粉樣變質症タル初メハ血行ヲ阻塞スルヲ以テ本症トス例  
 之ハ血管ノ口徑縮小シテ僅カニ血漿ヲ通スレハ容易ニ血球ヲ通スル  
 一能ハサルカ如シ是レ腎中ノ一部ヲシテ蒼白色ナラシムル所以ナリ  
 又動脈ノ周壁ハ液質及ヒ蛋白分ヲシテ滲透シ易カラシムルカ故ニ其  
 尿多量ニシテ蛋白分ヲ含ム者ナリ即チ之ヲ以テ本病初期ノ徵候ト爲

スニ足ル但シ其澱粉質ヲ浸潤スル一愈多キハ細尿管ヲ壓迫シ爲ニ  
 阻塞セラレテ尿量減少スト雖モ他ノ「プリフト」症ニ於ケルカ如ク尿素  
 ノ分泌ヲ妨クル一甚シカラサルカ故ニ敢テ尿毒症ヲ發スル一ナシ又  
 細尿管中ノ「カスト」ハ稀ニハ其數夥多ナル者アリ且時トシテ脂化セル  
 上皮ノ細胞ヲ以テ被覆セラレ、一アリト雖モ概チ皆透明或ハ微細ノ  
 顆粒狀ヲ現ハス者ナリ

但シ本病ノ初期ニ於テハ唯腎臟皮樣部ノ蒼白色ニシテ少シク硬固ナ  
 ルノミ其他變徵ナシ故ニ之ヲ半斷シ或ハ之ヲ片截シテ水ヲ以テ洗ヒ  
 而シテ后其截面ニ沃陳水ヲ點スルニ非スハ其病狀ヲ確證シ難シ乃  
 チ此試驗法ヲ行フテ忽チ微細ナル赤點ノ皮樣部中ニ散漫スルヲ見ル  
 キハ之ヲ「マルビギ」氏體ノ變質セシ者トス又其已ニ増進スルニ至テ  
 腎ノ膨大スル所以ハ特ニ皮樣部ノ變厚ニ關係ス即チ然ルキハ外面滑

澤ニシテ容易ニ其外膜ヲ剝離シ得ヘク而シテ其變厚セル皮樣部ハ蒼白色ニシテ血液ニ乏シク且全量同質透明堅硬ニシテ宛モ蠟ノ如キ固有ノ景況ヲ現ハス者ナリ又腎ノ表面ニハ只僅カニ血管ヲ分布スト雖モ三稜體ノ基礎部ニ於テハ却テ血絡ノ輻湊スル者ヲ見ルヲアリ而シテ其截面ニ沃陳水ヲ注クハ宛モ注入法ヲ行フカ如ク判然トシテ「マルビギー」氏體及ヒ皮樣部ノ動脈ヲ現出シ得ベシ但シ「マルビギー」氏體ハ之ニ沃陳水ヲ注カサルモ已ニ著シク膨大シテ宛モ星ノ如ク瑩々タル光輝ヲ發スルヲ以テ通例之ヲ鑒別シ得ル者ナリ又皮樣部ノ一般透明ナル中ニ暗黃白色ノ細線條ヲ通貫スルハ即チ細尿管内上皮ノ脂化セル者ニシテ本病末期ノ徵ナリ加之終ニハ多少腎臟ノ外膜ト實質ト適合シ而シテ其表面ニ輕微ノ陷凹ヲ現ハスヲアリ是レ即チ細尿管ノ一二消耗セラル、ニ依ルナリ又往々目撃スル所ノ如ク澱粉質ノ浸潤

ニ兼テ細尿管ノ間ニ結締織ヲ增生スルハ腎ノ消耗ヲ致スヲ殊ニ著シトス  
腎炎ノ條下ヲ  
參考ス可シ

脾臟澱粉樣變質

凡ソ脾臟ノ澱粉樣變質症ニ二種アリ一ハ獨リ「マルビギー」氏體ノ變質スル者所謂西穀脾又一ハ特ニ軟肉即チ實質ヲ侵ス者是ナリ就中甲症ヲ最も多シトス乃チ「マルビギー」氏體中ニ澱粉質ヲ浸潤スルハ之ヲシテ蠟樣透明ノ物質ニ變セシムル者ニシテ其質殊ニ能ク西穀米粥ニ似タルヲ以テ西穀脾ノ名アリ蓋シ其變質機ハ「マルビギー」氏體ノ細動脈ヨリ始マリ其實質ニ及ボスヤ必ス先ツ動脈中ニ浸潤スルノ後ニアリトス而シテ既ニ其實質ニ連累スルニ至レハ「マルビギー」氏體ヲ構成スル所ノ淋發細胞ヲ侵シテ其細胞變大シ且周邊愈不等トナリ數個相鎔合シ終ニ全細胞ヲジテ只一塊ノ蒼白色堅硬透明光輝アル物質ニ變セシム

ル者ナリ第十八圖

又此變質症ニ於テハ脾臟膨大シテ其秤量及ヒ異重ヲ増加シ之ヲ半斷スレハ其截面滑カニシテ枯燥シ滿面西穀米狀ノ光輝アル小球ニ即チ「マルビギー」氏體ヲ裝シ其大カ粟粒ヨリ麻子大ニ至ルノ差アリ之ニ沃陳水ヲ注ケハ帶赤褐色ノ細點ヲ呈ハスヲ視ルヘシ即チ此小球タルヤ初期ニ於テハ極メテ微細ニシテ其組織ヲ薄片ト爲スニ非スハ視ルヲ能ハスト雖モ終ニハ頗ル膨大シテ脾臟中ノ一大部分ヲ占ムルニ至ル者ナリ

又脾臟澱粉樣變質ノ一種ニシテ「マルビギー」氏體ノ間隙ヲ充ツル所ノ軟肉即チ「パーレン」シマ中ニ此澱粉質ヲ浸潤スル者アリ想フニ是レ唯前症ノ末期ニシテ「マルビギー」氏體ヨリ周圍ノ軟肉中ニ波及シ以テ終ニ脾ノ全質ヲ侵セシ者ナルヘシ乃チ此症ニ於テハ脾臟ノ膨大スルヲ

頗ル甚シキニ至リ之ヲ前症ニ比スレハ殊ニ大ニシテ且頗ル堅硬トナリ其外膜モ亦緊張シテ透明トナリ之ヲ半斷スレハ其截面乾燥シテ血液ナク稍透明ニシテ遍ク暗赤褐色ヲ呈ハシ又刀ヲ以テ容易ニ片截シ得ルヲ猶軟カナル蠟ヲ截ツカ如シ但シ此症ニ於テ「マルビギー」氏體ノ判然タラサル所以ハ蓋シ周圍ノ軟肉中ニ澱粉質ヲ浸潤スルヲ甚ク稠密ニシテ以テ之ヲ隱匿スルニ依ル者ナラシカ

水脈腺澱粉樣變質

凡ソ水脈腺ノ變質症タルヤ猶脾臟ニ於ケルカ如ク初メ其腺ノ濾胞ニ联接セル細動脈ヲ侵シ而シテ后之ヨリ濾胞内ノ細胞ニ波及シ終ニ其濾胞ヲシテ全ク同質ノ小塊ニ變セシムルニ至ル乃チ然ルハ其腺變大シテ之ヲ半斷スレハ宛モ蠟ノ如キ細球ヲ以テ腺ノ皮樣部中ニ散布スル者ヲ見ルヲ屢之アリ



抑、水脈腺ナル者ハ大ニ血液製造ニ關スルヲ以テ此澱粉様變質症ニ罹ルキハ必ス著シク全身ノ羸瘦及ヒ貧血ヲ致スヲ猶脾臟ニ於ケルカ如シ而シテ此脾臟モ亦同時ニ連累セラレ、ト常ニ多シ

第一道澱粉様變質

夫レ第一道中悉ク澱粉様變質症ニ罹ルキハ吸収及ヒ分泌機ヲ妨ケ隨テ亦必ス全身ノ榮養ヲ減スルカ故ニ以テ重大ノ一症トス然レ此症ハ患部ノ形狀ヲ變スルヲ著シカラサルカ故ニ輒モスレハ等閑ニ看過スルヲアリ乃チ其粘膜炎ヲ見ルニ只、少シク蒼白色ニシテ透明ナル浮腫ヲ現ハスノミ其他ノ變化ハ肉眼ヲ以テ之ヲ視察シ難シ又沃陳水ヲ以テ之ヲ試ムルモ水ヲ以テ能ク其粘膜炎ヲ洗ヒ而シテ后之ヲ注クニ非スノハ其性狀ヲ審カニシ難シ但シ小腸ハ殊ニ之ニ罹リ易キ部分ニシテ沃陳水ノ反應最モ著シ乃チ沃陳水ヲ注キテ其粘膜炎ノ表面ニ遍ク赤褐色

ノ細點ヲ呈ハスヤ此細點ハ正ニ腸絨ニ當ル所ノ部分ニシテ其部ノ動脈及ヒ毛細管中ニ澱粉質ヲ浸潤スルノ徵ナリ其他胃及ヒ食道ニ於テモ亦其粘膜炎ニ沃陳水ヲ注ケハ齊シク脈管ヲ現出シ得ヘシ又小腸ノ變質症ニ於テ物乙液下利ヲ起ス所以ハ蓋シ脈管ノ側壁ニ澱粉質ヲ浸潤シ他液ヲシテ愈、滲透シ易カラシムルニ由ル者ナランカ

澱粉體 コルボラアミラセア

澱粉體ハ神經系、攝護腺及ヒ其他ノ部分中ニ於テ屢、目撃スル所ノ者ニシテ從來一般之ヲ以テ多少澱粉質 按スルニ同上變質ニ類似セル者トス然レ只沃陳及ヒ硫酸ノ反應ニ於テ少シク之ニ髣髴タルノミ其他毫モ類似セル所ナシ又此澱粉體ハ渦旋狀ニ數層相疊テ成ル所ノ正圓或ハ精圓ノ者ニシテ屢、沃陳ノ爲ニ深藍色ニ變スルヲアリ故ニ其造構及ヒ化學的ノ性質ニ於テ大ニ植物性澱粉ニ似タリ 第十九圖 然レ又稀ニ

ハ沃陳ニ次テ硫酸ヲ加フルニ非スンハ此藍色ヲ呈ハサ、ル者アリ是  
 ナ以テ考レハ亦同上變質症ノ澱粉質ニ似タリ而シテ其小ナルハ極メ  
 テ微細ノ顆粒ニシテ顯微鏡ヲ用キルニ非スンハ鑒識スルヲ能ハスト  
 雖モ其大ナル者ニ至テハ之ヲ用キルヲ要セスシテ自ラ判然タリ加之  
 其直徑大約一二線許ニ至ル者アリ但シ其大ナル者ハ通例皆微細ナル  
 顆粒ノ聚合ヨリ成ル所ニシテ總衣ヲ被ムル者多シ  
 凡ソ此澱粉體ハ特ニ神経系ノ消耗症或ハ其軟化症ニ於テ發見スル者  
 ニシテ其所在ハ腦中諸竇ノ内膜、白質、測竇中ノ脈絡叢、視神經、網膜、脊髓  
 等ヲ最モ多シトス又其大ナル者ハ攝護腺ニ於テ之ヲ視ルヲ最モ多シ  
 殊ニ大人ノ攝護腺中ニハ大概皆二三個ヲ含有シ時トシテハ大ニ蓄積  
 シテ數個ノ凝塊ヲ爲スニ至ルヲアリ加之肺、粘膜炎及ヒ物乙膜ニ於テモ  
 亦偶々之ヲ視ルヲアリト云フ

夫レ澱粉體タル上件已ニ論載セシ所ノ如ク偶々沃陳ニ次テ硫酸ヲ加フ  
 ルニ非スンハ反應ヲ呈ハサ、ル者アリト雖モ通例皆單ニ沃陳ヲ以テ  
 鮮藍色ヲ呈ハス者トス然レ其他却テ青色或ハ茶褐色ヲ呈ハス者モ亦  
 鮮カラス是レ其澱粉體中ニ沃陳ニ由テ黃色ニ變スヘキ含窒素物ヲ混  
 在シ其黃色ト藍色ト相合シテ此青色ヲ呈ハス者トス故ニ其含窒素物  
 ナ混在スルヲ愈々多キハ其色隨テ亦茶褐色ニ變スル者ナリ  
 又其造構ノ渦旋狀ナルヲ以テ考レハ此澱粉體ナル者ハ先キニ成立セ  
 ル分子ノ表面ニ漸々某ノ物質ヲ沈降シ次第ニ相疊テ成ル者タルニ似  
 タリ然レ其物質ニ於テハ澱粉様變質症ニ於テ臟器中ニ浸潤スル者ト  
 自ラ異ナリ加之之ヲ發生スル所ノ景況ト性狀及ヒ所在トニ於テモ亦  
 兩症全ク相異ス例之ハ澱粉様變質症ハ即チ全身ノ變化ニシテ皆一種  
 ノ蛋白質ヲ以テ許多ノ臟器中ニ浸潤スレハ此澱粉體ヲ生スルヤ必ス

唯一局所ニ限ルカ如シ但シ此澱粉體ハ高齡自然ノ局所消耗症ニ於テ之ヲ生スルヲ多シ是レ蓋シ組織中自ラ澱粉様物質ヲ分離シ已ニ其近傍ニ存在セル游離ノ分子上ニ沈降セシ者ナランカ  
又此澱粉體中殊ニ腦ノ側竇内及ヒ其脈絡叢ニ發生スル者ハ輒モスレハ加兒基質ニ變シテ所謂腦砂ヲ生スルヲアリ是レ常ニ其部ニ於テ之ヲ目撃スルヲ多キ所以ナリ

第八章

加兒基樣變質

カルカリウス、デセチレーション

加兒基樣變質症ハ組織中ニ加兒基分子ヲ浸潤スル者ニシテ譬ハ猶尋常骨ノ發育ニ於テ纖維織或ハ軟骨組織ノ細胞間ニ石灰及ヒ麻屈涅失亞鹽ヲ沈降スルカ如シ然レ此加兒基樣變質症ト化骨トハ宜ク之ヲ區別スヘシ乃チ骨ノ發育即チ化骨ニ於テハ啻ニ加兒基鹽ヲ沈降スルノミナ

ラス組織中ノ細胞モ亦隨テ繁殖シ其加兒基質ヲシテ全ク組織ト親和セシメ以テ眞骨ヲ構成シ更ニ加兒基質ノ游離セル者ヲ視サルニ至ル又加兒基樣變質症ハ之ニ反シテ單ニ虛性ノ作用ニ出ツル者ニシテ其部ノ補給機増進、細胞ノ繁殖、造構ノ更換等一モ之ト併行スルヲナク唯、加兒基分子ヲ浸潤スルノミ

凡ソ加兒基質ヲ浸潤スルヤ之ニ二様アリ一ハ血中加兒基分ヲ增多シテ其過剩ノ一部分ヲ組織中ニ沈降スル者又一ハ血中之ヲ增多スルヲナキモ組織ノ變化ニ由テ自ラ其中ニ沈降スル者はナリ乃チ甲症ハ常ニ太ク稀ナリト雖モ或ハ骨質軟化症殊ニ廣大ナル腐骨症及ヒ「オステオマラシア」大人ノ骨軟化症ヲ云フニ於テ偶之ヲ見ルヲアリ即チ此病ニ於テハ骨質ヨリ加兒基鹽ヲ游離シテ再ヒ之ヲ血中ニ歸シ其一部分ヲシテ他ノ組織中ニ沈降セシムル者ニシテ同時ニ許多ノ臟器ヲ侵シ全身中普ク

多少ノ加兒基樣變質ヲ致スヲ常トス但シ「オステチマラシア」ニ於テハ腎、肺、胃、腸、厚、腦膜及ヒ肝臟等ニ多少加兒基鹽ヲ浸潤スル者ヲ視ルヲ屢之アリ乃チ其加兒基鹽ヲ沈降スルヤ直チニ血管ヲ圍擁スル所ノ組織ヲ以テ始トス例之ハ肺ニ在テハ小葉間ノ組織ヨリ始マリ腎ニ在テハ細尿管及ヒ其間隙ヲ充ツル所ノ組織ヨリ始マルカ如シ又痛風ニ於テ過剩ノ尿酸曹達ヲ沈降スルヤ此加兒基樣變質症ト殆ト同一ノ作用ニ出ツル者ナリ

然レ加兒基樣變質症ハ一般血液ノ變ニ關カラスノ獨リ組織ノ變ニ基キ健體ニ在テハ自ラ能ク血中ニ溶解シ得ル所ノ鹽分ヲシテ其組織中ニ沈降セシメ以テ一局處ノ變質ヲ致ス者最モ多キニ居ル而シテ其組織ヲ變スル所以ハ其部ノ血液減少シ且血行怠慢ニシテ充分ニ榮養スルヲ能ハサルニ由ル故ニ一部分ノ消耗ヲ致ス所ノ摸樣ニ兼テ其部ノ

血行ヲ妨グ可キ者例之ハ瘀衝、贅生ノ發育過急ナル者、滋養品ノ不足及ヒ全身ノ活機ヲ減殺スヘキ諸件等ノ如キハ皆此變質ヲ起シ易キ者ニシテ是レ常ニ「アセロマ」症ニ罹ル所ノ動脈、肺臟若クハ水脈腺中ノ乾酪質、諸贅生、老人ノ血管及ヒ軟骨等ノ加兒基樣變質ヲ致ス者アル所以ナリ但シ此加兒基樣變質モ亦之ニ先行スル所ノ病狀ニ於テハ略、脂樣變質ト一致ス而シテ其病理ノ講究シ難キ互ニ相伯仲スト雖モ畢竟脂樣變質ヨリ此加兒基樣變質ヲ繼發スル者ノ太々多キヲ以テ考フレハ此症ハ唯、脂樣變質症ノ末期タルノミ

又其已ニ消耗セル造構中ニ加兒基質ヲ沈降スル所以ハ一ニ「ハリンド」フ「レ」ス「氏」ノ說ノ如ク一部ニ血液滯溜シ之カ爲ニ加兒基鹽ヲ溶解シ得ル所ノ炭酸ハ自ラ游離シ去テ獨リ加兒基鹽ヲ沈降セシムルニ由リ又一ニハ組織ノ原質已ニ變質セラレ其養液ヲ同化スルヲ能ハサルニ

由ル者トス蓋シ此加兒基分子ハ管ニ細胞間ノ實質中ノミナラヌ細胞  
 内ニモ亦齊シク發見スト雖モ其細胞間ニ現ハル、者殊ニ多ク其始ハ  
 只微細ノ分子ヲ以テ細胞間ノ實質中ニ散漫スルノミ第二十圖乃チ顯  
 微鏡ヲ以テ之ヲ透見スレハ暗黒色不齊ノ分子ニシテ之ニ稀薄ノ鑛酸  
 類ヲ注ケハ容易ク溶解シ得ヘシ而シテ其分子ノ漸々增多スルニ至テ  
 ハ終ニ其組織中處々ニ凝集シテ不透明加兒基質ノ部分ヲ生シ其中ノ  
 細胞ハ爲ニ隱匿セラレテ識別シ難キ者ナリ乃チ其凝塊ノ較大ナル者  
 ハ周邊黒色不齊ナリト雖モ其已ニ全ク變質セシ者ハ全量同質半透明  
 ニシテ光輝アリ又細胞ハ之ヲ細胞間ニ比スレハ加兒基質ヲ浸潤スル  
 一少ナクノ只其已ニ變質セル細胞間質ヲ以テ隱匿セラル、ノミ然レ  
 此加兒基分子ハ細胞内ニモ亦多少發見スル者ニシテ其漸ク增多スル  
 ニ至テハ其細胞ヲシテ全ク加兒基質ニ變セシムルコトアリ

今茲ニ論スル所ノ加兒基質ハ概テ石灰及ヒ麻痺濕失亞ノ磷酸鹽或ハ  
 炭酸鹽ナリ故ニ若シ其組織ニ少量ノ稀鹽酸ヲ注キテ夥シク微細ノ泡  
 沫ヲ生スルハ即チ以テ炭酸鹽ノ徵トス但シ滯溜セル腺ノ分泌液ト  
 共ニ加兒基樣變質ヲ致ス者ニ於テハ其腺固有ノ鹽類ヲ以テ成ルコト  
 又既ニ全ク變質セシ所ノ部分ハ更ニ變遷スルコトナク且ツ全ク其部ノ  
 活機ヲ失ヒ管ニ無能無害ノ贅物ト爲テ永ク保存スルノミ是ヲ以テ脂  
 樣變質ト異ナリトス何トナレハ脂樣變質ハ大率皆種々ニ變遷シ易キ  
 者ニシテ或ハ軟化シ或ハ乾酪樣變質或ハ加兒基樣變質ヲ致スコトアル  
 ナ以テナリ加之此加兒基樣變質症ハ組織ヲ侵ス所ノ摸樣ニ於テモ亦  
 脂樣變質症ト異ナリトス何トナレハ脂樣變質症ノ如ク患部ノ造構ヲ  
 撲滅セス亦組織ノ原質ヲ消耗セスシテ只其組織中ニ加兒基質ヲ充盈

スルカ爲ニ聊カ機能ヲ妨クルノミ假令ヒ其部ノ活機ハ悉ク廢滅セラ  
 ル、ニ至ルモ敢テ本來ノ造構ヲ變スルコトナキヲ以テナリ故ニ從前ノ  
 變化ニ由テ已ニ其組織ヲ撲滅セシ者ニ非スハ之ニ稀薄ノ鑛酸少許  
 ナ注キテ其鹽類ヲ溶解スレハ更ニ其部ノ造構ヲ現出シ得ヘシ  
 夫レ上件ノ摸樣ニ據テ考フレハ此加兒基樣變質症中保健ノ其機ニ出  
 ツル者多キニ似タリ何トナレハ加兒基質ヲ沈降シテ以テ將來ノ變化  
 ナ豫防スレハナリ是レ殊ニ他ノ變質症ニ繼發スル者ニ於テ然リトス  
 例之ハ諸焮衝性滲出物及ヒ諸贅生ノ加兒基樣變質ニ於ケルカ如ク一  
 旦已ニ脂樣變質ヲ致シテ後幸ニ此加兒基樣變質ニ終ル者多シ然レ又  
 症ニ隨テハ其害最モ甚シキ者アリ動脈ノ加兒基樣變質ニ於ケルカ如  
 キ是ナリ

動脈加兒基樣變質

凡ソ動脈ノ加兒基樣變質症ニハ猶脂化ニ於ケルカ如ク本發症ト繼發  
 症トノ別アリ乃チ其繼發症ハ動脈アゼロマ症ヨリ之ニ變遷スル所ニ  
 シテ大動脈及ヒ其枝別其他諸處ニ於テ常ニ發見スル者ナリアゼロマ  
 考ス又本發症ハ之ヲ前症ニ比スレハ太ク罕ナリト雖モ高齡自然ノ變  
 化即チ全身ノ活機自ラ減衰スルニ由テ生シ往々之ニ動脈組織ノ消耗  
 性變化或ハ脂樣變質ヲ兼スル者アリ蓋シ此症ハ特ニ全身ノ榮養宜キ  
 ナ得サルニ由ル者ナレハ其變化ヲ致スヤ多少必ス全身ニ及フ故ニ若  
 シ一部ニ之ヲ生スレハ隨テ亦他部ニ之ヲ發見ス又其動脈ハ殊ニ大小  
 中等ノ者ニアリテ四肢ノ動脈及ヒ腦ノ動脈ヲ侵スコト最モ多ク且其動  
 脈組織中殊ニ中膜ヲ侵スヲ常トス而シテ其變化ハ筋纖維ノ細胞ヨリ  
 始マリ先ツ核ノ内外ニ加兒基分子ヲ發見シ而シテ后漸ク增多シテ細  
 胞中ニ充滿シ其細胞ヲシテ一片ノ加兒基質ニ變セシム加之愈々増進ス

ルハ其筋膜中即チテ悉ク加兒基質ニ變セシメ或ハ筋膜ノ諸處一  
 局處ヲ限リテ變質セシメ以テ其筋膜中ニ無數ノ輪狀或ハ板狀ノ加兒  
 基ヲ發見スル者アリ況ヤ其變質機ヲ中膜ヨリ外膜及ヒ内膜ニ及ボシ  
 終ニ其脈管ヲシテ悉ク加兒基質ニ變セシムル者アルニ於テチヤ  
 夫レ斯ノ如ク已ニ變質セシ所ノ脈管ハ彈力及ヒ收縮力ヲ失ヒ且其口  
 徑モ亦減少シ堅硬ニシテ太ク破碎シ易キ一ノ筒管ニ變ス是レ殊ニ外  
 腸骨動脈及ヒ下肢ノ動脈ニ於テ常ニ最モ多ク以テ老人壞疽ノ原因ヲ  
 爲ス一屢之アリ老人壞疽ノ條チ參考スヘシ

第九章

色素變質 ビグメントアリ、  
デゼチレーション

色素變質トハ組織中非常ニ色素ヲ發生スル者ヲ謂フナリ乃チ眞ノ色  
 素ハ總テ血液ノ色素ヨリ來ル者ニシテ生理上自然ノ作用ニ於テハ常

ニ其一半ヲ腎及ヒ肝臟ヨリ排泄シ又一半ヲ組織中ニ沈降シテ連綿保  
 存ス例之ハ眼ノ脈絡膜及ヒ黑人ノ皮膚ノ如キ其最モ著シキ者ナリ蓋  
 シ其部ノ細胞ハ殊ニ血液ヨリ色素ヲ採収シ且之ヲ自己ノ内部ニ貯ヘ  
 其物質ヲシテ化學的ノ變化ヲ以テ各種ノ色素ヲ化成セシムルノ力ヲ  
 具フル者ニ似タリ

又病理上ノ作用ニ於テハ齊シク色素ノ本源ヲ血液ニ資ルト雖モ其組  
 織中色素ヲ浸潤スルヤ細胞ノ分泌機ニ係ル者ハ太ク罕ニシテ通例皆  
 血液循環ノ障礙或ハ血管ノ變ニ基ツキ其血液ヨリ色素ヲ分離シ以テ  
 周圍ノ組織中ニ沈降スルニ由ル者多シ而シテ其ヘモグロビント色素  
 球素トノ抱合ニ由テノ血中ヲ出ツルヤ脈管ノ破綻或ハ充血ノ爲ニ血  
 球及ヒ血漿ヲ滲漏シテ後獨リ組織中ニ滲透シ終ニ以テ色素ヲ生スル  
 者トス然レ此變質症ハ脈管ノ破綻ニ由テ直チニ出血セシ者ニ於テ最

モ多ク而シテ其已ニ出血スルヤ「ヘモグロビン」ハ血球ノ損壞或ハ滲出機ニ由テ忽チ紅血球ヨリ脱出シ血漿ニ混シテ共ニ周圍ノ組織中ニ浸潤スル者ナリ又毫モ尿管ノ破綻スルコトナクシテ然ル者アリ例之ハ厥衝性充血及ヒ器械的ノ充血症ニ於テ組織中ニ物乙液ヲ滲出スル時「ヘモグロビン」ハ尿管中ニ在テ血球ヨリ游離シ其物乙液中ニ溶解シテ尿管ヲ穿透スルコトアルカ如シ其他亦尿管ノ破綻ナク直チニ紅血球ヲ以テ毛細管ノ周壁ヨリ脱出スルコトアリ但シ何レノ方法ニ拘ラス若シ「ヘモグロビン」ヲ滲漏スルコトアレハ直チニ組織中ニ浸潤シ且其細胞及ヒ細胞間質ヲシテ黄色或ハ帶赤褐色ニ變セシム然レ細胞ハ之ヲ細胞間質或ハ膜狀組織或ハ纖維織ノ造構等ニ比スレハ色素ヲ採取スルコト殊ニ速カニシテ又其細胞中獨リ「プロトプラズム」ノミ變色シ核及ヒ衣膜ハ依然トシテ本色ヲ保ツモノナリ

蓋シ其色素タル初メハ宛モ鎔合スルカ如ク平等ニ分布スト雖モ多少時日ヲ經ルノ後自ラ變化シテ漸ク黑色ノ顆粒ト爲リ以テ細胞及ヒ細胞間質中ニ微細ノ帶赤褐色或ハ暗黑色ノ顆粒及ヒ結晶物ヲ發見スルニ至リ其數亦漸ク增多シ且愈大ヲ爲ス者ナリ夫レ斯ノ如ク已ニ滲漏セル「ヘモグロビン」ノ變化ハ即チ化學的ノ變化ニシテ又其化生スル所ノ者ハ即チ「ヘマトイゲン」ナリ抑此「ヘマトイゲン」ナル者ハ殆ト膽液ノ色素ニ似テ共ニ「ヘモグロビン」ヨリ化生スル所ニシテ濃鑛酸ヲ以テ之ヲ試ムレハ亦猶膽液ノ色素ニ於ケルカ如ク酸化ノ度ニ隨テ青色、藍色、薔薇色及ヒ黄色等ノ差異ヲ呈ハシ又此物水、亞兒簡兒、亞的兒及ヒ稀薄ノ鑛酸、亞兒加里水ニハ溶解セスト雖モ苛性亞兒加里ヲ加フレハ溶解シテ赤色ヲ呈ハシ之ヲ「ヘモグロビン」ニ比スレハ炭素ヲ含ムコト殊ニ多ク亦尙鐵分ヲ含蓄ス



又「ヘマトイゲン」ノ顆粒ハ大小一樣ナラス微細ノ分子ヨリ紅血球大ニ至ルノ差アリ乃チ其大ナル者ニハ往々球圓ナル者アリト雖モ通常其形不齊ニシテ邊緣尖起セル者殊ニ多ク其色モ亦種々一樣ナラス或ハ黃色或ハ赤色或ハ褐色或ハ黒色ナル者アリ蓋シ其色ニ各濃淡ノ差アル所以ハ顆粒ノ新古ト之ヲ生スル所ノ組織トニ關係シ其久シキヲ經ルニ隨テ愈々黒色トナル者ニシテ其小ナル顆粒ハ通例曇暗ナリト雖モ稍大ナル者ニハ多少光輝アリ又「ヘマトイゲン」ノ結晶セシ者ハ斜方形ノ稜柱ニシテ美麗ナル帶黃赤色或ハ深紅色ヲ呈ハス者アリ或ハ又却テ茶褐色或ハ黒色ニ近キ者アリ而シテ其結晶ノ形モ亦時トシテハ小版狀或ハ細鍼狀ヲ爲ス者アリト雖モ斯ノ如キハ常ニ之ヲ視ルコト太々稀ナリ第二十二圖但シ此結晶物ハ甚々微細ニシテ顯微鏡ヲ以テ之ヲ檢査スルニ非スハ容易ニ識別シ能ハサル者多ク輒モスレハ誤認シテ

不齊ノ顆粒ト做スコトアリ然レ稀ニハ頗ル大ナル者アリ即チ然ルモ多少透明ニシテ瑩々タル光輝ヲ放ツヲ以テ自ラ判然タリ抑「ヘモグロビン」ヨリ顆粒狀「ヘマトイゲン」ニ變シ或ハ結晶「ヘマトイゲン」ニ變スル所以ハ一ニハ所在ノ組織ニ關係ス故ニ其結晶セシ者ハ腦卵巢ノ如キ部分ニ多ク又肺臟等ノ部分ニ於テハ必ス唯其顆粒狀ノ者ヲ見ルノミ而シテ其顆粒ト結晶物トハ兩ナカラ能ク持久シ得ル者ニシテ「ヘ」之ヲ生スレハ更ニ其形ヲ變スルコトナシ但此色素中極メテ黒色ナル者ハ化學的ノ成分ニ於テ尋常「ヘマトイゲン」ト異ナル者トシ曾テ之ヲ「メラニン」ト名ケリ然レ未タ其異ナル所以ノ確證ヲ得サレハ畢竟唯之ヲ以テ「ヘマトイゲン」ノ久シキヲ經テ多少變化セシ者ト做スヘキノミ乃チ此「メラニン」ナル者ハ之ヲ新生「ヘマトイゲン」ニ比スレバ殊ニ能ク久シキニ堪エ得ル者ニシテ之ニ試藥ヲ用井ルモ容易ニ溶解

シ難シ

抑此色素變質タル固ヨリ普通變質症中ノ一症ナリト雖モ之ヲ他ノ變質症ニ比スレハ其害タル敢テ甚シキ者ニ非ストス故ニ組織ノ細胞内或ハ細胞間ニ色素ヲ存スルモ獨リ之カ爲ニ組織ノ活機及ヒ官能ヲ妨クルニ至ルコトナシ但シ屢之ニ消耗及ヒ官能ノ障礙ヲ併發スルコトアル所以ハ直チニ之ヲ色素ノ現存ニ歸スルヨリハ寧ロ之ヲ發生セシムル所ノ本病ニ歸スルヲ優レリトス又此色素變質症タル殊ニ之ヲ以テ既往ノ病狀ヲ察知スヘキ一ノ要件トス故ニ何レノ部位ニ發見スルモ其色素ハ元ト脉管ヨリ滲漏シタル「ヘモグロビン」ヨリ生スル者ナレハ尋常皆之ヲ以テ血液循環ノ障礙或ハ血管ノ變ヲ徵知スルニ足ル然レ又茲ニ贅生ノ一種色素ヲ以テ成ル者アリ蓋シ其贅生中ニ色素ヲ現存スル所以ハ猶眼ノ脉絡膜ノ細胞ニ於ケルカ如ク細胞ノ撰抽力ヲ以テ

特ニ其色素ヲ血液ヨリ採收スルニ由ル者トス是レ即チ常ニ色素ヲ含蓄セル組織中ニ生スル所ノ贅生ニシテ例之ハ脉絡膜及ヒ表皮ノ内層ニ生スル黒瘤ノ如キ是ナリ黒瘤ノ條ヲ參考スヘシ又黒血病ニ於テ血中色素ヲ增多スル所以ハ局處特ニ脾臟ニ於テ非常ニ之ヲ發生スルニ由ル然レ又所謂エジソン病ニ於テ皮膚ノ變色ヲ致ス所以ノ病理ハ方今尙曖昧ニ屬セリ

夫レ組織中色素ヲ現存スルヤ以テ從前滲血ノ徵候ト爲スヘキ者多シ殊ニ腦ニ於ケルカ如キハ只腦中「マトイゲン」ノ結晶物ヲ留ムルヲ以テ從前毛細管ノ破綻セシコトアル所以ヲ徵知シ卵巢ニ於テ毎月經時卵子ノ脫出ニ次テ輕微ノ出血ヲ起スカ如キモ亦必ス色素ヲ生スルヲ以テ徵トス黃體即チ是ナリ其他器械的ノ血壓及ヒ脈衝ニ於テモ亦隨テ色素ヲ發生スルコト猶胃腸粘膜ノ色素變質ニ於ケルカ如ク以テ從前ノ

景況ヲ察スルニ足ル故ニ上件已ニ論載シタル養生等ニ於ケルノ外此色素ハ血管若クハ血液循環ノ變化ニ由テ生スル者ニシテ其組織中之ヲ存スルヤ膏ニ以テ之ヲ生スル所ノ病狀ヲ證スヘキノミ

(假性色素變質症)又ヘマトイゲン<sup>ノ</sup>有無ニ拘ラス組織ノ變色ヲ致ス者アリ故ニ須ク之ヲ眞ノ色素變質症ト區別セ<sup>ン</sup>ヲ要ス就中其最モ著シク且最モ能ク眞ノ色素變質症ニ似タル者ハ膽液ノ色素ヲ以テ組織中ニ浸潤スル者はナリ蓋シ此色素モ亦「ヘモグロビン」ヨリ生スル者ニシテ宛モ「ヘマトイゲン」ニ似タリ而シテ此變黃症ハ一齊ニ諸組織ヲ侵シテ所謂黃疸ヲ爲ス者アリ或ハ小ナル膽管ノ壅塞ニ由テ獨リ肝臟ノミ變黃スル者アリ是レ肝臟硬結腫ニ於テ屢目撃スル所ナリ然レ此等ノ症ニ於テハ唯、膽液ノ色素ヲ以テ組織ヲ變色セシムルノミ其色素ハ更ニ眞ノ色素按スルニ即チ「ヘマトイゲン」ニ變スルヲナキ者ナリ又銀鹽即チ硝酸銀等ヲ云

フチ持重シ用キテ皮膚ノ變色ヲ致スヤ其色ハ即チ銀ノ組織中ニ沈澱スルニ由ル者ニシテ眞ノ黑色變質症ト異ナリ又壞疽ノ黑色ニ變スルト組織中夥シク血液ヲ滲漏シテ黑色ヲ呈ハストハ共ニ血液ノ色素上硫化水素ノ作用ニアリ又死後偶、肝、脾其他内臟ノ黑色ニ變スル者アル所以ハ齊シク腸中ニ生スル瓦斯ノ作用ニ歸スル者ナリ其他亦常ニ目撃スル所ノ如ク炭ノ分子ヲ吸入シテ肺中黑色ヲ呈ハス者アリ孰レモ皆之ヲ以テ眞ノ色素變質症ト混同スルヲ勿レ

肺臟色素變質

凡ソ諸般ノ臟器中肺臟ニ於ケルカ如ク色素ヲ發見スルヲノ多ク且多量ニ至ル者アルヲナシ而シテ其色素ノ性狀及ヒ本源ニ就テハ古來未ダ疑團ヲ免レサル所アリ何トナレハ肺中常ニ多少ノ色素ヲ含蓄シ年齢ノ長スルニ隨テ漸ク増加スル者ニシテ大人ノ肺中ニハ之ヲ含蓄ス

ルヲ著シト雖モ初生兒及ヒ幼年ノ者ニハ大抵皆之ヲ缺クヲ以テナリ  
 夫レ斯ノ如ク肺中常ニ色素ヲ含蓄スル所以ハ特ニ炭素ノ現存ニ歸ス  
 ル者ニシテ眞ノ色素即チ「ヘマトイゲン」ヲ存スルニ非ス乃チ其炭素ハ  
 薪炭等ノ未タ全ク燃ユ盡クサマル物件ヨリ蒸散シ細分子ト爲テ多少  
 常ニ空氣中ニ混在シ人ノ呼吸ニ隨テ氣管枝ノ末梢ニ入ル者ニシテ其  
 已ニ氣管枝中ニ入ルヤ多クハ粘液球ト結合シテ其細胞中微細ノ黑色  
 顆粒ヲ現ハスニ至ル故ニ早朝灰様黑色ナル痰ヲ咯出スル者常ニ甚ク  
 多ク其痰ヲ檢査スレハ容易ニ其細胞中之ヲ含蓄スルヲ見ルヘシ夫レ  
 斯ノ如ク炭素ノ過半ハ咯痰ヲ以テ排泄セラル、ト雖モ亦深ク氣胞中  
 ニ入ル者多シ然ルキハ咯痰ヲ以テ容易ニ排出シ難シ漸々肺ノ實質ヲ  
 穿透シテ氣胞ノ周壁及ヒ小葉間ノ組織中ニ潛入ス是レ即チ肺中殊ニ  
 此部分ニ於テ色素ヲ現ハス、ト多キ所以ニシテ其分子タル或ハ結締織

ノ細胞中ニ入リ或ハ遊離シテ纖維ノ間ニ散在スルヲ見ルヘシ  
 又炭素分子ノ氣胞周壁ヲ穿透シテ氣胞間ノ組織中ニ入ル所ノ摸樣ハ  
 輓近「ドクトル、クレイン」氏ノ檢査ニ於テ之ヲ説明セリ  
 見即チ同氏カ經驗セシ所ニ於テハ氣胞ノ周壁ニアル結締織ノ分枝細  
 胞ヨリ其一部分延長シテ氣胞内面ノ上皮細胞間ヲ通シ竟ニ氣胞内ニ  
 入ル者アリト云フ是ニ依テ考レハ結締織ノ細胞タル元ト血管ノ周圍  
 ニ始テ水脈ノ起源ヲ爲ス所ノ物乙管中ニ位スルヲ以テ其管口ノ氣胞  
 周壁ニ哆開スルヤ擴張スルニ至テハ其細胞ハ勿論他ノ物質  
 分子等ヲシテ氣胞内ヨリ氣胞間ノ組織中ニモ亦之ヲ通過セシムルニ  
 足ル、ト自ラ亮然タリ乃チ炭素ノ一、ヒ小葉間ノ組織中ニ入ルヤ其一部  
 分ハ其部ノ固定細胞之ヲ採收シ其餘ハ皆水脈ヲ通シテ氣管枝腺中ニ

沈降ス故ニ此腺中ニモ亦黒色ノ色素ヲ發見スルコトアリ  
 以上論載セシ所ノ肺臟色素變質ハ炭素ノ吸入ニ由テ生スル生理的自  
 然ノ作用ニシテ病的變化ニ於テモ亦殆ト之ニ髣髴タル者アリ例之ハ  
 石炭、石類、鐵其他ノ分子ヲ吸入シテ生スル者ノ如キ是ナリ是レ殊ニ抗  
 夫、石工、磨工等ニ於テ屢々目撃スル所ナリ蓋シ此症ニ於テモ亦其細分子  
 ノ氣管枝ニ入ルヤ氣胞ノ周壁ヲ穿透シテ氣胞間ノ組織中ニ沈降ス故  
 ニ抗夫ニ於テハ石炭分子ノ肺中ニ入ルコト夥シク全肺ヲシテ悉ク黒色  
 ニ變セシムルコト屢々之アリ其他石工、磨工等ニ於テモ亦肺中頗ル變黒ス  
 ル者アリト雖モ之ヲ抗夫ニ比スレハ輕少ナリトス但シ此症ニ於テ肺  
 中黒色ヲ呈ハス所以ハ啗ニ吸入セシ所ノ物質ヲ存スルニ由ルノミナ  
 ラス又一ニハ眞ノ「ヘマトイゲン」色素ノ現存ニ歸スル者ナリ何トナレ  
 ハ吸入セル分子ノ爲ニ刺戟セラレテ氣管枝炎、肺ノ小葉炎等ヲ繼發シ

且肺中夥シク纖維素ヲ增生シ終ニ其肺ヲシテ硬結セシメ且穿穴ヲ生  
 シテ其質粘硬ナル纖維組織ニ變シ所謂抗夫肺勞及ヒ而シテ肺中ノ毛  
 細管ハ之カ爲ニ破綻シ或ハ物乙液ヲ滲漏シテ以テ多量ノ色素ヲ沈降  
 スレハナリ是レ其組織中ニ眞ノ「ヘマトイゲン」色素ヲ生スル所以ニシ  
 テ石工及ヒ磨工ノ肺中黒色ヲ現ハス者ハ專ラ此「ヘマトイゲン」ニ歸ス  
 ルコト更ニ疑ヲ容レサル所ナリ  
 凡ソ肺中「ヘマトイゲン」ノ現存ニ由テ色素變質ヲ致スヤ諸他ノ病狀ニ  
 由ル者アリ何トナレハ諸般ノ肺病ニ兼テ色素ヲ發生スル者多キヲ以  
 テナリ例之ハ慢性肺勞ニ於テハ焮衝ノ作用ト贅生核按スルニ結核ノ爲ニ  
 脈管ヲ阻塞スルトニ由テ色素ヲ生ス故ニ其結核狀硬結ノ周圍ニ於テ  
 常ニ色素ノ線條ヲ現ハス者ナリ又急性格魯布樣肺炎ニ於テハ氣胞中  
 ニ出血シテ其血液ハ初メ咯痰ヲシテ鐵色ナラシムルモ終ニ色素ニ變

シテ灰様黒色ナラシムルニ至ル乃チ其痰ヲ検査スレハ新細胞中ニ顆粒狀色素ヲ含蓄スルヲ見ルヘシ加之氣管枝炎ノ咯痰中ニモ亦其細胞中顆粒狀色素ヲ含蓄シ第二十四圖ノ如シ又所謂肺臟褐色硬結症ナル者ハ專ラ色素ノ發生ニ係ル者ナリ本條ヲ參考スヘシ

總テ肺中ノ色素ハ黒色不齊ノ顆粒ニシテ其結晶セシ者罕ナリ而シテ此色素ハ猶炭素ノ如ク水脈ヲ通スルカ故ニ多少ニ拘ラス肺中ニ色素ヲ現ハスルハ亦必ス氣管枝腺ニ之ヲ現ハス者ナリ

第十章

熱性病ニ係ル組織失常ヲ論ス

今茲ニ略説スル所ノ組織ノ變化ハ往々熱病ニ於テ目撃スル所ニシテ從來「パーレンシマ」變質或ハ顆粒狀變質或ハ急性腫或ハ暗腫等ト稱スル者はナリ蓋シ體温頗ル増進スル者即チ發熱スル所ノ諸病中殊ニ其

已ニ血液ノ調和ヲ變セシ者ニ於テハ死後其臟器及ヒ組織ニ甚シキ變化ヲ現ハス者アルヲ普ク通知スル所ナリ乃チ其變化ハ膿毒症、羅斯、室扶斯、泰喪土其他各種ノ熱性病及ヒ急性癱瘓質等ニ於テ之ヲ見ルヲ最も多ク而シテ其組織ヲ變スルノ多少ハ固ヨリ熱度ノ高低ニ關係スル者トス又其臟器中此變化ヲ現ハスヲ最モ著シキ者ハ肝、腎、心筋其他諸筋及ヒ肺臟等ニシテ變化ノ性状ニ於テ大同小異アリト雖モ概テ皆多少腫脹シ其質曇暗ニシテ少シク柔軟トナリ且太ク破潰シ易キニ至リ其部ノ脈管ハ或ハ減少シ或ハ稍增多スル者アリ又顯微鏡ヲ以テ之ヲ検査スレハ其細胞膨大シテ「プロトプラスム」中著シク顆粒狀ヲ現ハシ其甚シキ者ニ至テハ之カ爲ニ隱匿セラレテ細胞中ノ核ヲ識別スルヲ能ハサルヲアリ第二十五圖ノ如シ蓋シ「プロトプラスム」中ノ顆粒ハ之ニ稀醋酸ヲ加フレハ消滅スルカ故ニ概テ皆蛋白質ノ分子タルニ似タリト雖モ

又其變化スルヲ甚シキ者ニ於テハ其顆粒殊ニ大ニシテ醋酸ニ溶解セ  
 ス却テ脂肪質ノ者タルヲ明白ナル者アリ  
 肝臟ハ常ニ此變化ヲ現ハスヲ最モ著シキ者ニシテ其肝少シク膨大シ  
 且之ヲ平常ノ肝臟ニ比スレハ柔軟ニシテ破潰シ易ク又之ヲ半斷スレ  
 ハ其截面曇暗ニシテ赤色ニ乏シク肝ノ細胞モ亦膨脹シテ顆粒狀ヲ呈  
 ハシ加之其中ニ脂肪分子ヲ含蓄スル者多シ 第二十五圖ノ如シ  
 又腎臟ニ於テハ特ニ皮樣部ヲ侵シテ其部膨脹シ且其色曇暗ニシテ破  
 潰シ易ク又マルヒギ一氏體ト三稜體トハ通例皆血管ニ富ム物ナリ是  
 ナ以テ皮樣部ノ蒼白色ナル者ト全ク反對ス又皮樣部細尿管ノ上皮ハ  
 著シク腫脹シテ宛モ腎臟細尿管炎ノ初期ニ於テ見ル所ノ如シ 第八十  
 八圖ノ  
 如シ  
 又心臟ニ於テハ其筋組織ヲ侵シテ微シク不透明蒼白色ニ變シ其質柔

軟ニシテ之ヲ顯微鏡ニ照セハ已ニ筋纖維ノ橫紋ヲ失テ微細ノ顆粒狀  
 ナ現ハス者ナリ即チ斯ノ如キ狀態タルヤ實ニ心ノ収縮力ヲ妨クルヲ  
 知ルヘシ但シ他部ノ諸筋ニ於テモ亦稀ニハ同一ノ變化ヲ現ハスヲア  
 リ  
 又肺中ノ變化ニ就テハ曾テ「ブール」氏之ヲ左ニ記載セリ曰是レ即チ氣  
 胞内上皮ノ腫脹セル者ニシテ其上皮ノ細胞中ニ蛋白質分子ト脂肪分子  
 トヲ含テ以テ著シク顆粒狀ヲ現ハシ而シテ其細胞ハ氣胞ノ周壁ヨリ  
 弛解シ斯ノ如ク多小兩肺ノ全部ヲ侵シテ其肺膨大シ且水腫ヲ帶ヒテ  
 甚ク破潰シ易キ者ナリト  
 但シ其變化ノ本性タル未タ之ヲ審カニスルヲ能ハスト雖モ組織學上  
 ニ之ヲ論スレハ焮衝ノ初期即チ「ウイリシヨウ」氏カ曾テ暗腫ト名ケタル腎  
 臟上皮ノ狀態ニ於テ其細胞中プロトプラスム」ノ膨脹シテ顆粒狀ニ變

スル者ト殆ト同一ノ者ナリ故ニ或ル人ハ之ヲ以テ厥衝性ノ者ト做ス者アリ或ハ又之ニ反シテ發育機ノ退却ニ由テ生スル虛性ノ變形症ナリトス茲ニ又ドクトルウヰツクハム、レグ氏ハ獸類ニ過劇ノ熱度ヲ加ヘテ其變化ヲ經驗シ之ヲ以テ單ニ過熱ノ致ス所ト看做シ他ノ病理學家兩三輩ト共ニ此說ヲ主張セリ然レ此病理論ノ着實ナルヤ否ニ至テハ尙宜シク後來精密ナル試驗ヲ待テ而シテ後之ヲ確定スヘシ故ニ方今此變化ヲ以テ特ニ血液調和ノ變ヲ兼テタル熱病ニ於テ發見スル者トシ且其熱勢ノ極度ニ至テハ細胞ノ脂樣變質ヲ生スル者ト做スノ時ニ在テハ暫ク此變化ヲ現ハス所以ノ理ヲ以テ一ニハ組織中酸化機能ノ障礙ニ歸シ又一ニハ細胞中「プロトプラスム」ノ變形スルヲ過多ナルニ由ル者ト做スモ亦可ナランカ脂樣變質ノ病理ヲ參考スヘシ但シ本性ノ如何ニ拘ラス斯ノ如キ變化ヲ生スルキハ總テ其臟器ノ官

能ヲ妨クルヲ甚シキ者ニシテ急性病ノ經過中殊ニ心臓ヲ侵スキハ必ス危險ノ最大原因ヲ爲スヲ更ニ疑ヲ容レサル所ナリ

第十一章 補給機増盛

凡ソ補給機ノ歇絶或ハ減衰ニ併發スル所ノ病的變化ハ前章已ニ論載セリ故ニ今茲ニハ補給機ノ増盛ニ由テ生スル所ノ變化即チ肥大及ヒ贅生ノ類ヲ論載セントス

肥大症 ヒペルトロフィー

肥大症トハ組織ノ原質増大シ或ハ其數增多シ以テ組織ノ容積カヲ増加スル者ヲ謂フナリ然レ此肥大ヲ致ス所以ハ特ニ各部固有ノ官能ニ關カル所ノ原質ヲ增多スルニアリ例之ハ筋ニ在テハ筋纖維ヲ增多シ腎ニ在テハ細尿管及ヒ血管ノ肥大ヲ致スカ如キ是ナリ蓋シ單ニ原質ノ増大ニ係ル者ハ之ヲ單純肥大症ト名ケ又其數增多シ或ハ新組織ノ發



生ニ係ル者ハ之ヲ増數肥大症或ハ「ヒベルプラシア」成形成素ノ過ト名ク刺ヲ云フ故ニ此肥大症ニ二種アルヤ猶消耗症ニ二症アルカ如ク之ニ其組織ヲ構成セル原質ノ大小ヲ變スル者即チ單純肥大症ト其數ヲ變スル者即チ増數肥大症トノ別アリ

肥大症ハ概チ皆組織ノ機能増進ヨリ生スル者ニシテ其機能ノ増進スル所以ハ自ラ之ヲ要スル所アリテ然ラシムル者トス例之ハ筋ニ在テハ某ノ障礙ヲ除カンカ爲ニ筋力ヲ逞フシ分泌器ニ在テハ多量ノ分泌液ヲ要スルカ爲ニ自ラ其機能増進スルカ如キ是ナリ故ニ斯ノ如キ肥大症ハ固ヨリ保護ノ趣旨ニ出ツル者ニシテ尋常之ヲ名ケテ官能的ノ肥大症ト謂フ但シ此症ハ筋組織ニ發見スルト最モ多シ例之ハ踏舞者ノ腓腸筋及ヒ中空ナル内臟ニ於テ排出ノ通路ヲ壅閉セル者ニ於ケルカ如シ今一々之ヲ枚舉スルハ即チ瓣膜口ノ壅塞或ハ血行ノ中途ニ阻

塞セル所アリテ之カ爲メニ心臟肥大シ、幽門ノ狹窄ニ由テ胃ノ筋膜肥厚シ、腸ノ一部分常ニ狹窄シテ其上部肥厚シ、尿道ノ狹窄ニ由テ膀胱肥大シ、腎ニ在テハ偏腎ヲ失ヒ或ハ偏腎其用ヲ廢シテ偏腎肥大シ又骨ニ在テハ脛骨ニ疾患アリ或ハ之ニ骨傷ヲ冒ムリテ癒着セサルヒハ腓骨ノ肥大ヲ致スカ如キ皆是ナリ總テ斯ノ如キ肥大症ハ機能ノ増進ヲ要スルカ爲ニ其部ノ發育機ヲシテ自ラ盛ナラシムルニ由ル者ナリ

其他又連綿タル刺衝ノ爲ニ臟器ノ肥大症ヲ來タストアリ例之ハ水脈腺、扁桃腺、攝護腺ノ肥大ニ於ケルカ如キ是ナリ或ハ人之ヲ肥大症中ニ算入スト雖モ斯ノ如キ肥大症ニハ偶、癒着性ノ者アルノミ其他ハ殊ニ腫瘤ニ屬スル者ナリ

## 第十二章

贅生 ニユウフナルメーシヨソ

夫レ組織ノ補給機増盛タル前章已ニ論載セシ所ノ如ク管ニ舊原質ノ肥大ヲ爲スノミナラス亦能ク新原質ヲ發生シテ以テ種々ノ組織ヲ構成ス是レ之ヲ養生ト謂フ乃チ此養生ニ燦衝性ト非燦衝性トノ二種アリト雖モ今茲ニハ只燦衝性ナラサル者ノミチ記載セントス但シ燦衝性ノ者ハ本條別ニ之ヲ論載スヘシ

(腫瘍腫瘤ハ非燦衝性養生中ノ多キニ居リ一定ノ大サニ至テ荏苒持久スル者アリト雖モ或ハ又漸々増大シテ止マサル者殊ニ多シ而シテ其生長スルヤ獨リ腫瘤ノ生力ニアリテ體中他部ノ發育ニ拘ハラズ亦敢テ周圍ノ組織ニ關係セサルヲ以テ本性トス

然レ茲ニ又非燦衝性養生ノ一種ニシテ尋常腫瘤ノ名ヲ命シ難キ者アリ例之ハ増數肥大症及ヒ脂肪織ノ增生ニ於ケルカ如キ是ナリ其他煤毒性養生及ヒ臟器ノ癌性浸潤症モ亦稍腫瘤ノ本性ニ背戻スル所アリ

又燦衝性ノ養生ハ或ル刺衝ニ由テ起リ且其刺衝ヲ除ケハ復タ生長セサルヲ以テ非燦衝性ノ者ト異ナリ加之此燦衝性養生タル常ニ太ク變化シ易キ者ニシテ速カニ減退ニ傾クヲアリ或ハ又一ノ組織ヲ構成スルルハ何レノ部分ニ之ヲ生スルモ必ス其部ト造構及ヒ生活ヲ同フシ而シテ漸ク將ニ健康組織ニ近似セントスルノ性質ヲ具フ是ヲ以テ腫瘤ノ如ク絶ヘス生長シ且本然ノ状態ニ背戻スル者ト自ラ異ナリトス

但シ養生ハ其本性ノ何物タルニ拘ハラズ每常必ス其部ニ現存セル組織ノ原質ヨリ發生ス稀ニハ亦轉移セル白血球ヲ以テ故ニ養生ノ病理ヲ究メント欲ヒハ須ラク先ツ健康組織ノ組織學及ヒ其發育ノ模様ヲ通曉セントヲ要ス

(養生原因論) 非燦衝性養生ニ就テ夫レ養生ハ之ヲ生スル所ノ組織原質ノ補給機増盛ニ由ル者ナレハ其原因タル概テ曖昧ニ屬スルヲ論チ埃

サルナリ況ヤ養生ハ唯之ヲ生スル所ノ原質ノ妙機ナリト言フニ過キ  
 サルヲ多キニ於テヤ然ヒ又多少確定シ得ヘキ者アリ故ニ今之ヲ分  
 テ素因ト誘因トノ二種トシ左ニ之ヲ論載セン  
 (其一素因)抑諸般ノ養生ヲ以テ之ヲ體質ニ歸スルヲ古來普通ノ病理論  
 ニシテ乃チ血液調和ノ變或ハ全身生理上機能ノ失常ヲ以テ養生ノ通  
 因トシ加之諸般ノ養生ヲ血管ノ滲出機ニ歸シ其已ニ滲出シタル成形  
 素中自ラ養生ノ原種ヲ貽スル者ト想ヘリ故ニ一般此養生ヲ以テ畜ニ  
 全身ノ血液變敗ニ於ケル局處ノ發顯タルニ過キスト言フニ至レリ又  
 假令方今全ク此臆說ヲ廢棄シ諸種ノ養生ヲ以テ從來其部ニ現存セル  
 細胞ヨリ生スル者ト認知シ得ルモ血液調和ノ變或ハ全身生理上機能  
 ノ失常ヲ以テ養生ノ最大原因ナリトスル者尙衆キニ居リ其原因ヲ體  
 質ニ歸スルヤ獨リ惡性ノ養生ニ限リ之ヲ良性局發ノ養生ト區別シテ

全身症ト謂フ蓋シ其說ノ由テ來ル所ヲ尋ヌレハ特ニ惡性養生ノ臨床  
 實際上性質即チ之ヲ截除スルノ後再發シ易ク且繁殖シ易キト全ク根  
 治スルヲノ難キトニ基ク者ナリ今左ニ之ヲ切論セン  
 或人曰惡生ノ養生ヲ發スルヤ多クハ之ニ先ツテ全身ノ病狀即チ所謂  
 惡液質ヲ呈ハス者ナリト然ヒ又局處ニ養生ヲ發スルノ前一モ惡液質  
 ノ徵候ヲ呈ハサル者却テ多ク又其已ニ養生ニ罹ルモ初メハ通例良  
 善ノ健康ヲ保ツ者ニシテ全身ノ榮養ヲ妨ケ且羸瘦シ以テ所謂惡液質  
 ナ發見スルカ如キハ概皆局處養生ノ繼發症ニシテ其大小及ヒ位置ニ  
 隨テ各輕重ノ差アリトス故ニ患部ヲ障害スルヲ愈廣クシテ夥シク膿  
 液ヲ漏泄シ且水脈系及ヒ消化機ヲ損フヲ愈甚シキ者ニ於テハ之ニ繼  
 發スル所ノ惡液質モ亦隨テ著シキ者ナリ  
 又曰惡性養生ノ繁殖シ易キ所以ノ者ハ通例皆全身ノ惡液質ニ由ルノ

一證ナリト然ニ其惡性發生タル假令ヒ日常ノ實際ニ於テ屢々繁殖スル  
 一アルモ之ヲ以テ一概ニ論定シ難シ何トナレハ續發腫瘤ハ大抵皆本  
 發腫瘤ノ連累ニ係ルヲ以テナリ又始メヨリ繁殖シ易キモ他ニ惡徵ヲ  
 具フルニ非スハ敢テ惡性ノ徵ト爲スヘカラス何トナレハ脂肪癌、織  
 維癌、皮脂腺癌及ヒ疣贅ノ如キハ之ヲ癌腫ニ比スレハ却テ始メヨリ繁  
 殖シ易キヲ以テナリ其他腫瘤ノ繁殖ニ就テハ全身ノ素因ヨリハ却テ  
 局處ノ素因ニ歸スヘキ者尠カラズ例之ハ癩癧ノ如キハ特ニ水脈腺ヲ  
 侵ス者ニシテ其繁殖スルヤ他ノ組織ハ之ヲ免カレテ獨リ骨質ニ連累  
 スルヲ屢々之アリ即チ斯ノ如キ症ニ於テハ專ラ局處ノ素因ニ依テ然ラ  
 シムルニ似タリ

又惡性ノ發生ニ於テ之ヲ截除スルノ後再ヒ其部ニ發生スル所以ハ截  
 除ノ方法完全ナラズ聊カ其種子ヲ遺シテ更ニ繁殖スルニ由ル者ナリ

抑、惡性發生ノ細胞質タル外見ノ境界ヲ超エテ多少近傍ノ組織中ニ蔓  
 延スル者ニシテ其浸潤セル組織ノ性狀ヲ視ルニ毫モ健康組織ニ異ナ  
 ル所ナキカ故ニ腫瘤ノ造構ヲシテ悉ク之ヲ截除セント欲スルモ判然  
 其部ノ境界ヲ定ムルヲ能ハサル者ナリ 惡性ノ條ヲ 故ニ其再發シ易キ  
 ハ諸發生ノ性質ニノ敢テ之ヲ體質ニ歸スルヲ要セス唯局處ノ理由ヲ  
 以テ之ヲ説明シ得ヘシ

又惡性ノ發生ニ於テ每常水脈腺及ヒ内臟ニ同種ノ發生ヲ續發スル所  
 以ノ者ハ強チニ之ヲ體質ニ歸セヨリハ寧ロ本發腫瘤ノ連累トシテ  
 説明スルヲ容易ナリトス 惡性ノ條ニ詳ナリ

其他此書ノ初頭ニ於テ已ニ論說セシ所ノ如ク血液調和ノ變ヲ以テ悉  
 ク之ヲ局處原因ノ續症ト爲スキハ亦以テ腫瘤ノ本源ヲ全身ノ惡液質  
 ニ歸スルノ說ヲ排撃スルニ足ル蓋シ惡性腫瘤ノ發生ニ兼テ血液ノ調

和ヲ變スルヤ腫瘤ヨリ其毒ヲ吸收シ若クハ其原質ヲ血中ニ混シ若クハ漏泄ノ夥多ナルカ爲ニ養液ヲ費耗スルニ由リ或ハ胃ノ消化機、組織ノ同化力若クハ分泌機ノ障礙ニ由リ或ハ直チニ血液製造機能ノ宜シカラサルニ由ル者トス又惡性腫瘤ノ血液病ニ起因スル者アルヤ否之ヲ講究セント欲セハ須ラク白血球ノ轉移按スルニ血中ヨリ組織ヲ以テ多少其發生ヲ贊クル者アルヲ知ルヘシ然レ眞ニ斯ノ如キ者アルヤ未タ其幾許タルヲ言ヒ難シ從來白血球ノ轉移ヲ以テ專ラ焮衝ノ崩芽ヲ爲ス者ト知ルノミ但シ後來ノ検査ニ於テ若シ此白血球ハ獨リ惡性ノ發生ニ在テ良性ノ發生ニナキヲ證明シ得ル者アラハ惡液質ニ由ルノ説ヲシテ再ヒ信用ヲ得セシムルニ至ラシ然レ方今我講究シ得ル所ニ於テハ唯、此白血球ヲ以テ良性惡性ニ拘ラス多少諸發生ノ發育ヲ贊成シ得ル者ト看做スノミ故ニ白血球ノ轉移論ニ基クモ尙未タ惡

性發生ノ原因トシテ惡液質ノ存在ヲ證スルニ足ラサルヲ知ルヘシ又假令ヒ其發生ヲ以テ白血球ノ轉移ニ歸スルモ啻ニ日常ノ實際上ノミナラス之ヲ惡性發生ノ普通經歷ニ徵スルニ各種ノ腫瘤ヲ發生スル所以ハ其轉移シ到ル所ノ組織ニ於テ各、固有ノ性狀ヲ具フルニ由ル者ト豫定スルヲ尤モ穩當ナリトス

但シ上件論スル所ノ如ク惡性ノ發生ニ於テ實驗スル所ノ性狀按スルシ難キ者再發シ易キ者繁殖シ易キ者等ヲ云フヲ說明センカ爲ニ敢テ之ヲ體質ニ歸スルヲ要セスト雖モ茲ニ又其性ノ善惡ニ拘ハラス眞ニ體質ニ起因スル者少カラス故ニ惡性腫瘤ヲ續發スル所以ノ理ヲ說明セント欲セハ常ニ須ラクスノ如キ體質ニ起因スル者アルヲ參考ス可シ何トナレハ其續發腫瘤タル概チ本發腫瘤ノ連累ニ由ルト雖モ元ト之ヲ發生セシメシ所ノ同原因ヲ以テ更ニ一個ノ惡性腫瘤ヲ續發スル者モ亦往々之アルヲ

以テナリ但シ其體質タル或ハ全身諸器ノ一種固有性ニシテ弘ク關涉スル者タルヤ或ハ又本來局處ニ限リテ贅生ニ罹ル所ノ組織ノ性質ニアリ以テ甲ノ組織ヲシテ乙ノ組織ヨリモ殊ニ贅生ニ罹リ易カラシムル者タルヤ未タ審カナラスト雖モ各部組織ノ性質ニ歸スルヲ殊ニ穩當ナリトス

抑遺傳ノ素因アリテ以テ贅生ノ發育ヲ主宰スルヤ是亦一般ノ體質ニ關係セヌシテ却テ局處ニ其素因ヲ具フル者ニ似タリ例之ハ瘰癧質ノ如キハ固ヨリ著シキ素因病ニシテ輕微ノ刺衝ニ由ルモ忽チ水脈腺ノ腫大ヲ起ス所以ハ蓋シ其腺固有ノ素質ニアリテ一般ノ體質ニ歸スル者ニ非ス其他諸般ノ素質ニ於ケルモ亦然リ乃チ母斑及皮膚、子宮、乳房、胃、等ニ生スル所ノ腫瘤モ亦皆往々遺傳ノ素質ニ係ル者アルヲ疑ナシト雖モ其素因ハ各贅生ニ罹ル所ノ組織ニ具ハル者トス又往々經驗ス

ル所ノ如ク各種ノ組織ニ於テ殊ニ贅生ニ罹リ易キ者アル所以ハ更ニ局處ノ素因ニ歸スル者ナリ例之ハ骨系統ハ固ヨリ贅生ニ罹リ易キ者ニシテ他ノ組織ニ於テハ一モ之ヲ發セサルニ殆ト全身諸骨ニ蔓延スルヲアルカ如シ是レ唯骨系統ノミナラス他ノ組織ニ於ケルモ亦然リトス

(誘因)凡ソ贅生ニ於テハ正シク誘因ノ存スルアリテ來ルヲ之ヲ素因ニ比スレハ殊ニ證明シ易シ乃チ其誘因タル或ハ直チニ組織ヲ刺衝シテ以テ其部ノ發育機ヲ増盛セシムル者アリ或ハ本發腫瘤ヨリ其原種ノ自ラ轉移シ或ハ血管水脈等ヲ以テ之ヲ運輸シ到ル處其組織中ニ繁殖シテ以テ續發腫瘤ノ中心ヲ爲ス者アリ其直チニ組織ヲ刺衝スル者ハ之ヲ器械的刺衝ト化學的刺衝トニ歸ス然レ尋常ノ器械的刺衝及ヒ化學的刺衝ハ之ヲ以テ贅生無二ノ原因ト爲シ難シ畢竟斯ノ如キ單純ノ

刺衝ハ管ニ脈衝性贅生ノ原因ヲ爲スノミ之ニ反シテ非脈衝性ノ贅生即チ腫瘤ハ專ラ其組織固有ノ素質ニ由ル者ニシテ刺衝ノ如キハ管ニ以テ之ヲ誘發セシムルニ過サルナリ今茲ニ單純ノ刺衝ニ起因スル者ヲ舉クレハ即チ烟管ノ刺衝ニ由テ喫烟家ノ唇ニ上皮癌ヲ生シ又煤ノ刺衝ニ由テ烟筒掃除人ノ陰莖及ヒ陰囊ニ之ヲ生スルカ如キ是ナリ其他又衝突或ハ創傷ノ爲ニ腫瘤ヲ繼發セシ者數多之アルニ似タリト雖モ斯ノ如キハ更ニ原因ノ存スルアリテ共ニ之ヲ誘發セシ者タルヲ殆ト疑ナシ又曾テ「ウイルシヨウ」氏カ説明セシ所ノ如ク身體中殊ニ外來ノ刺衝ニ感觸シ易キ臟器例之ハ胃、子宮、乳腺及ヒ直腸等ノ如キハ最モ贅生ニ罹リ易キ者ナリ

又原種ノ轉移ニ由テ贅生ヲ發生スルヤ惡性腫瘤ノ經歷ニ於テ自ラ照々タリ蓋シ屢々腫瘤ヲ續發スル所以ハ概チ皆之ニ由ル者ニシテ乃チ其

原種ハ本發腫瘤ヨリ自ラ轉移シ或ハ血液及ヒ淋發ト共ニ運輸セラレ其到ル所ノ組織中ニ分裂繁殖シ以テ之ヲ續發セシムル者ナリ

茲ニ又曾テ「ドクトル、クレイトン」氏カ説明セシ所ノ如ク本發腫瘤ヨリ運輸セラレ、所ノ原種細胞或ハ猶精蟲ノ卵子ニ於ケルカ如ク其到

ル處組織ノ細胞ヲ挑撥シテ腫瘤ヲ續生セシムヘキ勢力ヲ有スル者タルヲ尤モ信スルニ堪エタリ故ニ之ヲ「スベルマツク」精液ノ義作用ト名ケリ

乃チ斯ノ如キ症ニ於テハ本發腫瘤ト續發腫瘤トヲ以テ之ヲ父母ト子孫トニ喻フ何惡性ノ條ニ於テ更ニ之ヲ論述スヘシ

(發育機)夫レ贅生ノ發育機ヲ究メント欲セハ須ク先ツ前條論定セシ所ノ如ク贅生ハ總テ從來其部ニ現存セル細胞質ヨリ生シ尙且其發育ニ於テモ亦自ラ其部ノ健康組織ニ近似スル者ニシテ即チ病的贅生ハ各健康組織ノ原形ヲ具フル者タルヲ認知スヘシ

凡ソ諸組織中最モ贅生ニ罹リ易キ者ハ普通結締織及ヒ之ト親密ナル關係ヲ有スル所ノ血管及ヒ水脈系ノ細胞ナリトス乃チ今茲ニ普通結締織ト稱スル所ノ者ハ血管ヲ圍繞シテ以テ全身遍ク分布スル所ノ結締織ヲ謂フナリ其已ニ韌帶軟骨剛骨等ヲ化成セシ者ニ非サルコト知ルヘシ抑此普通結締織ノ細胞ニ二種アリ一チ固定細胞即チ結締球トシ一チ移動細胞トス想フニ此移動細胞ハ本來遊走白血球ナル者ナランカ而シテ此結締織ノ細胞ハ水脈内ノ上皮ト親シク相關涉ス何トナレハ水脈ハ元ト結締織中ニ瀰蔓セル物乙管ヨリ始マルヲ以テナリ加之水脈内ノ上皮ト血管内ノ上皮トハ兩ナカラ其生理的ノ官能ニ於テ結締織ノ固定細胞ト一致ス但シ二種ノ細胞ハ此普通結締織ヨリ贅生ヲ發スルニ當テ各何的ノ作用ヲ爲スヤ方今未タ之ヲ精究スルヲ得スト雖モ專ラ之ヲ發生セシムル者ハ即チ移動細胞ナリトス何トナレハ此細

胞ハ性最モ活潑ニシテ且最モ分裂繁殖シ易キヲ以テナリ加之此移動細胞ハ血管ヨリ轉移シ來ル所ノ白血球ヲ以テ其數現ニ增多スルコトアルニ似タリ其他結締織ノ固定細胞、血管及ヒ水脈管内ノ上皮モ亦假令ヒ其成形力ニ於テハ移動細胞ニ劣ルモ時トシテ其性變シテ活潑トナリ以テ新生細胞ヲ繁殖シ得ル者タルコト知ルヘシ蓋シ固定細胞ノ繁殖スルヤ「ヴァキニチレ」シヨ卷ノ一細胞繁殖ニ由ル者太タ多シ第二圖而シテ此内生法ヲ以テ繁殖スル所ノ細胞ハ細胞繁殖ノ條ニ於テ已ニ論載セシ所ノ如ク其稟性概チ母胞ト異ナリトス又此兩種ノ細胞タル假令ヒ贅生ノ發育機ニ於テ各相互ニ何等ノ作用ヲ爲スニモセヨ其兩力相合スルヤ以テ一ノ新組織ヲ構成スルニ足ル者ニシテ其組織ハ無數細小ノ圓形細胞ヲ以テ成リ細胞ノ直徑大約千八百分應ノ一ヨリ二千五分應ノ一ニ至リ其内ニ圓キ大核ヲ含蓄スル者多シト雖モ其分界判然



タラサルカ故ニ之ニ水或ハ醋酸ヲ加フルニ非スノハ鑒別シ難シ又此細胞ハ各箇衣膜ヲ具ヘス只些少ノ「プロトプラスム」ヲ以テ成ル者ニシテ概テ皆相互ニ密接ス第二十六圖故ニ其形全ク肉芽ノ細胞或ハ胚胎ノ速カニ發生セル結締織中ノ細胞ニ同シ然レ又症ニ隨テハ次第ニ其「プロトプラスム」ヲ增多シ細胞ハ分裂セシテ獨リ其内ノ核ノミ分裂シ一個數核ヲ藏スル所ノ大ナル「プロトプラスム」ノ凝塊ヲ生スルコアリ是レ即チ幼兒ノ骨髓及ヒ諸般ノ結締織瘤ニ於テ視ル所ニシテ之ヲ巨胞或ハ髓樣細胞ト名ク髓樣結締織瘤ノ條第三十三圖ヲ參考ス可シ

夫レ發育機ノ初メニ於テハ斯ノ如ク皆未熟組織ヲ以テ成リ而シテ後漸ク養生固有ノ組織ニ變スル者ナレハ其初期ニ於テ豫メ纖維瘤タルヤ或ハ結締織瘤タルヤ或ハ又軟骨瘤タルヤヲ卜定スルコト太々難シ又發育機ノ第二期ハ即チ此未熟組織ヨリ各種一定ノ養生組織ヲ發生ス

ルノ時ニシテハ猶胚胎ノ未熟結締織ヨリ粘膜組織、軟骨、剛骨等ヲ發生スルカ如シ而シテ其養生組織ハ多少各種健康組織ノ結締織ニ類似ス但シ初期ノ細胞ヲ以テ一腫瘤中皆同一ノ組織ヲ構成スルキハ單純ノ腫瘤ヲ生スト雖モ甲乙各別種ノ組織ヲ構成スルキハ複雑ノ腫瘤ヲ生ス是レ即チ一ノ腫瘤中二種或ハ其餘ノ造構ヲ見ルコトアル所以ニシテ例之ハ結締織瘤ト脂瘤ト合併シ又軟骨瘤ト粘液瘤ト合併スル等ノ如キ是ナリ夫レ斯ク論及スト雖モ何ヲ以テ其未熟ナル細胞ニ於ケル將來ノ發育ヲ卜定スヘキヤ又何故ニ同一ノ細胞ヲ以テ斯ノ如ク別種ノ腫瘤ヲ發生セシムルヤノ問題ニ至テハ猶胚胎ノ細胞ヲ見テ終ニ何的ノ組織ニ化スヘキ者タルコトヲ卜定スルカ如ク決シテ我輩人智ノ及フ所ニ非サルナリ

凡ソ諸組織中最モ養生ニ罹リ易キ者ハ普通結締織ニシテ之ニ亞ク者

ハ獨リ上皮アルノミ乃チ此上皮ニ於テモ亦猶常ニ結締織ヨリ結締織  
 瘤ヲ生スルカ如ク上皮ノ細胞ヨリ生スル所ノ贅生ハ通例皆上皮ニ近  
 似ス但シ上皮ニ聯續スル所ノ贅生ハ皆單ニ從來其部ニ現存セル上皮  
 細胞ヨリ生スル者タルヤ否之ヲ明言シ難シ故ニ後來上皮ノ發育及ヒ  
 其補給機ニ就テ尙一層精密ニ其生理ヲ究メ得ルノ時ヲ待テ之ニ答ヘ  
 シノミ然ニ常ニ上皮ヲ生スルハ全ク唯、上皮細胞ノ繁殖ニ由ルノミナ  
 ラス結締織ノ移動細胞モ亦上皮ノ細胞ニ抵觸スレハ隨テ上皮ニ化ス  
 ル者トス是ヲ以テ考レハ上皮ニ聯續スル所ノ贅生ニ於テハ結締織ノ  
 移動細胞ヲ以テ其一部ヲ贅成シ得ルヲ必然ナリ乃チ其上皮ヨリ發生ス  
 ルヤ單純分裂法或ハ又「グァキユチネーシヨ」ヲ以テ其細胞ヲ繁殖スルニ由  
 ル者ナリ今茲ニ「ドクトル、グレイト」氏カ肝臟續發腫瘤ノ實驗說千八百七  
 十四年刊行ノ「チ引テ一證トス曾テ同氏ハ肝臟中ニ發見セル種々ノ續  
 發腫瘤論ニ見ユ

發腫瘤ヲ檢査セシニ孰レモ皆「グァキユチネーシヨ」ヲ以テ直チニ肝臟細胞  
 ヨリ生スルヲ目撃シ是ニ依テ其肝臟細胞ハ本發腫瘤ノ性状ニ隨テ  
 上皮細胞或ハ結締織細胞或ハ紡錘狀細胞等ヲ化生シ得ル者タルヲチ  
 確定セリ  
 其他ノ組織例之ハ筋及ヒ神經ノ如キハ之ヲ結締織及ヒ上皮ニ比スレ  
 ハ贅生ニ罹ルヲ太々稀ナリ況ヤ其神經組織ニ於テチヤ果シテ之ヲ生  
 スルヲアルヤ否確信シ難シ  
 今又贅生ト之ヲ生スル所ノ組織トニ各異同アルニ隨ヒ之ヲ同性異性  
 ノ二種ニ分チ贅生ノ造構及ヒ發育機ニ於テ之ヲ生スル所ノ組織ニ似  
 タル者之ヲ同性トシ又其組織スル者ヲ異性トス例之ハ一ノ軟骨瘤ニ  
 シテ軟骨ニ生スルキハ固ヨリ同性ナリト雖モ耳下腺ノ如キ他ノ組織  
 ニ生スルキハ之ヲ異性ト爲スカ如ク同一ノ腫瘤ニシテ或ハ同性或ハ

異性ノ別アリ故ニ純粹ノ同性腫瘍ハ畢竟唯局處組織ノ非常ニ增生セシ者タルニ過キス若シ聊カ所在ノ組織ト其性状ヲ異ニスルキハ之ヲ異性トス然ニ其異性ナル者ハ獨リ養生ノ組織ト之ヲ生スル所ノ組織ト異ナル者ニ限ラス總テ所在ノ組織ト異ナリ且直チニ其組織ヨリ生セサル者ハ亦之ヲ異性ト謂フ即チ或ル癌腫固有ノ異性タル所以ノ者是ナリ譬ハ茲ニ一ノ癌腫アリ元ト上皮ヨリ生セシト明白ナルモ其生長スルニ至テ上皮外ニ蔓延スルキハ之ヲ以テ異性トスルカ如シ癌ノ條ヲ參考 其他原種ノ自ラ轉移シ或ハ血管水脈等ヲ以テ之ヲ他ノ部位ヨリ運輸シ來テ所在ノ組織ト異ナル所ノ一組織ヲ發生スル所ノ養生モ亦齊シク此異性ニ屬ス蓋シ異性ハ屢惡性腫瘍ノ徵候タルヲアリト雖モ諸般ノ異性腫瘍ヲ以テ悉ク之ヲ惡性ノ者ト看做ス可カラズ況ヤ其原形ト齟齬スルコト些々タル者ニ於テチヤ決シテ惡性ノ徵候ニ非サ

ルナリ又初メ同性ノ腫瘍ニシテ後異性トナルヲアリ是レ殊ニ經久ナル良性腫瘍ノ俄カニ惡性ニ變スル者ニ於テ見ル所ナリ故ニ其同性異性ノ別ハ專ラ之ヲ以テ腫瘍ノ良惡二性ヲ判決スルニ足ラサル者ナリ〔養生ト周圍ノ組織トノ關係ヲ論ス凡ソ腫瘍ノ近傍組織ニ於ケルヤ專ラ生長ノ模様ニ拘ハリテ各其趣ヲ異ニス例之ハ獨リ腫瘍ヲ構成セル細胞ノ繁殖ニ由テ生長スル者ノ如キハ甯ニ近傍組織ヲ押壓シ其位置ヲ轉セシムルノミ而シテ後漸ク發育ヲ遂グルキハ終ニ纖維織ヲ以テ被覆セラレ全ク別個ノ者トナルヲアリ是レ即チ脂肪瘤、纖維瘤、軟骨瘤等ニ於テ常ニ見ル所ノ者ナリ又周壁ノ組織中ニ繁殖シテ邊緣ヨリ生長スル者ノ如キハ養生ト之ヲ包藏スル組織トノ分界ヲ失フニ至ル故ニ假令ヒ肉眼ニハ略境界アルカ如ク見ユルモ顯微鏡ヲ以テ之ヲ檢査スレハ周圍ノ組織中猶養生ノ原質ヲ發明シ得可シ是レ即チ結締組織及

ヒ癌腫ノ類ニ於テ常ニ見ル所ノ者ニシテ截除ノ後更ニ再發スル所以ノ通因ナリ其他又管ニ周壁ノ組織中ニ繁殖スルノミナラス尙且他ノ造構ニ連累シテ愈々廣大ニ至ル者アリ此症ハ概テ悪性腫瘤ニ於テ發見スル所ナリ悪性ノ條ヲ參考ス可シ

(消退機)凡ソ贅生ハ一旦發育チ遂クルノ后早晚再ヒ消退ニ傾ク者ニシテ即チ保存ノ長短ハ生長ノ緩急及ヒ活機ノ度ニ隨テ各同シカラス其生長スルヲ愈々速カニシテ且其構成セル組織ノ活機愈々鈍ナル者ハ保存ノ時間愈々短少ニシテ忽チ消退機ヲ現ハスチ常トス例之ハ癌腫及ヒ結締織瘤ハ速カニ生長シ且概テ細胞ヲ以テ成ル者ニシテ速カニ變質シ亦永ク其原種ヲ保存スルヲ能ハスシテ忽チ活機ヲ失フニ至リ又骨瘤ハ之ニ反シテ其生長スルヲ緩徐ナリト雖モ其組織中頗ル活機ヲ具フルカ故ニ保存ノ時間最モ長クシテ容易ニ消退ニ傾カス亦久シク變

質スルヲナキカ如シ

抑此消退機ハ健康組織ノ變化ト略ホ一致スル所アリ例之ハ血液ノ供給減乏シテ其瘤脂化シ隨テ亦更ニ軟化乾酪樣變質加兒基樣變質等ノ如キ種々ノ轉歸ヲ現ハシ或ハ又色素變質膠樣變質及ヒ粘液樣變質ヲ致スヲアルカ如シ其他贅生モ亦焮衝ヲ起スヲアリ

(悪性)夫レ悪性トハ何ソヤ曰腫瘤ヲ截除スルノ後其部或ハ遠隔ノ部ニ於テ再ヒ之ヲ發スルノ固有性はナリ但シ悪性ト癌性トハ必ス之ヲ混同ス可カラス抑悪性ナル名義ハ固ヨリ臨床實際上ニ於テ贅生ノ性狀ヲ示ス者ニシテ獨リ癌腫ニ限ル可カラス何トナレハ結締織瘤ノ如キモ亦齊シク悪性ナル者多キヲ以テナリ况ヤ之ヲ癌腫ニ比スレハ其猖獗ヲ逞フスルヲ殊ニ甚シキ者アルニ於テチヤ又癌腫ナル名義ハ本來唯一一定ノ病的組織ヲ示スニ過キス自ラ一種ノ贅生ニ限ル者ナリ